

第116図 111区基本層序図

## 198-OO

西北部で検出した不整梢円形の土坑である。長軸が西南方向を指す。肩部長径2.2m・短径1.0m、底部長径1.8m・短径0.8m、深度0.34mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層で、褐灰色粘土(10YR4/1)である。近世以降の陶磁器が出土した。

## 199-OO

北部で検出した梢円形の土坑である。長軸が西北方向を指す。上部は202-O Sに切られている。肩部長径0.8m・短径0.6m、底部長径0.6m・短径0.4m、深度0.32mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5Y R5/1)である。遺物は出土しなかった。

## 200-OO

東隅部で検出した不整隅丸四角形の土坑である。東側は調査区外へ広がっている。肩部長径1.0m・短径0.8m、底部長径0.9m・短径0.6m、深度0.16mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(10Y R4/1)である。遺物は出土しなかった。

## 201-OO

中央部で検出した不整梢円形の土坑である。長軸が西方向を指す。肩部長径1.2m・短径0.6m、底部長径0.9m・短径0.3m、深度0.13mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、褐灰色土(7.5Y R4/1)である。遺物は出土しなかった。

## 202-O S

北部で検出した西北西方向に直線的に延びる溝である。東南東端は73区の202-O Sに続き、西北西端は190-O Lにつながる。検出長15.5m、幅1.5m、深度0.07mを測る。断面形状は口の開いたU字形である。埋土は1層であり、灰色土(5Y 6/1)である。近世以

降の陶磁器が出土した。

203-O S

東南部で検出した、東南と西南方向へ分かれて屈曲して延びる溝である。東南端は調査区外へ延びるが、不明である。西南端は攪乱坑により切られている。検出長7.0m、幅1.5m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色粘土（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

204-O S

西北端部で検出した北北西方向に直線的に延びる鋼土を埋めた溝である。北北西端は112区の204-O Sに続き、南南東端で消滅する。検出長3.0m、幅0.6m、深度0.48mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色粘土（5Y4/1）である。遺物は出土しなかった。

205-O Z

南部で検出した鋤溝群である。条数は3条あり、南南東から北北西に延びている。長さ2.0~5.5m、幅0.4~0.5m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土（7.5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

190-O L

西北端部で検出した池である。検出面での平面形状は隅丸長方形である。検出長辺8.5m以上、短辺4.5m以上、深度0.4mを測る。埋土は2層で、下から褐灰色粘土（10YR5/0:微砂混じり）が0.1m、黄色粘土（2.5Y8/6:灰色土のブロック混じり）が0.3mである。近世以降の陶磁器が出土した。

206-O P

中央部で検出した円形のピットである。直径0.3m、深度0.31mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（7.5YR6/2）である。遺物は出土しなかった。

207-O P

中央部で検出した円形のピットである。直径0.3m、深度0.23mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（7.5YR6/2）である。遺物は出土しなかった。

208-O P

北北東部で検出した円形のピットである。直径0.3m、深度0.21mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（7.5YR6/2）である。遺物は出土しなかった。

## 209-O B - a

中央部で検出した円形のピットである。直径0.4m、深度0.32mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（7.5Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

## 209-O B - b

中央部で検出した円形のピットである。直径0.5m、深度0.39mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（7.5Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

## 209-O B - c

中央部で検出した円形のピットである。直径0.3m、深度0.35mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（7.5Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

## 209-O B - d

中央部で検出した円形のピットである。直径0.4m、深度0.32mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（7.5Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

## 209-O B - e

中央部で検出した円形のピットである。直径0.4m、深度0.35mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（7.5Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

## 209-O B - f

中央部で検出した円形のピットである。直径0.4m、深度0.4mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（7.5Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

## 209-O B - g

中央部で検出した不整円形のピットである。直径0.1m、深度0.25mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（7.5Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

## 209-O B - h

中央部で検出した不整梢円形のピットである。長径0.5m・短径0.4m、深度0.05mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（7.5Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

## 209-O B - i

中央部で検出した円形のピットである。直径0.2m、深度0.14mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（7.5Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

## 209-O B - j

中央部で検出した円形のピットである。直径0.2m、深度0.05mを測る。埋土は1層で、灰褐色土（7.5Y R6/2）である。遺物は出土しなかった。

※209-O B-a~jで、掘立柱建物1棟が建つ。

#### 210-O P

北北東端部で検出した円形のピットである。直径0.2m、深度0.11mを測る。埋土は1層で、灰褐色土(7.5Y R6/2)である。遺物は出土しなかった。

#### 211-O P

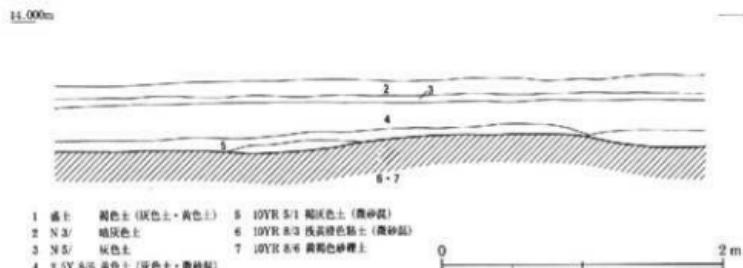
北北東端部で検出した円形のピットである。直径0.2m、深度0.11mを測る。埋土は1層で、灰褐色土(7.5Y R6/2)である。遺物は出土しなかった。

### 第13項 112区

#### 1 位置と層序 (第155・157図)

安松遺跡の中央部に当たり、70区の西南に隣接している。調査直前は工場と民家であった。標高は15.20mである。調査区の形状は長辺の一辺が西南を向いた長方形である。調査面積は1076m<sup>2</sup>である。

調査により確認した土層は基本的に7層あるが、遺物は出土しなかった。遺構の検出面は1面で、第6層上面で井戸、溝、鋤溝、段、池を検出した。



第157図 112区基本層序図

**第1層** 全域に水平堆積している。層厚は1.6mを測る。現代の盛土である。遺物は出土しなかった。

**第2層** 南部が低くなっている。190-O Lを境にして0.5mの標高差がある。上面の高さは13.60mである。層厚は0.15mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

**第3層** 190-O Lより東北方向に水平堆積している。上面の高さは13.45mである。層厚は0.05mを測る。耕作土である。遺物は出土しなかった。

**第4層** 190-O Lより東北方向に水平堆積している。上面の高さは13.40mである。層厚は0.2mを測る。190-O Lの埋土である。遺物は出土しなかった。

**第5層** 190-O Lより東北方向に水平堆積している。上面の高さは13.30mである。層厚は0.2mを測る。190-O Lの埋土である。遺物は出土しなかった。

**第6層** 190-O Lより東北方向に水平堆積している。上面の高さは13.20mである。層厚は0.3mを測る。地山である。遺物は出土しなかった。

**第7層** 西に向かって低くなり、全域に広がっている。上面の高さは13.10mである。層厚は0.3mを測る。段丘疊層である。遺物は出土しなかった。

## 2 遺構（第158図）

### 218-OW

西北部で検出した不整梢円形の井戸である。長軸が東西方向を指す。断面形状は2段でテラスを有し、上部は逆台形、下部は未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。肩部長径2.9m・短径2.7m、2段目長径2.3m・短径2.1m、底部長径1.3m・短径1.2m・深度1.0m以上を測る。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（5Y4/1）である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦が出土した。

### 219-OW

南部で検出した不整梢円形の井戸である。素掘ではなく、長軸が西南～東北の長方形の石組があり、長辺2.2m、短辺1.5m、深度0.1mを測る。この内側に木枠があった。断面形状は2段であり、未完掘で不明であるが、調査終了段階ではU字形であった。肩部長径3.1m・短径3.0m、2段目長径2.8m・短径2.5m、底部長径2.6m・短径2.1m・深度1.0m以上を測る。確認した埋土は1層であり、灰色粘土（7.5Y4/1）である。遺物は近世以降の陶磁器・瓦が出土した。

### 220-O S

中央部で検出した東北方向に直線的に延びる溝である。検出長8.0m、幅0.6m、深度

0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

#### 221-OS

東部で検出した西南方向に直線的に延びる溝である。東北端は70区の221-OSに続き、西南端は222-OSに切られる。検出長13.0m、幅0.5m、深度0.3mを測る。断面形状はU字形である。埋土は3層ある。遺物は出土しなかった。

#### 222-OS

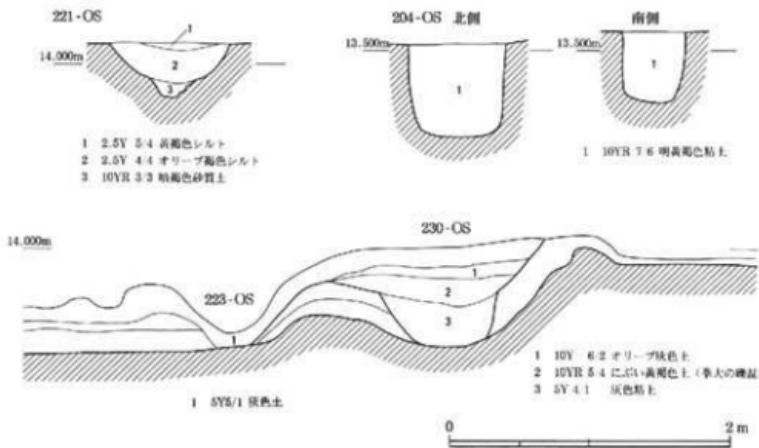
東部で検出した屈曲して東南方向に延びる、底辺が西南を向いたL字形の溝である。東南端は221-OSを切り、西南端は220-OSに切られる。検出長10.0m、幅0.5m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、オリーブ褐色シルト（2.5Y4/4:マンガン粒混じり）である。遺物は出土しなかった。

#### 223-OS

中央部から南部まで東南方向に直線的に延びる溝である。途中、数カ所で途切れ、西北端は113区の223-OSに続く。検出長23.0m、幅0.4m、深度0.3mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層である。遺物は出土しなかった。

#### 224-OS

中央部で検出した西南方向に延びる、中央部で緩く屈曲する溝である。西南部は230-



第158図 112区204・221・223・230-OS断面図

O Sに切られる。検出長5.0m、幅0.5m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、オリーブ褐色シルト（2.5Y4/4:マンガン粒混じり）である。遺物は出土しなかった。

## 204-O S

南部から西部まで西北方向に直線的に延びる鋼土を埋めた溝である。190-O Lの底部で検出し、東南端は111区の204-O Sに続く。検出長30.0m、幅1.0m、深度0.46mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層である。遺物は出土しなかった。

## 225-O S

中央部で検出した西南方向にはば直線的に延びる溝である。東北端は70区に延びるが、不明である。西南端は攪乱坑により切られている。検出長8.0m、幅1.0m、深度0.05mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

## 226-O S

北部で検出した西南方向にはば直線的に延びる溝である。東北端は70区の226-O Sに続き、西南端は攪乱坑により切られている。検出長5.0m、幅0.4m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

## 227-O S

東北部で検出した西南方向に直線的に延びる溝である。東北端は70区の227-O Sに続き、西南端は218-OWにつきあたって途切れている。検出長5.5m、幅0.5m、深度0.06mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y6/1）である。遺物は出土しなかった。

## 228-O S

北部から西北部まで東北方向に北端寄りで検出した東北から西南方向に直線的に延びる溝である。西南端は230-O Sに切られ、東北部は東南方向へ短く屈曲し、70区に延びるが不明である。検出長14.5m、幅0.6m、深度0.1mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層であり、灰色土（5Y5/1）である。遺物は出土しなかった。

## 229-O S

東部で検出した屈曲して延びる、底辺が南を向いたL字形の溝である。東北端は70区の229-O Sに続き、中央寄りで112区の221-O Sと重複する。検出長5.0m、幅1.0m、深

度0.31mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土(5Y6/1)である。遺物は出土しなかった。

#### 230-O S

南南東部から北北西部まで南南東方向に直線的に延びる溝である。溝側面に護岸のため杭を打っている。北北端は直接ではないが、113区の230-O Sに続く。検出長30.0m、幅0.6~1.5m、深度0.07mを測る。断面形状はU字形である。埋土は3層ある。遺物は出土しなかった。

#### 231-O S

東南端部で検出した西北方向に直線的に延びる溝である。東南端は73区に延びるが、不明である。検出長1.5m、幅0.5m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土(5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。

#### 232-O S

北部で検出した東南方向に屈曲して延びる溝である。東南端は227-O Sに切られる。検出長4.0m、幅0.5m、深度0.05mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層であり、灰色土(7.5Y5/1)である。遺物は出土しなかった。

#### 233-O Z

東端部で検出した動溝群である。条数は2条あり、南から北に延びている。長さ1.0m、幅0.3m、深度0.31mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は1層で、灰色土(5Y4/1)である。遺物は出土しなかった。

#### 234-O Z

北部寄りで検出した黄色粘土(2.5Y8/6)を削り込んだ段である。227-O Sと平行する。西北側が低くなってしまっており、高低差は0.2mである。段の上面は14.13mで、割合平坦である。下面是13.93mで、同じく平坦である。低い部分には灰色土(N5/)が堆積していた。70区へ延びる。

#### 190-O L

西南で検出した池である。調査区内で検出した平面形状は底辺が西北を向いた台形である。底辺の長さ12.5m、高さ47.0m、上辺の長さ3.0m、深度0.4mを測る。埋土は2層で、下から

褐色粘土(10YR5/0:微砂混じり)が0.1m、黄色土(5Y8/6:灰色土ブロック混じり)が0.3mである。遺物は近世以降の陶磁器が出土した。

## 第14項 123区

## 1 位置と層序（第159図）

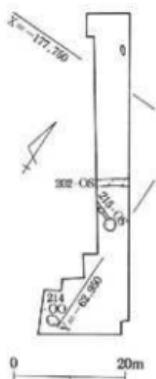
この調査区は、空連道大阪側境界線に接し、70・73・97区に開まれている。調査着手前は小さな工場あるいは倉庫の建物があり、これの撤去後直ちに調査にかかった。調査面積は430m<sup>2</sup>を測る。

建物に伴う盛土、盛土直前の旧耕土、床土を除去すると、厚さ10cm程度の灰黄褐色シルト（10Y R4/2）が見えてくる。この層は瓦器細片を含み、調査時において中世包含層と考えたものである。この層を除去した面は黄褐色粘土（10Y R5/6）で、この面で遺構検出を行い、空撮した。

更にこの黄褐色粘土を掘削除去し、洪積台地を構成すると考えられる灰白色粘土（10Y R7/1）～灰黄褐色砂質土（10Y R5/2）の上面を検出したが、この面では往時の自然の微地形が見られたのみで遺構はなく、また遺物もなかった。

## 2 遺構

214-O O



第159図 123区概略図

調査区の南端で検出されたもので、径1.7m程の不定形を呈し、深さは0.5mを測る。埋土は黄褐色砂質土（10Y R5/6）で、遺構検出面よりやや暗く、砂質が若干強い。出土遺物がなく、その形状から人為的な土坑かどうか、検討を要する。

215-O S

調査区の中央南寄りで検出された溝で、2基の近年の井戸に切られる。幅0.7～1.0m、深さ0.1m、検出長4.5mを測る。埋土は灰黄褐色土（10Y R4/2）で、出土遺物はなかった。隣接の73区ではこの溝の続きが検出されていないので、短く終わる溝となる。時期は不明。

202-O S

215-O Sの北3mに所在するもので、幅1.0m、深さ0.15m、検出長5.0mを測る。出土遺物はないが、73・111区でその続きが検出されており、近世にまで遡る可能性のある溝とされている。

他に土坑状、溝状のものが若干検出されているが、出土遺物はなく、また人為的なもの

と考えることの難しいものである。

## 第15項 124区

### 1 位置と層序（第160図）

この調査区は、空港大阪側境界線に接し、89・72・97区に囲まれる調査区である。調査着手前は、生コンクリート製造工場があり、工場撤去後直ちにコンクリート上間、基礎等のはつり、除去を行い、調査にかかった。調査面積は700m<sup>2</sup>を測る。

層序は上から、工場に伴う厚さ1~1.3mの盛土、盛土直前の旧耕作土、旧耕作土に伴う整地上と考えられるにぶい黄色土、中世遺物包含層の褐色土、地山となる。中世包含層は瓦器・土師器の細片を含み、この層を除去した地山面で遺構検出を行い、空撮した。

### 2 遺構

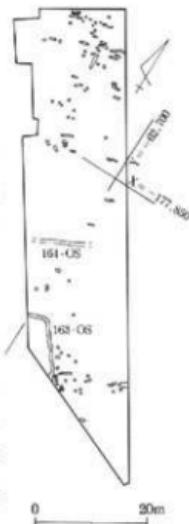
#### 163-O S

調査区南端で検出されたL字状に屈曲する溝で、幅0.2~0.3mで、深さは、0.05mと浅いものである。埋土は褐色土（7.5Y R4/2）で、中世包含層と同質のものである。出土遺物はない。この溝の続きは調査対象外の現生活道路となるため、溝の全容は不明である。建物に伴う溝か、田畑に伴う溝か、判明し難い。

なおこの周辺には人の足跡かとも思われる浅い凹凸が地山面で見られた。また中世包含層は広い範囲に水平堆積しており、包含しているとはいえ遺物は非常に少ない。これらのことから、この付近は中世の水田跡で、包含層は当時の耕作土と考えることは可能である。しかし、はっきりしたことは言えず、今後の検討課題としたい。

#### 164-O S

調査区中央で東西に走る溝である。幅0.2m、深さ0.15mのしっかりした溝で埋土は灰色粘質土（7.5Y R5/1）。遺物の出土はない。この溝の続きは89区でも検出しており、近現代のものであることが確実である。

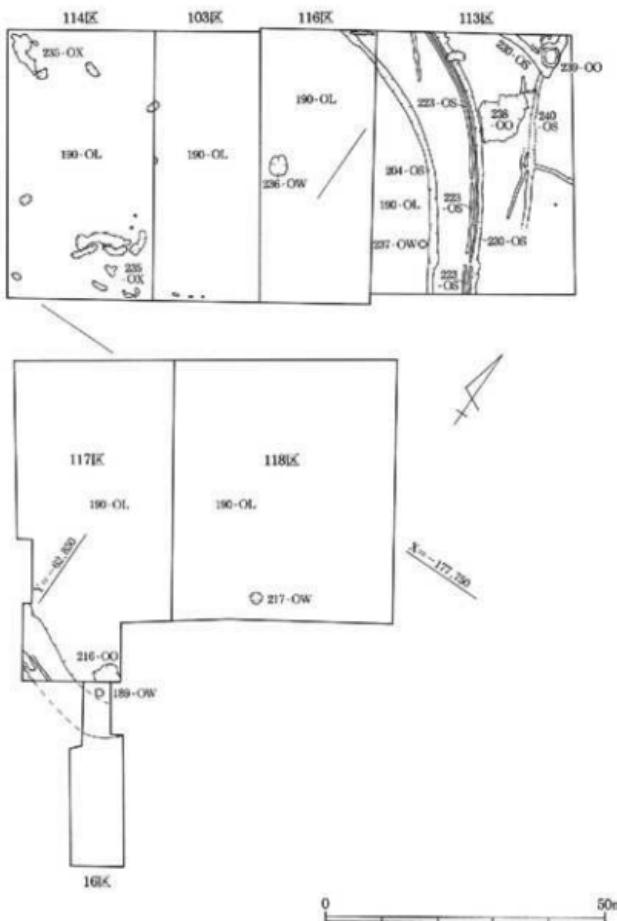


第160図 124区概略図

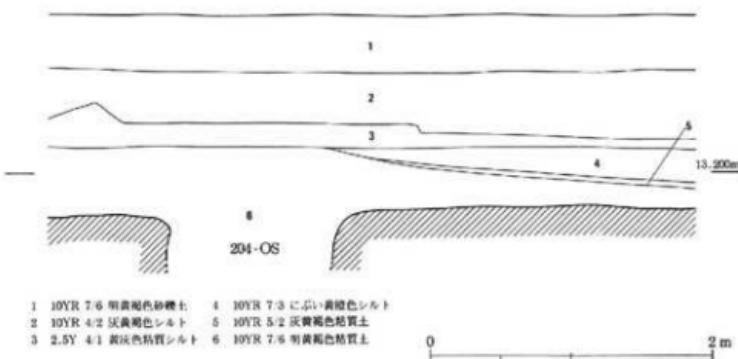
## 第16項 16・103・113・114・116～118区

## 1 位置と層序（第161・162図）

安松遺跡の中でも中央やや海寄りに位置するもので調査着手前は道路を挟んで工場が立



第161図 16・103・113・114・116～118区概略図



第162図 116区基本層序図

ち並んでいた所である。

盛土層は上下2層に分かれ、上層は工場に伴うもので、下層は戦時中の飛行場建設に伴うものの可能性があるが、なお検討を要する。これらの盛土を掘削除去すると、それ以前の旧耕土となり、その下は後述する池遺構の埋土である。以上の土層を除去すると地山となる。地山は116区でにふい黄色砂質混じり土(2.5Y6/3)、16区で黄褐色砂礫土(2.5Y5/6)である。

## 2 遺構

### 190-O L

この項で説明の対象とするすべての調査区において検出された大きな池である。113区で池の北端が、117区でその南端が見つかり、南北の長さは約110mを測る。西端は調査区外となり、東西の長さは不明である。池の底には、ほぼ一面に厚さ5~10cmの砂ないしは粘土が堆積している。それは113区ではオリーブ黒色粘土(5Y3/1)、116・103区では黄灰色粘土(2.5Y R4/1)、114区では灰色細砂(5Y5/1)、117・118区では黄灰色砂(2.5Y5/1)で、南にいくほど砂質が強く、北にいくほど粘質となる傾向がある。これは水の取り入れ口が南にあり、取り入れられた水は池の中を北へ流れて池の北半に溜ったことを示している。そして北端の113区では絶えず有機物を含んだヘドロ状になっていたようである。

地元の人によれば、この付近にかつて「よついけ」と呼ばれる池が数基かたまってあり、この池はその一つであろうということである。大正年間の地形図を見れば、この付近に5つの池があり、「四池」と記されている(第163図)。検出された池の形状を見ると、この

「四池」の西端に位置する池（三ヶ尻池）であろうことが推測できる。池はその機能がなくなった後に堤を削平して埋め立てられ、水田化した。埋め立てられた時期は第二次世界大戦以前であるが、その正確な年代は今のところ不明である。

池の堤は削平されているので、その基底部しか残していないが、その痕跡を113・116区で検出できた。堤は基底部で幅6～10mを測るもので、地形的に低い北西にいくほどその幅は大きくなる。これは地形的に低くなるほど堤を高くする必要があり、そのため堤の基底部の幅を大きくしたものと考えられる。また池の水の漏水を防ぐための鋼土が見られた。これは、堤を築く前に幅1.0～1.2m、深さ0.4m以上の溝を掘り、その中に良質の粘土を埋めるものである。この池では堤の基底面の池側端に沿って検出された。池の堤は鋼土を施した後に築かれたものである。116区では、鋼土と堤の土とが同質で、分けがたい。また堤の外側裾に沿って、幅0.6mの2条の溝（223・230-O-S）が平行して掘られている。この溝の間を畠道としたものであろうか。117区でも堤が見つかったが、一部が擾乱で切られており、高さ0.5mの堤のわずかな痕跡を検出できただけで、全容はわかり難い。鋼土はこの区では見られなかった。この付近においては、水が常時湧ることを想定しなかったためであろう。

縦じて、この池は南の水路から水を導入するもので、水は池の中を北に流れて池の北西部に溜まる構造で、全体を水が満々と湛えるものではないことが考えられる。

#### 237-OW

113区南部において、190-O-L内にあって鋼土の溝にほぼ接して所在する井戸である。径1.2mの素掘りのもので、深さは0.7m以上である。

#### 236-OW

116区中央西端に位置する井戸である。一辺3m×3.4mの隅丸方形の掘方を持つもので、上部にL字形に板を設置しており、一見井戸枠風であるが、下部には井戸枠がない。従ってこれは、素掘りの井戸で、上部の板は土留のものと考えられる。井戸の深さは約2.5mであった。



第163図 三ヶ尻池位置図 S = 1 / 25000

## 217-OW

118区の南半に所在する井戸である。径1.8mの掘方内に一辺0.8mの方形の井戸枠を持つ。深さは1m以上である。

## 189-OW

16区内トレンチで、空撮後に掘削した際に見つかった井戸である。径2m程で、深さは2m以上を測る。素掘りのものである。

以上190-OL内から4基の井戸が発見された。3基が素掘りで、そのうちの1基は土留め板を使用している。残りの1基は方形の井戸枠をもつ。これらの井戸をどう考えるかについては、二通りの考え方ができる。一つは、これらの井戸は池より以前にあったもので、池築造時に削り取られてその下部が残存したものか、もう一つはこの池が干上がるところが多く、水を常時溜めるのが難しいので、池の中に井戸を掘って水を確保しようとしたものである。

池や井戸内からの出土遺物は少なく、遺物の時期差でこれを確かめることは難しい。しかし、116区236-OWの埋土の最上層は池の埋め立て土であったことから、池と井戸は同時に機能を停止し、埋め立てられたと考えられる。

## 238・239-OO

113区北半部で検出された土坑である。190-OLより外に所在する。238-OOは6m×8mの不定形で、深さ1.3mを測り、埋土は主に黄灰色粘土(2.5Y5/1)である。239-OOは4m×3mの椭円形で、深さ1mを測り、埋土は238-OOと同様である。時期は、190-OLより以降のものと思われ、また、ともに水田を伴うものとは考えられず、意味不明の遺構である。

## 240-OS

113区の190-OLの外側に、南北あるいは東西に走る溝である。幅0.5~1.0m、深さ0.1~0.2mのものである。その一部は239-OOに切られている。この溝は、戦後開発された現水田より以前の水田区画を示す溝で、前述の190-OLの堤の外側縁を走る平行した2本の溝(223・230-OS)につながるものである。240-OSは190-OLと同時併存していた時期のものと考えられる。

## 216-OO

16区と接する位置に検出された土坑である。一辺4mの四角いもので、正方形になるか長方形になるかは不明である。深さは2mを越し、壁は直に落ちる。埋土は灰色粘土(7.5

Y4/1)である。出土遺物はない。190-O Lに伴う素掘りの井戸か、190-O Lの埋め立て後の土坑か、検討を要する。

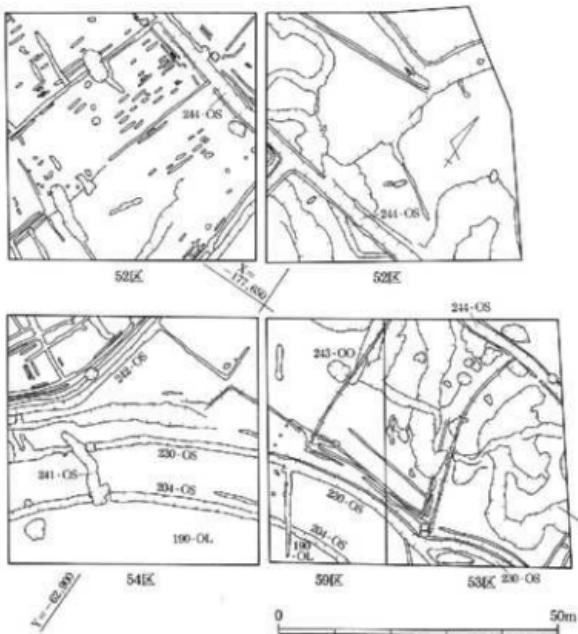
### 235-O X

114区の190-O Lの底面に灰白色砂層(7.5Y8/2)の溜まる大小様々な不定形土坑が20基ほど検出された。出土遺物はない。遙か以前の自然流路があって190-O Lによってはとんど削り取られて、その底がかろうじて残存していたのかも知れない。

### 第17項 52~54・59区

#### 1 位置と層序（第164図）

安松遺跡西端付近の調査区で、調査前は耕作地として利用されていた。調査地内では一様に盛土が施され、旧耕作土・床土層も確認できた。



第164図 52~54・59区概略図

## 2 遺構

調査の結果、古墳時代・中世の遺跡や、近世～近代の池の堤防跡およびそれに付随する水利施設、時期不明の遺構などを検出した。

古墳時代ならびに中世の遺跡は、ともに蛇行しておりその幅も一定しない。それぞれの埋土中から、須恵器片や瓦器片が数点出土している。

近世～近代の遺構は、三ヶ尻池堤防跡および溝跡などの水利施設がある。検出した堤防跡は幅約19mであるが、堤防中央に施されたと考えられる鋼粘土跡（204-O S）が確認されていることから、本来の堤防はさらに池側にあったものと思われる。池とともに取水口に相当する241-O Sも検出した。その他一帯には、当該期の耕地の様子を物語る用排水路も見つかっている。

なお時期不明とした遺跡群は、①流路が一定しておらず、②中世の溝跡に切られて検出したので、その初現は少なくとも中世以前に遡る可能性を有する。これらの自然流路を見られることは、周辺の土地がそれほど安定していないことを意味するものと思われる。

### 第18項 48～51・84・85・88・106・119～121・125区

#### 1 位置と層序（第165・166図）

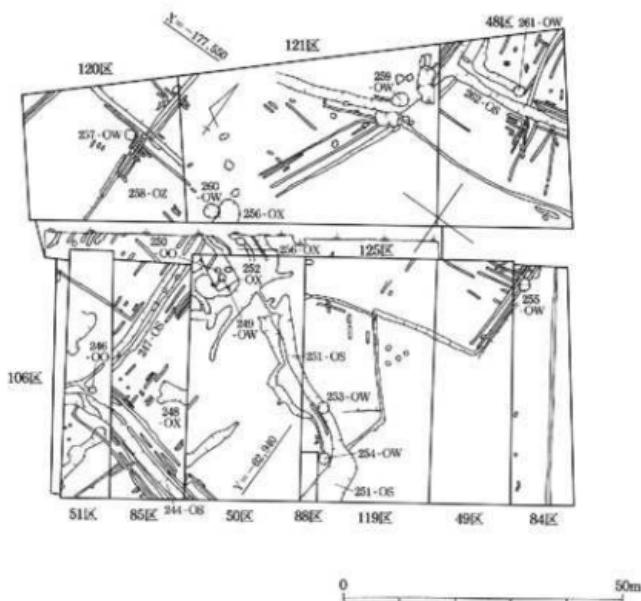
安松遺跡の海側端に位置する合計12の調査区で、第二阪和国道（国道26号線）に接する。調査着手前は、国道に面して立地していた自動車販売店（121区）、喫茶店（121区）、駐車場（119区）、倉庫（85区）、農業用道路（125区）、および田畠（48区他）であった。総面積は7400m<sup>2</sup>である。

層序は基本的に上から、①建物等に伴う盛土、②耕土、③耕土に伴う床土、④浅黄橙色～橙色土、⑤黄橙色粘土、⑥にぶい黄橙色硬土（段丘層）である。⑤を地山と考えその上面で遺構検出を行い、空撮した。

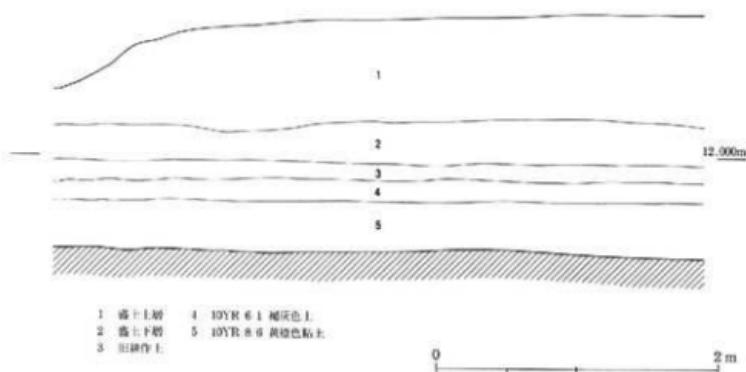
50・51・85区では②の耕土層が上下2層あったが、これは飛行場建設以前と戦後の田畠のものと考えられるものである。

49・119・120区の一部では④の見られないところがあった。

⑤は当初地山と考えられたものであるが、120区でこの層中より古墳時代後期の須恵器片が出土した。⑤が地山でないことが判明したので、119・121・125区においても⑤を掘削・除去し、さらに下層の⑥の上面を出していったところ、119区の⑤の中より弥生時



第165図 48~51・84~85・88~106・119~121・125区概略図



第166図 120区基本層序図

代終わりか古墳時代初めの土器片が出土した。他に遺物は出土しなかった。⑤は乾痕（クラック）が見られ、また水生植物の茎あるいは根と思われる痕跡（平面形の径が数mm、断面が10cm以上で直に落ちる）が見られたので、沼あるいは湿地であったことが考えられる。⑥の上面では往時の自然地形のわずかな凹凸が見られたのみで、遺構はなかった。

## 2 遺構（第167～170図）

### a. 近世～近代（1942年以前）の遺構

#### 244-O S

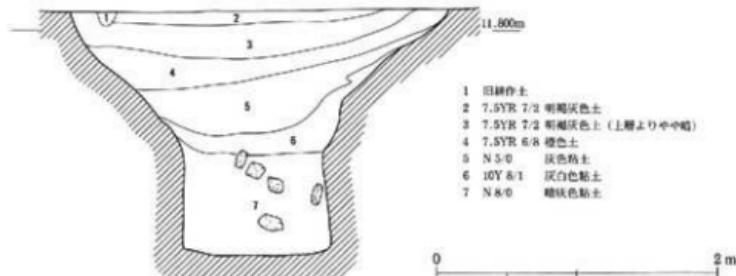
85区の南半部および51区やや南寄りで検出された溝である。85区では東西方向に走り、51区では南にやや屈曲する。幅1.7m、深さ0.4mで、埋土はおおむね下層が暗灰黄色粗砂（2.5Y 5/2）、上層が黄灰色粘土（2.5Y 4/1）である。この溝は隣接の52・53区でその統一性が検出されているもので、検出総延長130mを測る。溝は幅が広くしっかりしたもので、他に検出された溝より際立っている。この付近の水田にとって主要用排水路であったことが考えられよう。

#### 262-O S

48区の北半部でT字形に検出された溝である。幅1.5～2.0m、深さ0.4mで、埋土はおおむね上層が灰黄褐色粘質土（10Y R5/2）、下層がにぶい黄褐色砂層（10Y R4/3）である。かなりしっかりした溝で、護岸の杭と土留め板も見られたが、121区では削平を受けたため、その続きは浅く狭い溝として検出された。85・51区の244-O Sと同様の性格の溝と考えられる。

#### 261-O W

48区262-O Sの北0.8mほど離れて所在する井戸で、素掘りのものである。径2mであ



第167図 121区259-O W断面図

るが、深さは危険なため、1.2mまで掘削するにとどめた。

#### 259-OW

121区内で近代の水田区画に伴う溝4本が相合する交差点状の部分のすぐ脇に所在する素掘りの井戸である。規模は上半部で径2.4m、下半部で径1.1m、深さ1.8mを測る。埋土については、第167図を参照されたい。この井戸からは近世～近代の遺物が若干出土している。

#### 260-OW

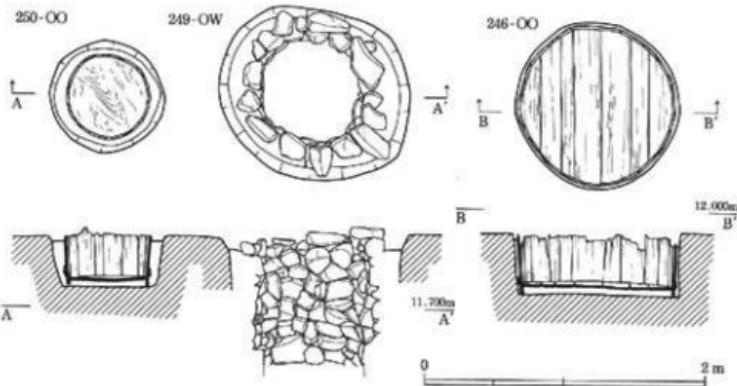
121区の南に位置する石組みの井戸である。径2.5mの掘方内に0.2～0.3m大の石を径1mに組んだものである。湧水が激しく、石組みの崩壊もあり、1m程で掘削を中止した。この井戸の掘方の線の北側に0.6m四方の浅い落ち込みが付随する。井戸の掘方掘削あるいは石組みを組む際に作業の関係で掘られたものであろうか。

#### 257-OW

120区で2本の平行する溝に伴う畠道が直交する交差点のすぐ脇に所在する素掘りの井戸である。1.7m×1.2mの方形を呈し、深さは危険なため底まで掘削しておらず不明である。

#### 246-OO

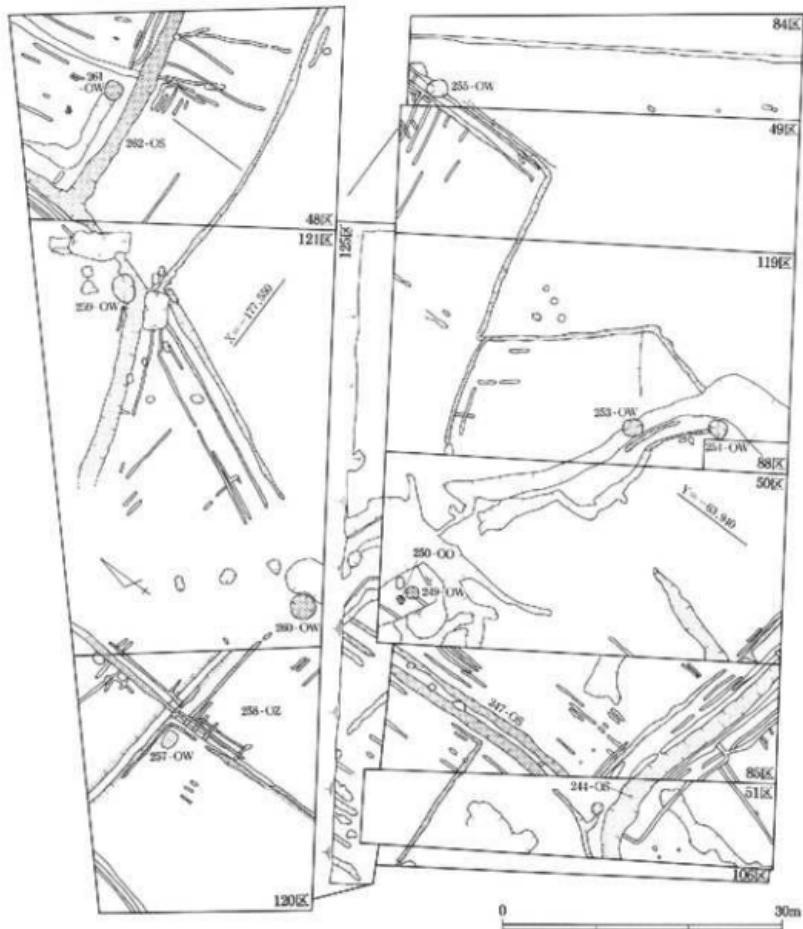
51区のはば中央に位置する。径1.1mの桶を0.5m程埋め込んだもので、上半部は欠失している。天水を溜めるための一部埋め込みの施設であろう。



第168図 50区249-OW・250-OO、51区246-OO平面・立面図

249-OW

50区の西端に所在し、121区260-OWから11mほど離れた位置にある石組みの井戸である。径1.3mの掘方内に0.15~0.3m大の石を径0.8mに組んだものである。



第169図 安松遺跡近代遺構概要図 (48~51・84・85・88・106・119~121・125区)

## 250-OO

50区249-OWの西に近接して所在する。径0.8m、深さ0.4mの掘り方に、径0.6mの桶を据え置いたもので、上半部は欠失している。50区249-OWの水を溜めて置く施設と思われる。

## 253-OW

119区南半部に所在する。径2mの素掘りの井戸である。危険なため1m程の掘削にとどめたため、深さは不明である。

## 254-OW

119区253-OWの南7m離れて所在する。径2mの素掘りの井戸である。深さは不明である。

## 255-OW

84区の北端に位置する。径2mの素掘りの井戸である。深さは不明である。

以上のように、計12の調査区において、素掘りの井戸6基、石組みの井戸2基、桶を据え置いた水溜め施設2基を検出した。素掘りのものは水田区画溝や畔に近接して所在する傾向がある。おそらく田畠の隅にあって、周辺に水を供給するものであろう。石組み井戸は住居に伴うものと考えられる。この付近にかつて民家があったのではないかと思われる。

## b. 時期不明の遺構

## 248-O X

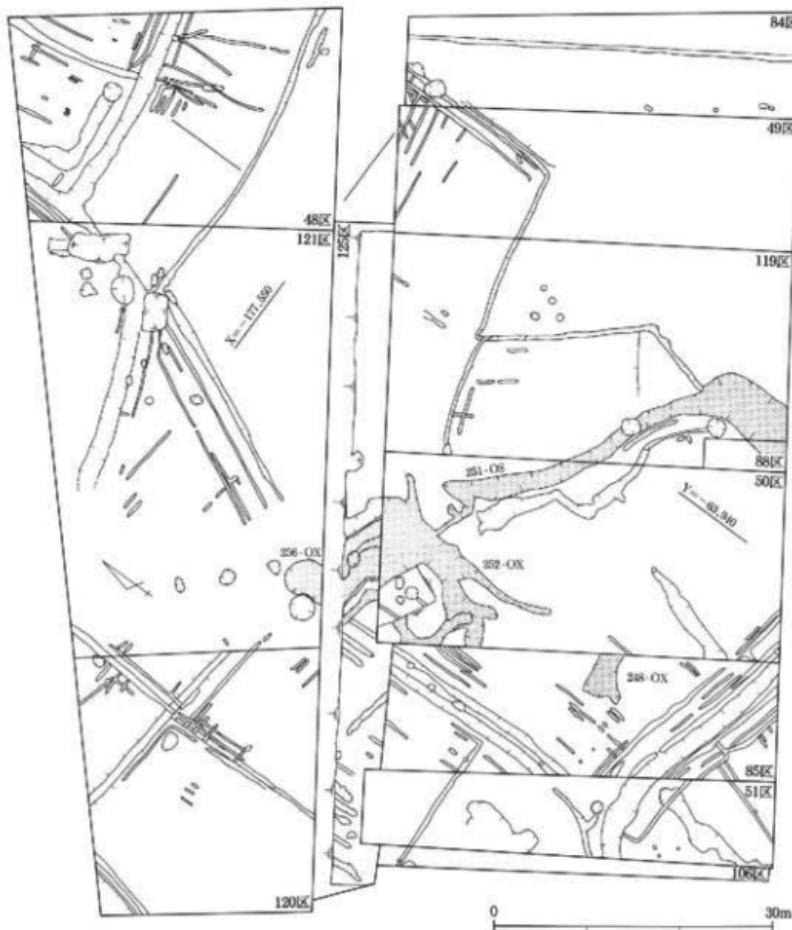
85区中央に所在する3m×5mの大きさのもので、深さは0.05mとごく浅いものである。埋土はにぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)。時期も意味も不明である。

## 256・252-O X

121区南端から50区北半にかけて15m四方に広がるものである。125区では時期の分からぬ溝に切られている。深さは0.5~0.8m、埋土はにぶい黄褐色砂質土(10Y R6/3:3mm大の礫混じり)で、121区256-O Xから縄文土器の小片が出土している。しかし、それがこの遺構の時期を表すのか疑問である。また意味も不明の遺構である。

## 251-O S

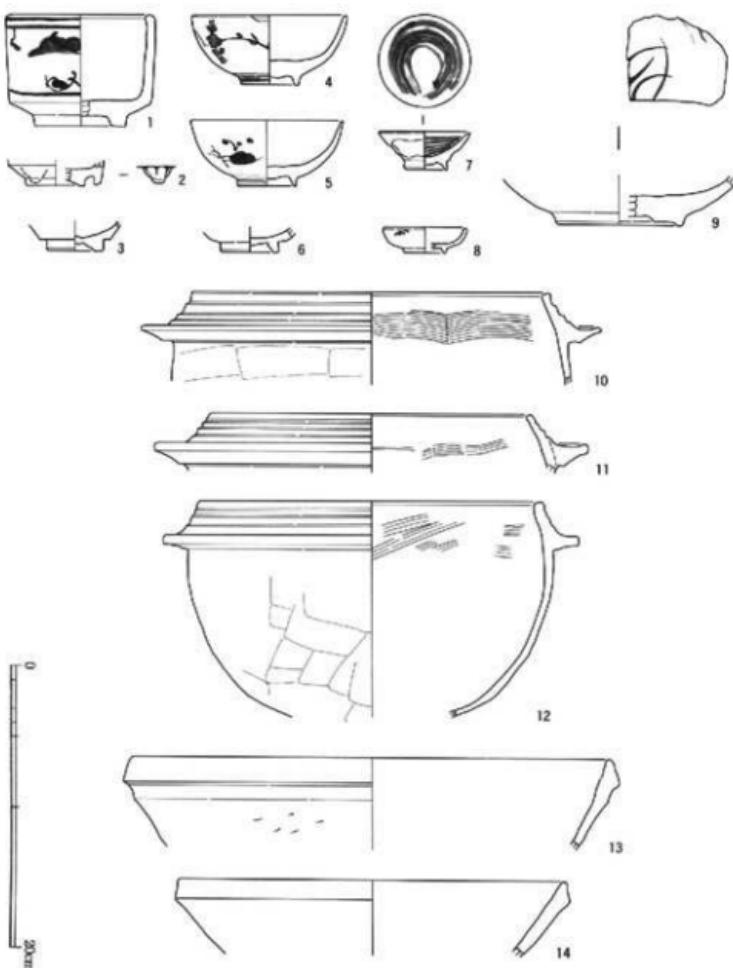
119区から50・88区にかけてL字状に走る溝である。隣接の52区ではこの続きが蛇行状に検出されている。幅0.2~0.5m、深さは119区で0.3~0.5m、50区で0.1~0.2mを測る。埋土はにぶい褐色砂土(7.5Y R5/3)~灰黃褐色粘質土(10Y R6/2)。出土遺物がなく、時期不明である。この溝は、50区252-O Xに連なるものである。



第170図 安松遺跡時期不明遺構概要図 (48~51・84・85・88・106・119~121・125区)

## 第2節 出土遺物（第171～174図、図版163～168）

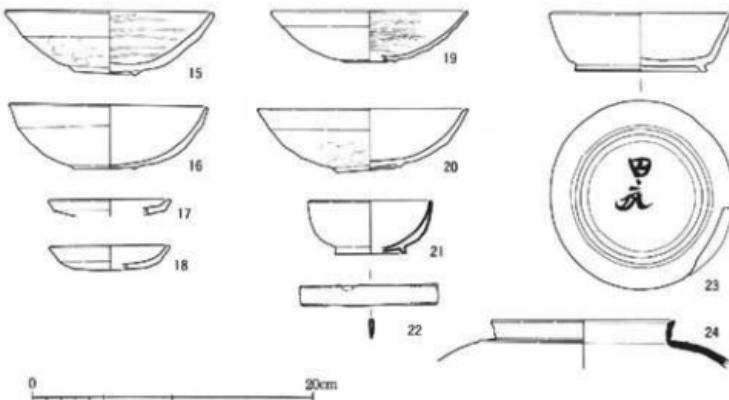
安松遺跡から出土した遺物は量的にも少ない。種類は陶磁器・須恵器・土師器・瓦器・



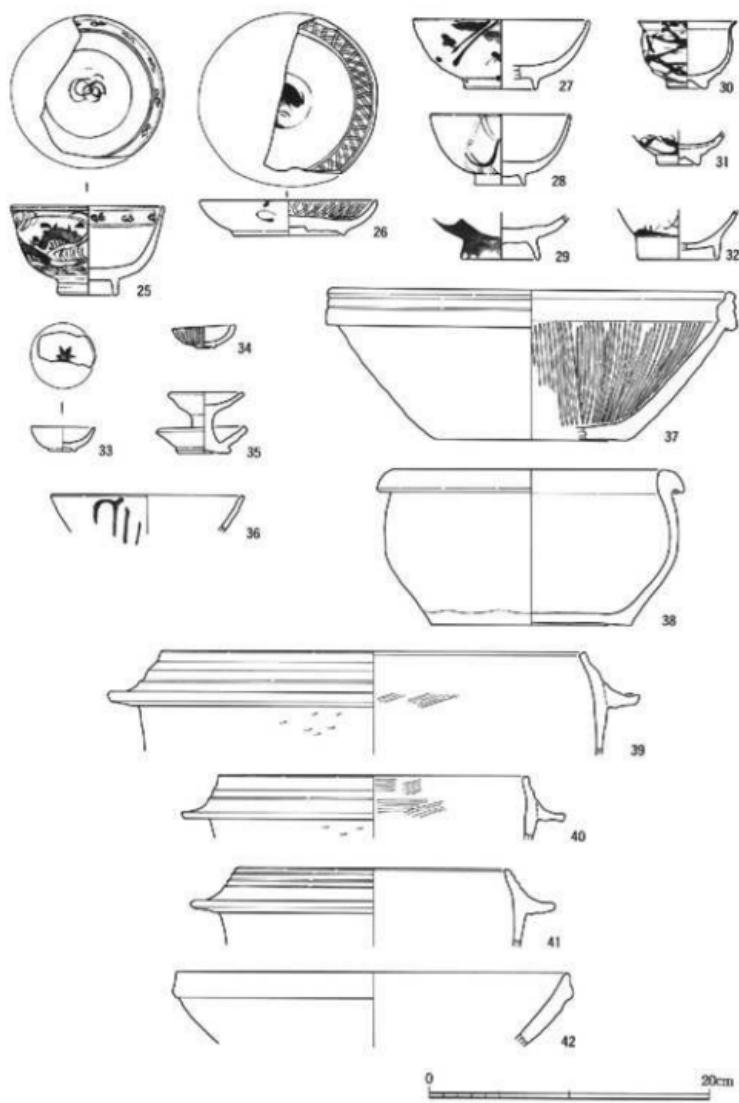
第171図 安松遺跡遺構出土遺物（1）磁器、土師器、瓦質土器、瓦質羽釜

羽釜・瓦質土器・木製品・金属製品等が出土した。

1~24・57~59は遺構出土遺物である。15・16・18~20は63-OWより出土した。15・16・19・20は瓦器塊である。15・16・20は磨耗著しい。19は螺旋状のミガキが見られる。14C前半頃までのものか。18は瓦器小皿で内外面ナデ調整される。22は250-OWより出土した金属製品で、外面銅板で巻かれ縁背を吹き内面の基は鉄錆を吹く、小柄の柄部分である。10・13は9-OOより出土した。10は瓦質羽釜で口縁部段を有する。13は瓦質練鉢で内外面ナデ調整される。15C頃のものか。7は172-OSより出土した陶器酒杯である。外面体部から高台部および高台底部螺旋状に削り出される。高台部を除き施釉され、内面は馬蹄形の白色釉を重ねる。内面には赤字で「サノ」の文字が印字される。音羽焼きか。11は238-OOより出土した有段の瓦質羽釜である。15C頃のものか。8は13-OSより出土した伊万里焼きの酒杯である。3は230-OSより出土した施釉陶器で高台部削り出され、高台底部は螺旋状に削り出す。萩焼きか。5は145-OSより出土した肥前系染付碗で、見込み部釉剥ぎされる。24は241-OSより出土した須恵器短頸壺口縁部である。2・6・9・14は244-OSより出土した。2は青磁香炉で高台部削り出される。底部は凹レンズ状に削り出され、鉄釉が施される。高台脇に足が付き、内面と外面高台部付近まで緑灰色釉施される。6は天目茶碗で高台部付近削り出され無釉である。9は青磁皿で高台底部段状に削り出され、周縁と中央の平坦面を除き無釉である。内面に蓮弁が見える。



第172図 安松遺跡遺構出土遺物（2）土師器、須恵器、瓦器、金属製品、木製品

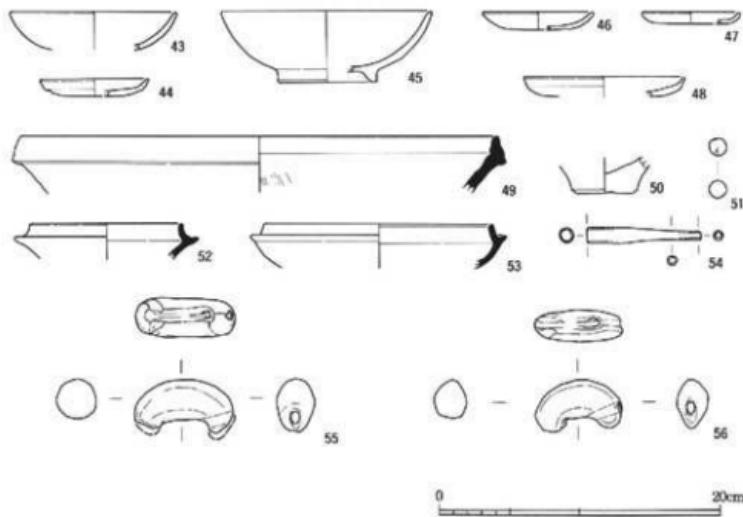


第173図 安松遺跡包含層出土遺物（1）陶磁器、瓦質羽釜、瓦質棟鉢

14は瓦質線鉢で焼成も悪く磨耗も著しい。12は212-O Pより出土した瓦質羽釜である。口縁部段を有し、内面ハケ調整され、外面ケズリ調整される。15 Cのものか。1・4・21は135-O Iより出土した。1は陶器香炉である。内外面ケズリ調整され、高台部削り出される。内面口縁部付近から外面高台付近まで施釉される。見込み部に砂付着する。4は肥前系染付碗で、見込み部釉剥ぎされ、疊付けに砂付着する。波佐見焼きか。21は漆器椀で、横木取りされる。内外面共に黒漆の上に赤漆重ね塗りされるが、口縁端部と高台疊付けは黒漆のみである。17・23は40-O Rより出土した。17は土師器小皿で内外面ナデ調整される。23は高台付きの須恵器杯身で、高台底部に「田家」の墨書きが見られる。57~59は木製品である。57・58は6-O Wより出土した。57は醤油樽の栓である。58は下駄である。鼻緒の孔の位置から右足用である。59は5-O Wより出土した箸である。

25~56は包含層出土遺物である。弥生式土器・陶磁器・須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・羽釜・金属製品等が出土した。

25~28・31~34・36は磁器である。25・27・28・31~33は染付碗で、32は広東碗である。26は皿で高台底部段状に削り出され、中央の凹部縁辺部に砂付着する。34は紅皿で外面放



第174図 安松遺跡包含層出土遺物（2）土師器・須恵器・黒色土器・瓦器他

射状の刻みが見られる。蓋かもしれない。36は龍泉窯系の青磁碗で簡略化された蓮弁が見える。29・30・35・37・38は陶器である。29は美濃瀬戸系の碗である。高台部削り出され、高台底部を除き鉄軸を被る。30は施釉陶器で高台底部螺旋状に削り出され、外面ピラ状の軸を施す。萩焼きか。35は燭台で下部皿の外面から高台部削り出され、無軸である。37は備前焼の擂鉢で、横目10条を一単位とする。38は鉢で底部平坦で無軸である。39～41は瓦質羽釜で段を有する。40は口縁端部立ち上がり気味である。15C代のものか。42は瓦質練鉢で内外面ナデ調整される。50は弥生式土器底部で磨耗著しい。49・52・53は須恵器である。49は東播系の擂鉢で内外面ナデ調整される。52・53は受部をもつ杯身である。46～48は土師器小皿で内外面ナデ調整される。45は黒色土器Aタイプである。内面緻密にミガキ調整される。43・44は瓦器である。43は塊で磨耗著しい。44は小皿で内外面ナデ調整される。51・54は金属製品である。51は火薙銃の鉛弾で、54は銅製煙管の吸い口部である。55・56は土師質の土鍤である。蚕の繭状の体部両端部を屈曲突出させ横方向から穿孔し、凹部内底部は両端部から溝状の繩装着部窪みを作り出す。



## 第6章 検出遺構と出土遺物の検討

### 第1節 旧長滻墓地の遺構と遺物（図版169～197）

#### 第1項 遺構と遺物

##### 1 はじめに

（財）大阪府埋蔵文化財協会（当時）では平成元年度（1989）より関西国際空港連絡道路予定地の発掘調査を実施している。予定地内の第4工区（植田池・長滻・安松遺跡）で旧長滻墓地跡（植田池遺跡所在）の遺構を検出した。

第4工区はほとんどが旧陸軍明野飛行学校佐野分校の飛行場跡地内（以後「旧飛行場」と呼ぶ）に収まる。旧長滻墓地<sup>1)</sup>は昭和19年（1944）に始まった「旧飛行場」の横風用滑走路建設に伴い移転を余儀なくされたもので、その後墓地の正確な位置などは分からなくなっていた。

諸般の事情により付近一帯を一括調査出来なかったが、現地調査も終わり、ほぼ旧長滻墓地域の範囲と「旧飛行場」建設による削平を免れた墓地関連の遺構の配置を把握することが出来た。

##### 2 遺構（第175～179図、付図4）

墓地域が削平を受けた結果一律に平坦面と化し、さらに戦後の開墾や整備事業により再び土地の改変が行われている。削平を免れ平坦面で検出した遺構には時間的な隔たりがある。まず墓地域の範囲を確認し域内検出遺構の時間的なセット関係を明らかにしたい。

##### 移転前の長滻墓地の位置と遺構（第178・179図、付図4）

直前の墓地域を特定する資料として明治20年代作成の「日根郡長滻村切図」<sup>2)</sup>を使用した。遺構配置図および「水利図」の該当箇所にA～Gの記号を付している。Aは1～3-O Sの合流部、Bは2～O Sの屈曲部にあたり後世に48～O O湧水土坑が穿たれており、178～O Iの暗渠導水管が埋設されている<sup>3)</sup>。Cは調査地外にあたり付図に予想される位置を「★」印で表記したが、30区の層序のごとく一段低く遺構の遺存は望めない。Dは「水利図」では溝の屈曲部にあたる。調査地内で検出した溝は直線的であるが、163～O Bの位置や172～O Xの溝側面の張り出し部にコンクリートによる接続痕を確認しているので橋

渠の位置と考えている。Eは4・5  
—O Sの接続部分にあたるが、「水利図」ではD・E間に溝はない。近代以降に道沿いの狭い水路を水利確保のため拡幅したのかもしれない。  
Fは1・4—O S接続部にあたる。  
4—O Sは直接合流せず幹線水路である1—O Sから水利施設により分水されていたものと考えているが、検出時には暗渠化が図られていた。

Gは5—O S屈曲部にあたると考えている。「水利図」では直線的に描かれているため判りにくいが、道との接合部にあたると考えている。

周囲を「結界溝」に囲まれた範囲をかろうじて確認することが出来たが、墓域内の削平は著しく検出面は平坦であった。両墓跡により「埋葬」・「詣墓」の区別がなされた墓地であつたらしいが、上部遺構である「詣墓」は完全に消滅している。検出し得たのは深度があり立地条件の良かった「埋葬」の一群や墓地施設が遺存しているのみである。墓域南東部は比較高く「結界溝」以外全て完全に消滅している。

「水利図」以降の近代から墓地移転までの施設はある程度断定出来る。墓壇の時期は特に判然としないものが多いが、全般的には近世後半から



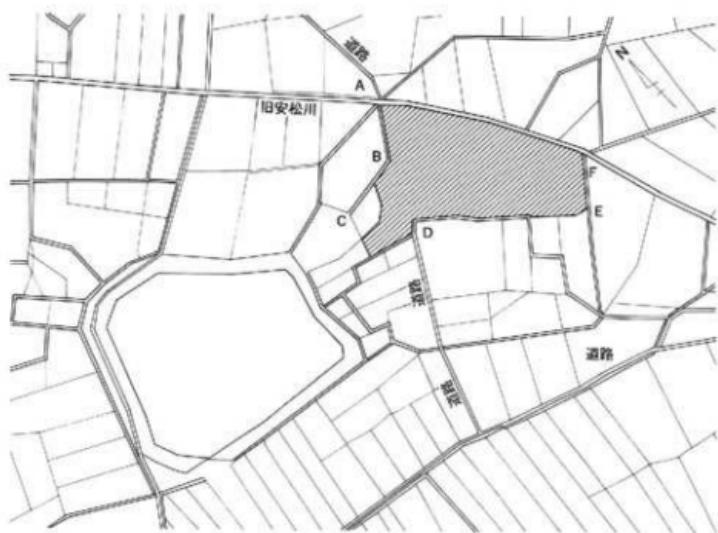
第175図  
現在の長滝墓地に移築された「お堂」



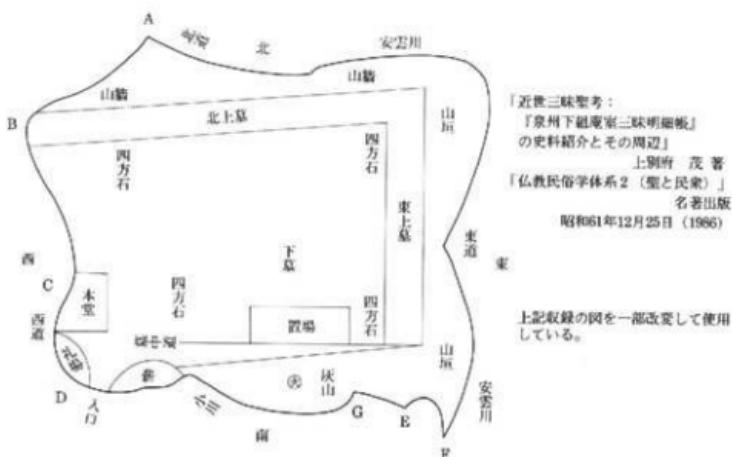
第176図  
現在の長滝墓地「礼場」(中央は棺台)



第177図  
現在の長滝墓地無縁塔群



第178図 旧長滝墓地周辺水利図



第179図 長滝村極楽寺三昧境内図

近代の時期が与えられる。

入口は三カ所ある。墓地施設の位置関係から判断して主要な入口は南西部Dで検出した172-OXと考えられる。北端部Aにも173-OXが存在していたようである。東端部F付近にも存在すると考えている。削平を受けて遺存しないが、他の二カ所と同じく「水利図」中の道路が墓地域に突き当たる部分であり、Aの174-OXやDの6-OSなどの入口付近と同じく、セット関係にある「水場」と考えられる7-OWが付近に位置していることからほぼ間違はないであろう。

Dの入口を入り東側に167-OCが位置する。木の根痕跡から南および西側は立ち木に囲まれ、北側は遺存墓壙の深度からみて一段高くなっていたと考えられる。覆い屋は確認されず墓石を積み上げた区画を検出している。区画中央に棺台と考えられる石組みを据えたもので、「礼場」と考えている。東側には隣接して162-OB<sup>3)</sup>の基壇石列と墓石転用の簡便な石組みの階段が位置している。いずれも数層の炭層を含んだ「整地上」上に立地している。層位的にみても新しく近代以降の遺構である。

B・C間南側の調査地北東端部に164-OBが位置する。隣接する9-OWからはおはじきや裁縫用具など生活臭のする遺物も出土し、建物とのセット関係がうかがえる。Bの48-OOからは同建物のものと思われる近代瓦が大量に出土している。墓地移転時の廃棄瓦と考えられる。また東側には木の根跡が集中して遺存しており、付近の削平深度が浅く平坦な地形であったと考えられる。当該時期の火葬場は検出していない。なお「水利図」では建物の位置は墓地域外にあたる。

#### 検出遺構と「長滝村極楽寺三昧境内図」の比較

「長滝村極楽寺三昧境内図」<sup>4)</sup>（以後「三昧図」）は「泉州下組庵室三昧明細帳」天保14年（1843）9月に記されたものの一つである。「三昧図」には「安雲川」の名が見えるが安松川のことであろう。北と東を安雲川、南を小川に囲まれ西を西道が巡る。「水利図」の配置とほとんど変わらない。南北方向に圧縮・誇張され描かれている。

墓地域の範囲は一部を除きほとんど変わらない。「水利図」のCまでその範囲が広がるようである。「三昧図」に描かれている入口は一ヵ所しかなく、「礼場」や「本堂」との位置関係から、D付近が考えられる。付近としたのは「整地土」と「結界溝」とはセット関係にありそれらの位置が判然としないためである。整地土断面で確認した幅1mほどの近世溝が当時の「結界溝」とするならば整地斜面上位にその存在を求めることになる。傾斜面に垂直に打ち込まれた175-OX杭群が橋脚基礎杭の可能性もあり、入口の可能性も

ある。

入口西側に「礼場」（靈場）が見える。163-O Bにあたると考えている。雨落ち溝の痕跡も確認している。硬く締まった基壇状の整地土層中に中世遺物が散見される。近世の建物と考えている。

北側に「本堂」が見える。164-O Bと165-O Bが位置している。165-O Bは建物を巡る溝内に二次焼成を受けた中世瓦と芯入粘土塊が見られる。163-O Bの基壇状の整地土や下層の「整地土」中にもあり、時期的にも違う。164-O Bは移転時の廃棄瓦よりもその時期は近代以降が考えられるが、位置的には矛盾せず、建て替えられたのかもしれない。

「灰山」は「整地土」中に見える炭層のことであり、⑧は「火葬場」のことで169-O Xが該当する。付近にも炭の堆積が見られた。

#### 「三昧図」以前の遺構

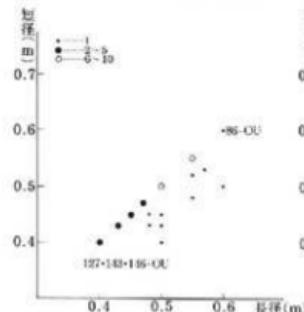
165-O Bと97-O Uは出土遺物からみて時間的な幅が大きい。165-O Bは出土した瓦よりみて15世紀前半以降に罹災した建物と考えられる。97-O Uは墓壙副葬品（唐津焼皿）が文録（1592～1596）から慶長（1596～1615）期までのものと考えられるので、17世紀第一四半期を降らしない。「整地土」中に同時期と考えられる近世瓦<sup>1)</sup>の出土を見ているので、建物の存在を想定し得る。発掘調査の結果としては墓地の一時期の断絶を考えざるを得ない。「金石文」資料には永正年間（1504～1520）の紀年名も見え、16世紀後半から17世紀初頭までの半世紀にわたる空白時期をうめる遺構検出もなく、建物の歴史を罹災時期も判然としないため、断絶の期間を特定し得ない。97-O Uの検出により近世初頭頃の墓域北限は3-O S付近にまで広がると考えられる。

31・96区にかけて検出した161-O B・168-O Lは「三昧図」に描かれていない。建物と池はセット関係にあり、安松川（安雲川）とつながる。安松川の始期は俵屋新田の開発に由来すると考えている。包含遺物からみて18世紀中葉頃に二期が認められ、18世紀中葉頃には「水利図」や「三昧図」に見られる景観が出来上がったと考えられる。建物や池も該当時期のものと考えられる。建物の時期を特定する瓦などの遺物の出土を見ていないが、171-O Xや建物南東側の遺存深度の深い墓壙群とは平坦な地形状に築かれた一連の遺構群と考えられる。

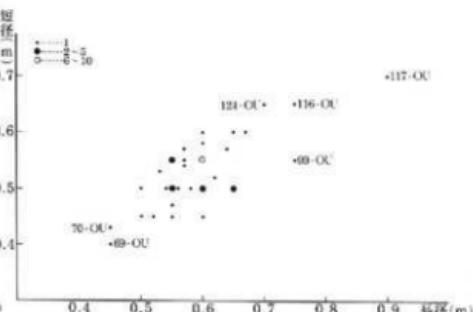
#### 墓壙の配置と座標の構造（第1・2表）

「水利図」や「三昧図」との比較で「埋墓域」の範囲を捉えることが出来た。B～Dの中央付近で東側へ屈曲し161-O Bにいたる一群と、171-O X東側の一群、さらに31区中

第1表 旧長瀬墓地検出墓壙  
桶形座棺法量表



第2表 旧長瀬墓地検出墓壙箱形座棺法量表



央部の一群が「箱形座棺」で古い墓壙群と考えている。墓域内の傾斜変換点斜面に平行して埋葬域北側を画するように広がる。「桶形座棺」(早桶)は南側に点在するが、座棺の形態による新古は判然としない。いずれの墓壙も近世段階の墓壙で3基の集合形態が多い。近代以降の墓壙は「整地土」上や古い墓壙群中に点在しており、箱形や桶形の座棺がある。確認し得た墓壙中では桶形座棺が多い。各墓壙の掘方や座棺の形態・法量は第11表を参照願いたい。釘の種類や棺材・骨の遺存・飾り金具の有無のか副葬品の種類・点数についても掲載している。

桶形座棺(早桶)の規模は底径0.4~0.55mの範囲に収まる。86・OUが飛び抜けて大きく底径0.6mをはかる。法量分布は第1表を参照願いたい。

箱形座棺は底板に側板を積み上げた簡便な構造である。側板の積み上げには側板に枘穴を穿ち側板間を固定するものや底板に突起を設け側板を固定するものもみられるが、いずれも角釘の底板からの打ち上げにより底板と側板を固定している。また木構造の構造を示すものもみられた。おおむね長径0.5~0.67m、短径0.45~0.6mの範囲に収まる長方形の座棺である。69・70・OUは規模が小さく未成人の子墓かも知れない。99・116・117・124・OUは規模が大きい。99・OUは副葬錢貨(六道錢)30枚を数え、検出墓壙中もっとも多い。117・OUは丸釘・角釘併用の極めて新しい墓壙である。124・OUは作り付けの木構造墓壙である。法量分布は第2表を参照願いたい。

座棺遺存深度は検出墓壙によりまちまちである。削平の度合いが違うため法量化し得なかった。桶形座棺中遺存深度がある墓壙は131・OUで0.75mをはかる。箱形座棺中遺存深度がある墓壙は71・OUで0.95mをはかるが飛び抜けて高い。掘方共に深度がある墓壙

はおおむね0.7m前後に収まる。座棺の高さは桶形・箱形共に0.7m程度のものが平均的なものであったと考えられる。

「箱形座棺」使用的釘はほとんどが角釘である。丸釘と併用される墓壙は1基確認している。第12表に角釘の長さを「寸」で表示し点数を記している。遺存状態が悪く取り上げ時や鏽落とし時に破損したものが多い。長さ不明の個体をその他の欄に記している。各墓壙に使用された釘の長さはまちまちである。おおむね多用された釘の長さは判るが、極端に短い釘を除いて、座棺の結合部分毎の釘の長さの差異は認められない。墓壙中には両端の尖る鍔も5基で確認されており、側板間の接合に使用されたことが判る。

座棺に飾り付けられた「飾り金具」のほとんどは「整地土」（炭層含む）中よりの出土である。焼成を受けており、金具に丸釘の穴が残る。近代以降のものである。銅板を打ち抜き成形されている。墓壙埋土中よりの出土は104-O Uの箱形座棺ただ1基のみである。棺外掘方埋土中より焼成を受けた近代銭貨の出土を見ており、近代の墓壙であると言える。「整地土」中のものも含めて丸釘で座棺に固定されたようであり、それらの出土より「飾り金具」装着の座棺が通常は火葬に付されていたと考えられる。土葬された墓壙のもつ意味は判然としないが、飾り金具を持たない箱形座棺で近代墓壙である105-O Uのような事例もある。第13表に法量等を記したので参照願いたい。

### 3 遺物

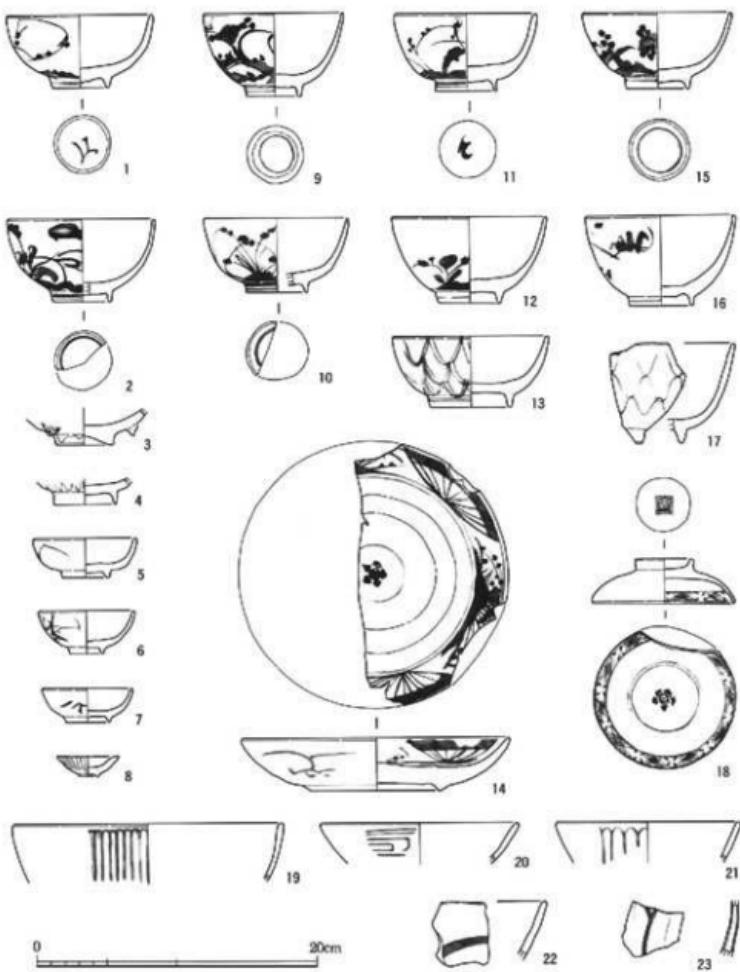
31・37・55・96区にまたがる「整地土」中や各墓壙「副葬品」として出土した遺物は陶磁器、土師器、白土器、須恵器、瓦質羽釜、中近世瓦、鉄製品、銅製品などさまざまである。

#### 「整地土」出土遺物（第180～186図）

1～18は肥前系磁器である。10・11は波佐見焼、3は青磁香炉で内面口縁端部から外面高台部を除き施釉される。高台脇に足（三足）が付く。5は桃色の釉を内外面共に被る。6・7は染付酒杯、8は伊万里焼紅皿、18は簡茶碗蓋である。染付磁器は植物文様（梅）、一重・二重の網目文様の茶碗・皿が出土している。19～23は龍泉窯系青磁碗である。19・21は簡略化された蓮弁、23は鍋蓮弁がみられる。20は雷文がみられる。22は外面に文様がなく内面に花弁らしい文様がみられる。

24～34は陶器である。24・25・28は施釉陶器碗である。24は内面底部に蛇の目釉剥ぎがみられる。25・28は骨付けに砂付着する。26・27は備前焼三足香炉である。29は皿で内面と口縁端部に施釉されるが、発色していない。外面は口縁端部以外艶ケズリされ、ほかは

ナデ調整される。30・31は同形で薄手の淡黄白色の無釉の急須である。31の把手部には〔湊〕の押し型が見え湊焼であることがわかる。32は湊焼の火消壺形藏骨器である。33・34は擂鉢で、33は擂り目10条を一単位とし、34は信楽系のもので擂り目7条を一単位とす

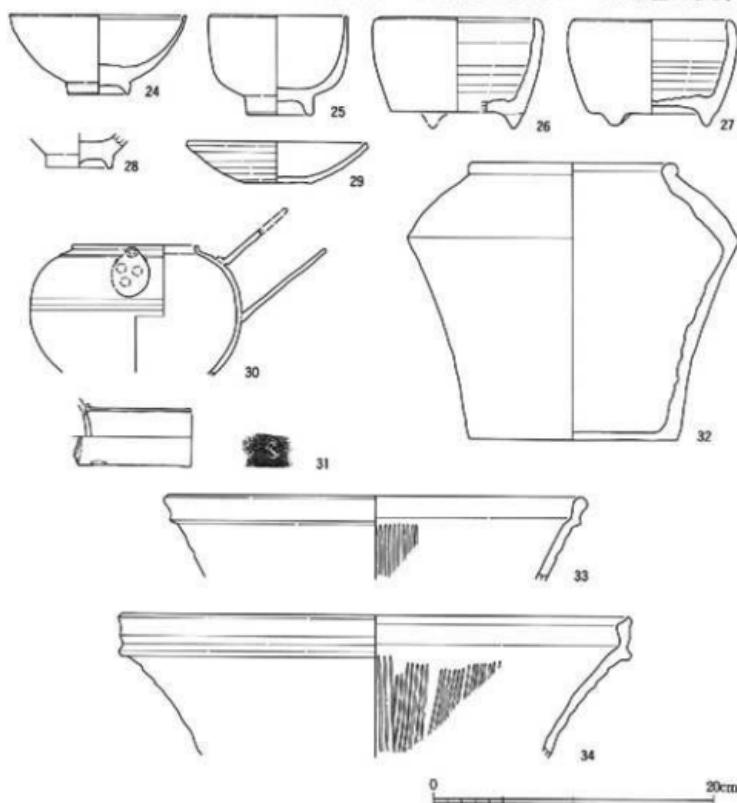


第180図 旧長塚墓地整地土出土物（1）磁器

る。

35～55は土師器である。35～43は小皿である。35～37は回転糸切りされ、36・37は内面施釉される。44・45は白土器小皿である。46は壺か壺の把手（耳）である。47・48はミニチュア土製品の壺と蓋である。49は灯明皿の上皿で三つの孔を持つ。火芯の孔で煤付着する。50は藏骨器の蓋の可能性がある。51・52は焰烙である。52は把手に一孔を穿つ。53・54は三足の火舍で2条の貼りつけ凸帯に指頭圧痕による刻みを施す。55は大型壺で口縁部肥厚し端部は平らである。

56・62は瓦質の土器である。56は瓦質火舍、62は瓦質壺である。57～61は羽釜である。

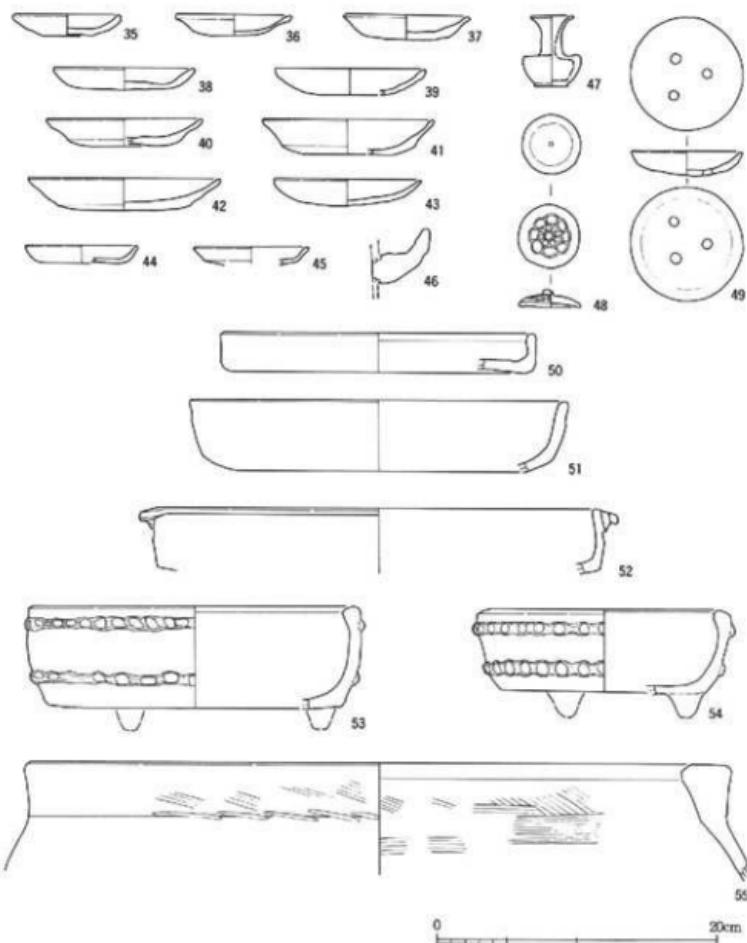


第181図 旧長淹墓地整地土出土遺物（2）陶磁器

土師質は57・59で他は瓦質である。

63～68は須恵器である。63～65はつまみ付の蓋で65は宝珠のつまみが付く。67・68は高台付の壺である。

69～76は軒丸・軒平・丸・道具瓦である。第6章第1節第2項で分類し特徴を記していく。

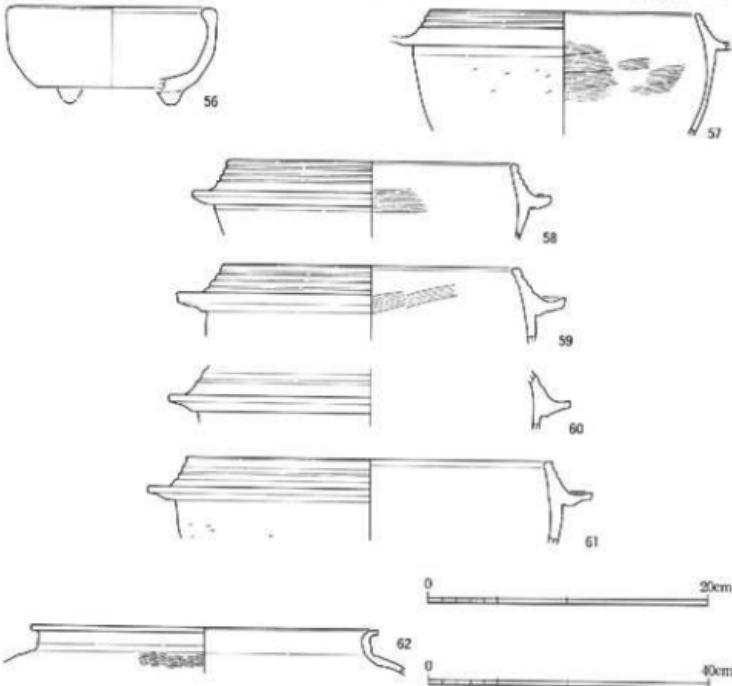


第182図 旧長瀧墓地整地土出土遺物（3）土師器、白土器、土製品

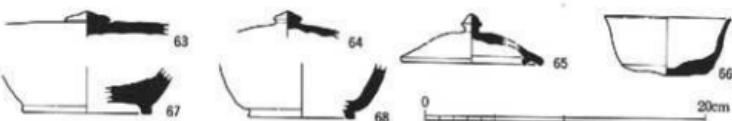
るので参照願いたい。

77~83はその他の出土遺物である。77・78は瓦転用の面子で、79はミニチュアの鳥形泥人形である。80は滑石製の蠟石である。81~83は金属製品である。81は鉄鎌で、82は銅製の煙草入れ口金具で、83は銅板で束ねられ鉄製の櫛齒をもつ櫛で二つ折りの状態で出土した。遺構出土遺物（第187~190図）

1-O-S : 84・85・87は陶器で外面ピラ状の施釉がされ、高台部中央は螺旋状にケズ



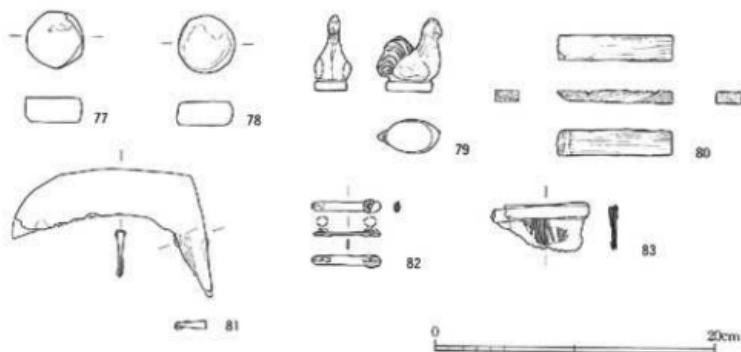
第183図 旧長滝墓地整地土出土遺物（4）瓦質羽釜、瓦質土器



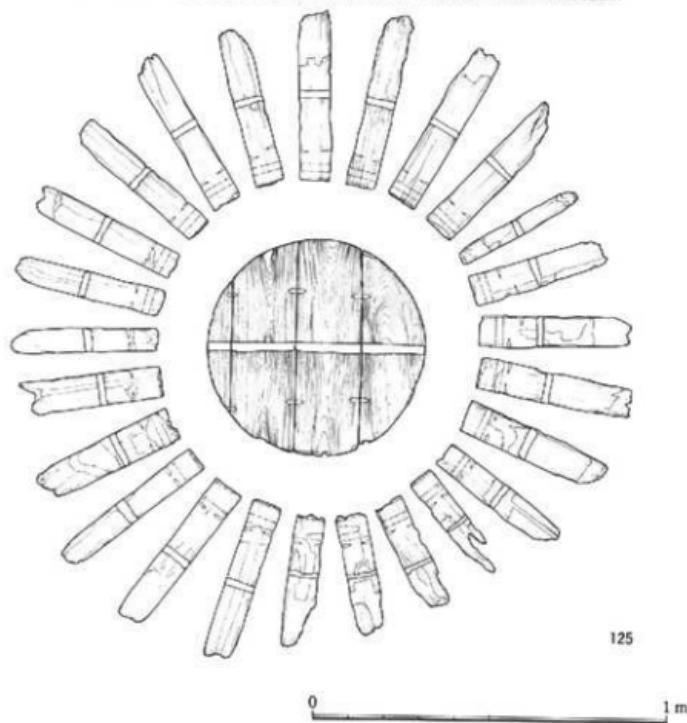
第184図 旧長滝墓地整地土出土遺物（5）須恵器



第185図 旧長瀬墓地整地土出土遺物（6）瓦



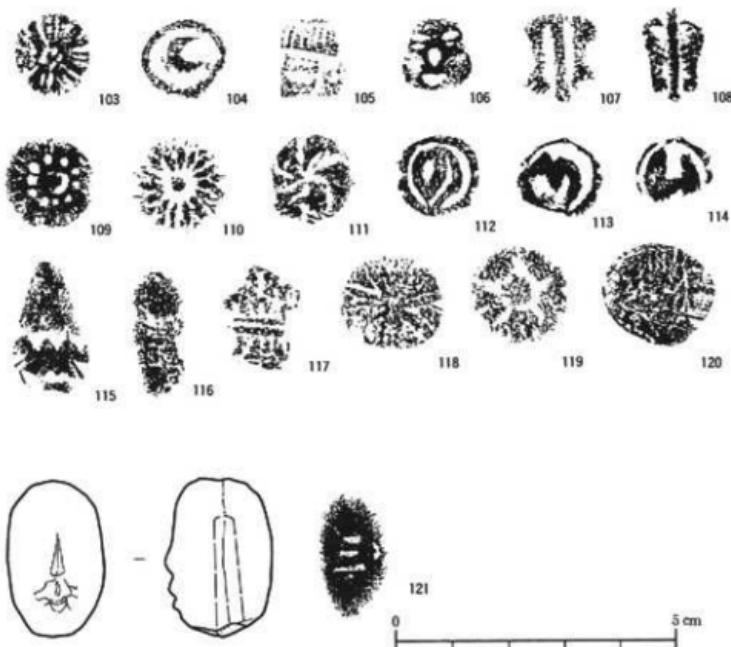
第186図 旧長瀬墓地整地土出土遺物（7）土製品、石製品、金属製品



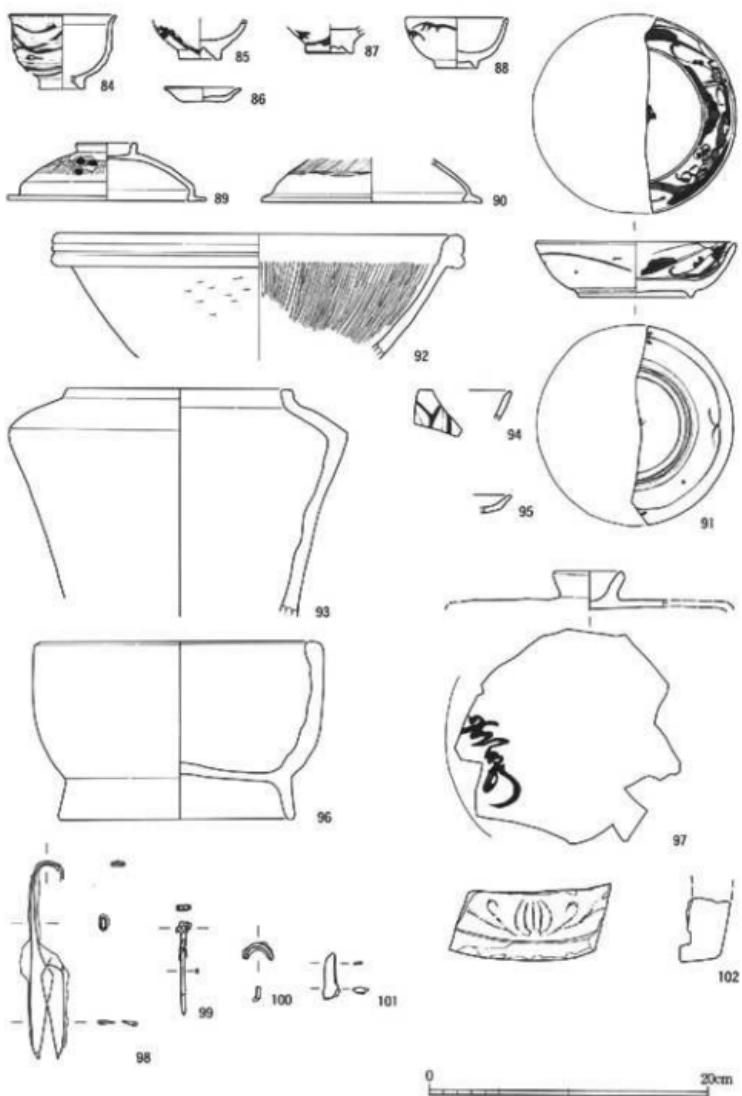
第187図 旧長瀬墓地遺構出土遺物（1）8-OW：井筒

り出される。19世紀代の萩焼小型湯呑み茶碗かも知れない。89は鉄釉の施された陶器で雪平鍋の蓋である。92は擂鉢で擂り目10条を一単位とする。99は銀鍍金の施された銅製の簪で、頭部には横の花文が見られる。陶磁器類は特に18世紀中葉頃の染付茶碗が多く見られる。付近の水路中にも同様の傾向が見られ、同時期に「画期」があるようだ。

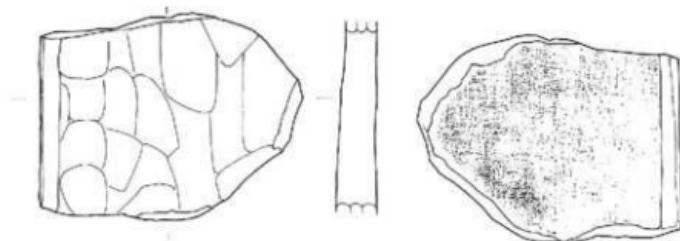
- 8 - OW : 95は土師器小皿細片である。125は井筒で底板や側板同士を竹製の籠で接合する。籠は認められない。墓壙の掘方を切って掘り込まれた井戸で、古いと考えられる埋葬墓壙群と近接して存在するので同時期のものとは考えにくい。  
 9 - OW : 91は肥前系染付皿で五弁花が良く残る。94は龍泉窯系青磁碗で鎧蓮弁が見られる。98・100・101は裁縫用具である。98は握り鉄で100は鉄製の指貫きである。101は円形のつまみ部分に極小の小刀状の刃部を付けたもので糸切



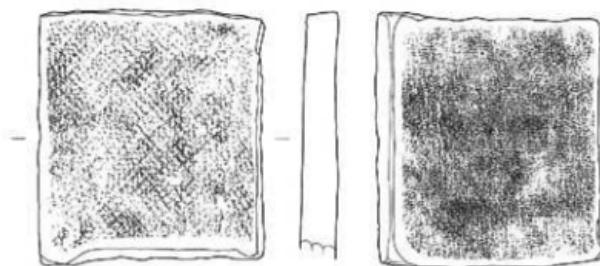
第188図 旧長滝墓地遺構出土遺物（2）土製品



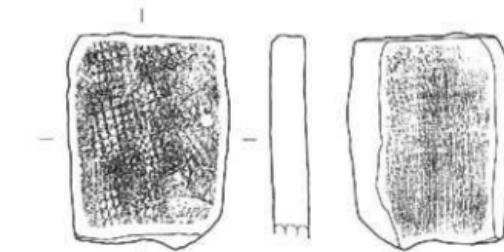
第189図 旧長滝墓地遺構出土遺物（3）陶磁器、瓦、金属製品他



122



123



124

0 20cm

第190図 旧長瀬墓地遺構出土遺物 (4) 179-O K:瓦

りか裁断用具かも知れない。102は均整唐草文軒平瓦で、103～120は土製おはじきで、121は泥人形である。

17-O O : 86は土師器小皿で底部外面回転系切りされる。

22-O O : 88は肥前系の小型染付磁器。

167-O C : 93は湊焼の火消壺形藏骨器である。97は同形器種の蓋で内面脚部に「玄太郎」の墨書き文字が見られる。96は土師質の火舍である。

169-O X : 90は施釉陶器で鉄軸の施される雪平鍋の蓋である。

179-O K : 122・123は平瓦で124は丸瓦である。第6章第1節第2項に特徴を記し分類しているので参照願いたい。

#### 墓塙出土遺物（第191～193図）

59-O U : 157は火打金である。琴柱状を呈する。腐食著しく紐穴穿孔部は不明である。

60-O U : 136は古伊万里酒杯である。

63-O U : 150は鼈甲製の笄で遺存状態が悪い。端部が丸く幅広で中央部の幅が狭い。鼈甲特有の半透明の黄色・茶色の模様が見られる。

69-O U : 132は土師皿で内外面無釉でナデ調整され、底部回転系切りされる。

76-O U : 153は銅製リングである。腐食著しく鍍金の有無は不明である。

80-O U : 159は脇差しの柄部分である。柄木木質および鉢形遺存する。両面に位置をずらせて三連の花四葉の目貫が見られる。目釘穴は縁金脇のみ確認できたが、茎の腐食もあり柄尻側の目貫下にもあるかも知れない。柄巻の痕跡は認められない。

87-O U : 133は内外面無釉でナデ調整される土師皿で底部回転系切りされる。156は逆台形状を呈する剃刀で腐食著しい。

95-O U : 126は箱形座卓である。底板・側板とも板目製材が使われる。側板同士の接続は枘穴に差し込み固定する。釘は全て底板からの打ち上げで角釘が使用される。

97-O U : 138・139は唐津焼の皿で共に3点の胎土目が見られる。

99-O U : 140は滑石製數珠親玉である。

101-O U : 146は鉄軸を被る陶器水滴である。体部側面注水孔を穿ち、注水口は上端部を3方向から折り曲げて作り出している。体部対角線上に布袋さんの寝姿

と組紐のミニチュアを貼りつける。147は水成岩製の硯で海部に墨の痕跡が残り、陸部は良く使い込まれて起伏が見られる。

104-O U: 127は箱形座棺である。棺底部にはタール状の遺存物質が付着する。

110-O U: 151は銅製の笄である。銅板2枚を重ね合わせ基部で金糸を巻き付けて固定される。155は刀子である。鞘部および柄部の木質遺存する。柄縁金部腐食著しいが痕跡を確認できる。茎も小さく短い。鏃もなく平造で鋒部に向けて身幅を狭め帽子も直線的で小刀状の物である。

112-O U: 160は鏃もなく平造で鋒部が身の長さの半分以上ある。身の長さも短く刀子や小刀状のサイズであるが、鍔を持ち造りも精巧である。柄・茎は失われているが刃区から鍔にかけて区金具、鍔に切羽、柄と鍔の接点に縁金を具える。鍔は銅製で装饰性の高い10葉の花弁状の透かし彫で一ヵ所顧穴をしつらえる。造りの精巧さから刀として捉えているが、おそらくは護刀であろう。

113-O U: 135は無軸土師皿で内外面ナデ調整され底部回転糸切りされる。

117-O U: 143はガラス製眼鏡レンズで144は合成樹脂製入歎である。

120-O U: 128~131は無軸土師皿で内外面ナデ調整され底部回転糸切りされる。

123-O U: 141は滑石製数珠小玉である。

125-O U: 161は短刀（脇差し）である。全体に腐食著しい。柄部には木質、駿皮、柄巻の布が遺存する。目釘穴と目貫と考えられる金具を表裏の位置関係で確認している。鞘部には木質、木質上に黒漆が遺存する。鍔周辺は腐食著しく鏃が全体をほぼ覆うため縁金等の鍔周り金具は目視確認できていないが、鍔の形は拳形と考えている。

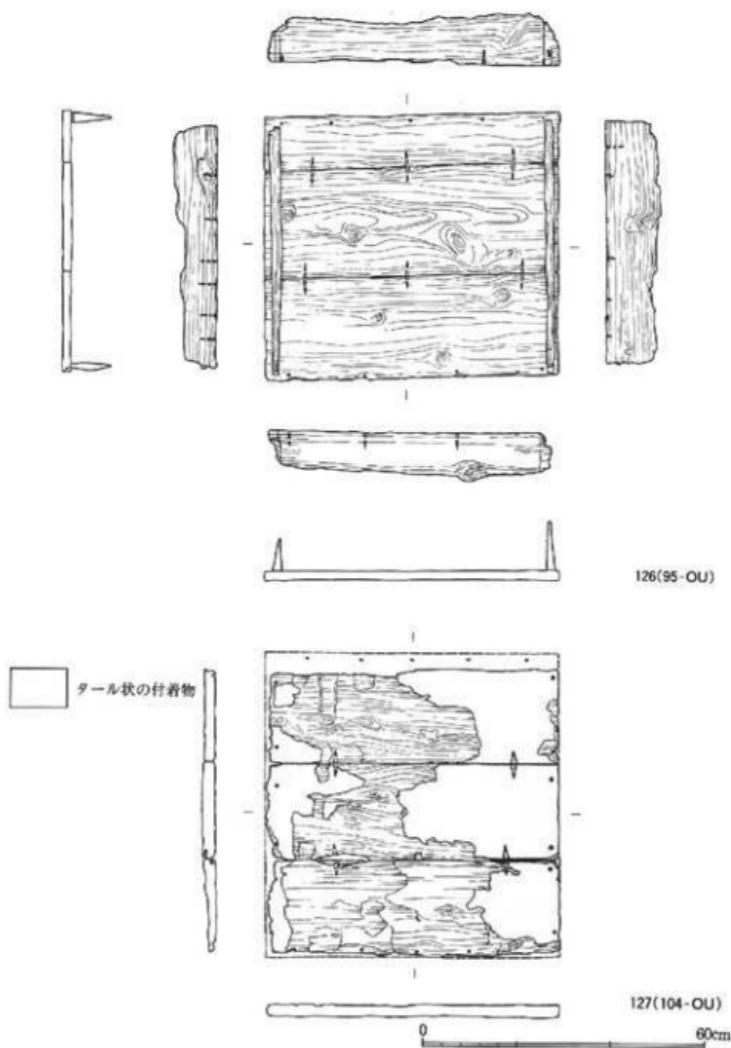
128-O U: 148はガラス瓶で淡い緑色を呈する。瓶全体に成形時の細かな気泡が見られる。アルファベットで「DOSHU MACHI」の文字が見られる。検出時コルクの栓がされ149のガラス製ストローが差し込まれていた。道修町は江戸末期よりの薬問屋街であり、薬瓶と考えられる。

130-O U: 145は鳥形泥人形である。型取りで合わせる。

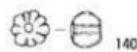
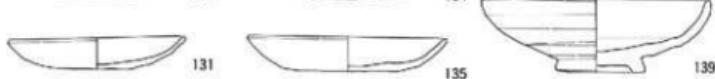
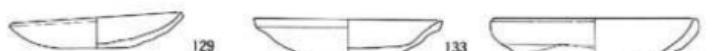
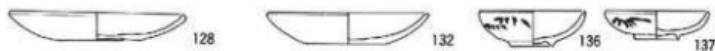
137-O U: 152は銅製簪である。3段重ねの花菱飾りが見られるが、先端部に取り付く飾りを欠失している。

149-O U: 134は無軸土師皿で内外面ナデ調整され底部回転糸切りされる。

154-O U: 142は数珠上玉である。154は煙草入れの銅製口金具である。158は刃部が

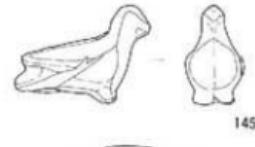
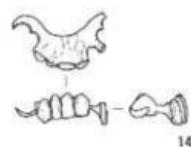
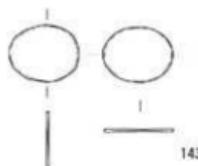


第191図 旧長瀬墓地墓塚出土遺物（1）



0 0 0  
141

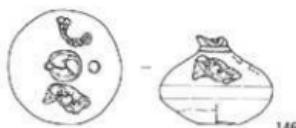
0 0 0 0 0 0  
142



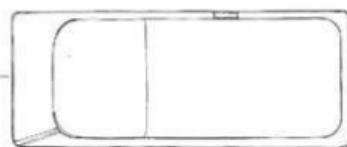
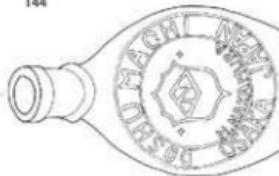
143

144

145



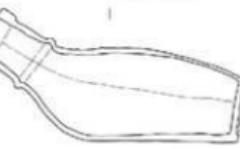
146



148



147



149

0 10cm

129-OU(129,129,130,131)  
80-OU(136)  
154-OU(142)

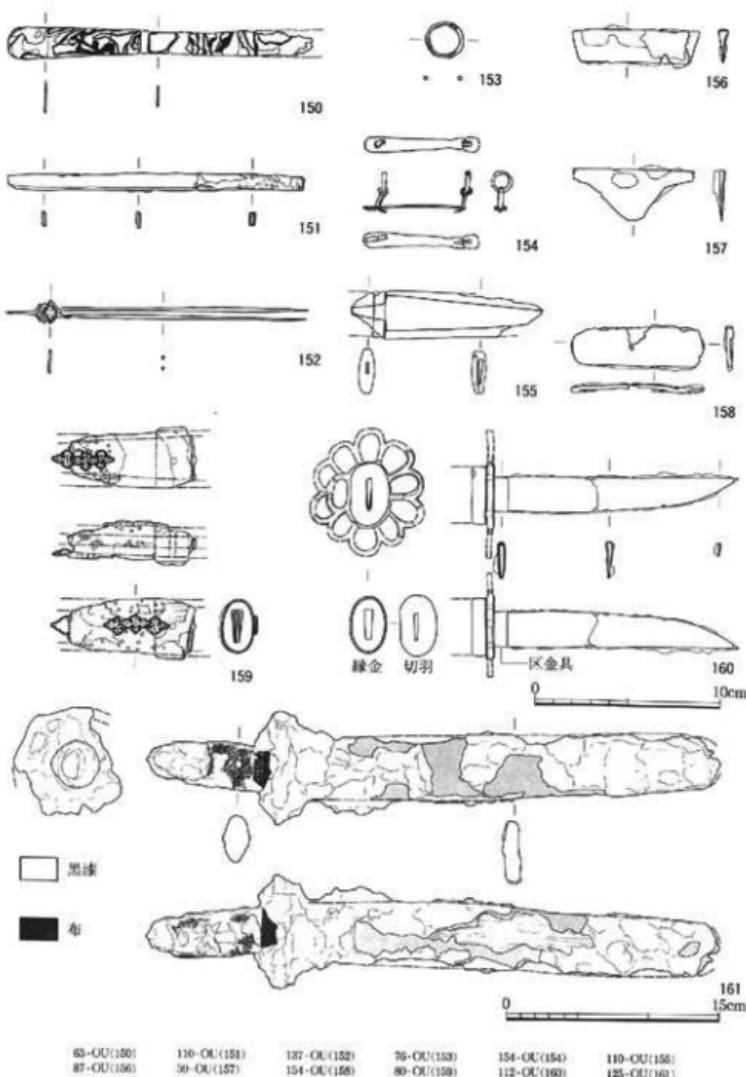
69-OU(132)  
155-OU(137)  
117-OU(143,144)

87-OU(133)  
92-OU(138,129)  
130-OU(145)

119-OU(134)  
99-OU(140)  
101-OU(146,147)

113-OU(135)  
123-OU(141)  
128-OU(148,149)

第192図 旧長滝墓地墓塚出土遺物（2）



第193図 旧長瀬墓地墓塚出土遺物（3）

なく茎状の鉄製品である。火打金の代用品であるかも知れない。

156-O U: 137は古伊万里酒杯である。

#### 釘（第202図）

墓壙検出の釘のほとんど全ては角釘である。墓壙中1基のみ丸釘との併用が見られた。長さを「寸」で計測し点数を数えたが規則性は見いだせない。各墓壙で多用された釘のまわりはおおむね読み取ることは出来るが、座棺部位による使用釘の規則性も見いだせない。また側板の固定に使用された錐も検出している。各墓壙出土の釘の数量等の詳細は第12表に掲載しているので参照願いたい。

#### 飾り金具（第194図）

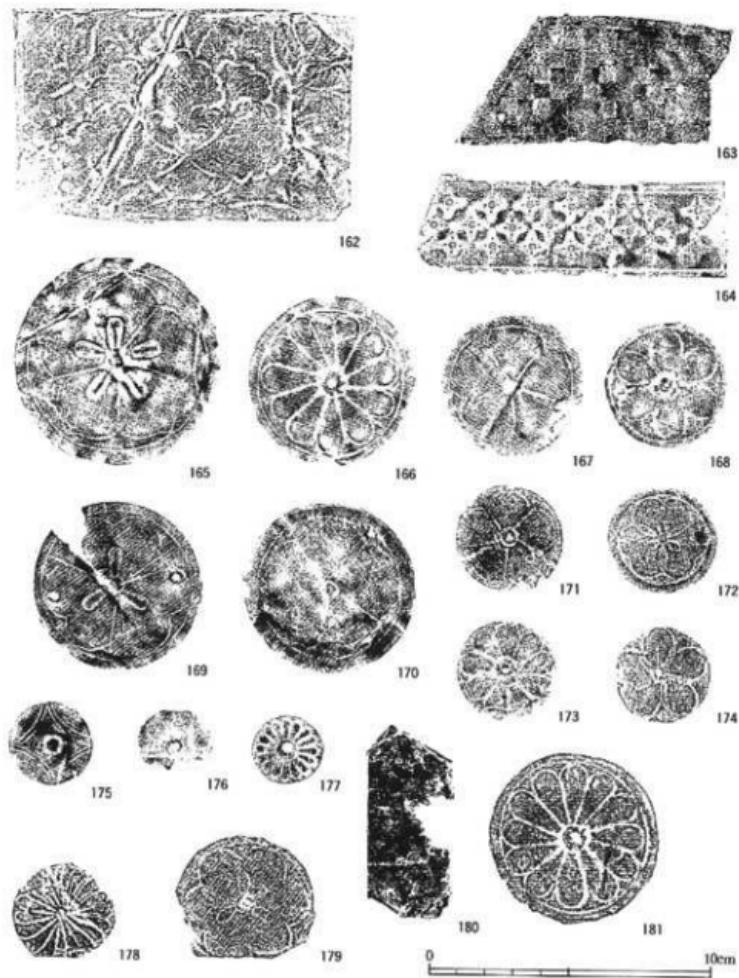
162~177は整地土内炭層出土飾り金具拓影である。全て焼成を受けている。178~181は104-O U墓壙出土飾り金具拓影である。墓壙中唯一の出土例である。当然焼成を受けていない。出土飾り金具の釘穴は全て丸形である。成形方法は基本的には鋼板の打ち抜きによるが、細部や一部の文様は刻印による。形状・文様・法量等の詳細は第13表に掲載しているので参照願いたい。

#### 錢貨（第195~197図）

182~254は錢貨拓影である。出土総枚数は実に858枚を数える。整地土（炭層含む）中より565枚、墓壙中より280枚の出土を見ている。ほか土坑埋土中より13枚出土している。整地土中の錢貨のほとんどは焼成を受けている。出土錢貨のほとんどは「六道錢」として使用されたものである。種類別には寛永通宝錢9種類の合計676枚と最も多く、次いで渡来錢28種類の合計（模鋳錢も含む）106枚を数える。ほかに近代錢や木錢・模造錢もある。各種錢貨の種類や枚数のほか出土状況やセット関係等の詳細は第14表に掲載しているので参照願いたい。

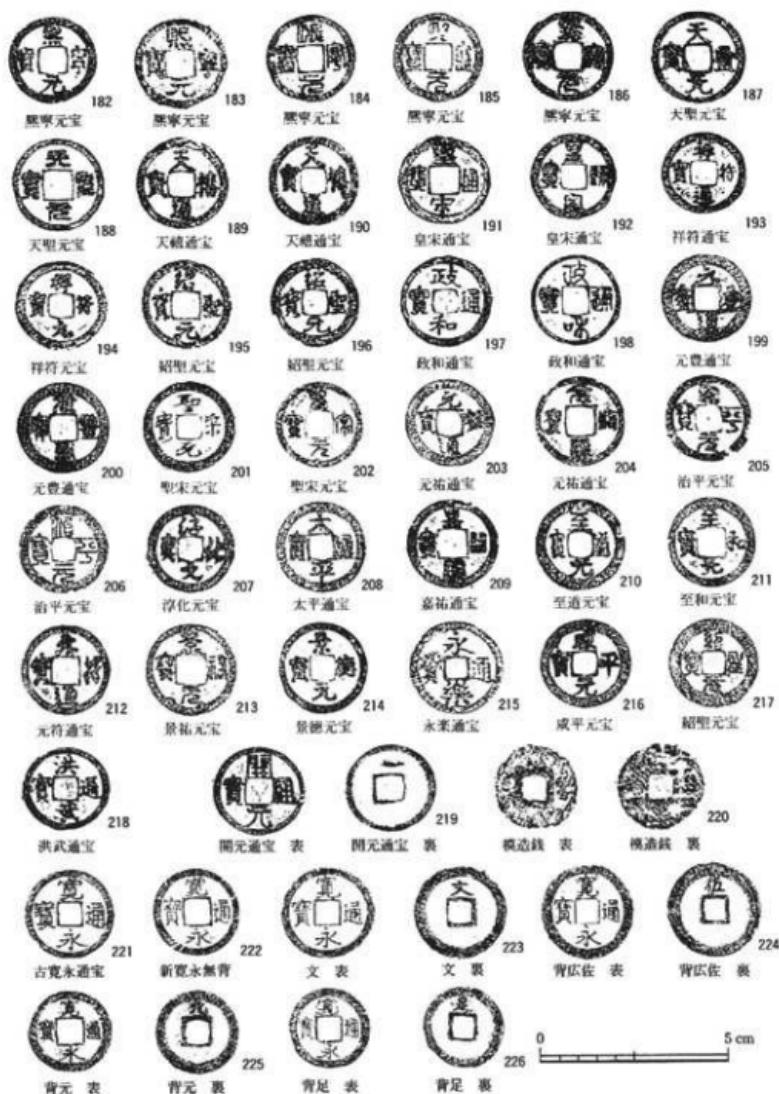
#### 煙管（第198~199図）

255~283は旧長瀧墓地出土煙管である。255~270・272は墓壙から出土したものである。<sup>13</sup>ほとんど吸い口・雁首部分に竹管の一部が遺存する。出土状況をもとに復元長をもとめている。271・273~283は整地土（炭層含む）・溝等よりの出土である。吸い口・雁首部分共に竹管の遺存はない。雁首の高さも個体差があり、吸い口端部の形状も円球状の膨らみをもつものなど個体差が認められる。また竹管部がなく雁首から吸い口部まで全て銅製のものなどや銀鍍金をほどこし装飾性のあるものなどがあり、嗜好品の用具としての特質をうかがわせるものもある。煙管各部の法量等の詳細は第15表に掲載しているので参照願いた



162~177 36・37・55・96E6 整地土(灰層含む)出土  
178~181 36E 104-OJ出土

第194図 旧長滝墓地出土飾り金具拓影

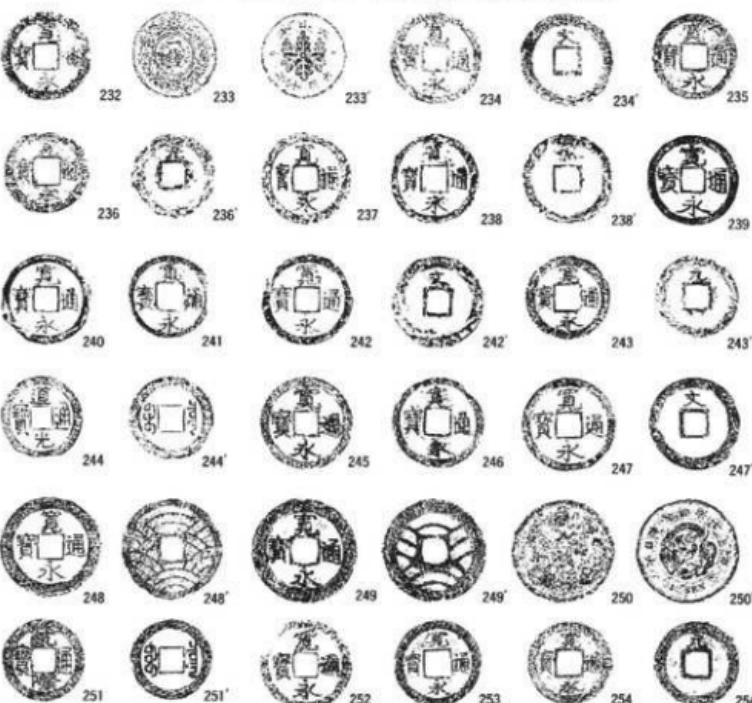


※222~225は新寛永通宝

第195図 旧長治墓地整地土（炭層含む）出土各種波来錢、寛永通宝拓影



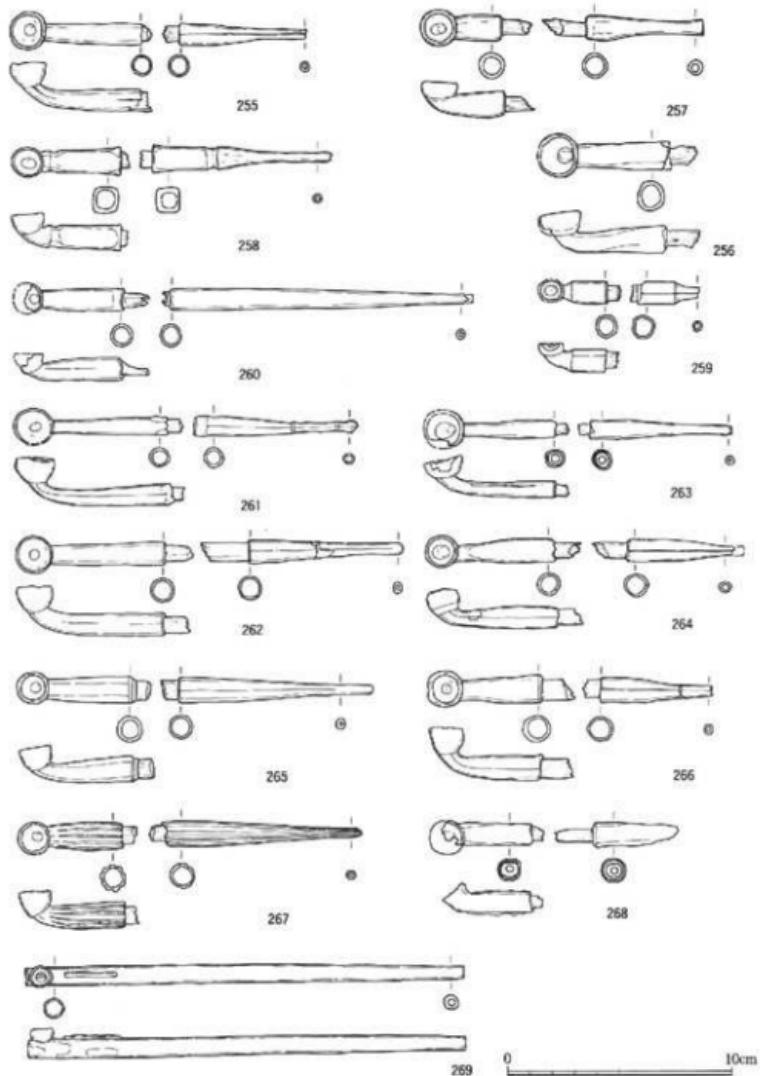
第196図 旧長淹墓地整地土（炭層含む）出土各種近代銭拓影



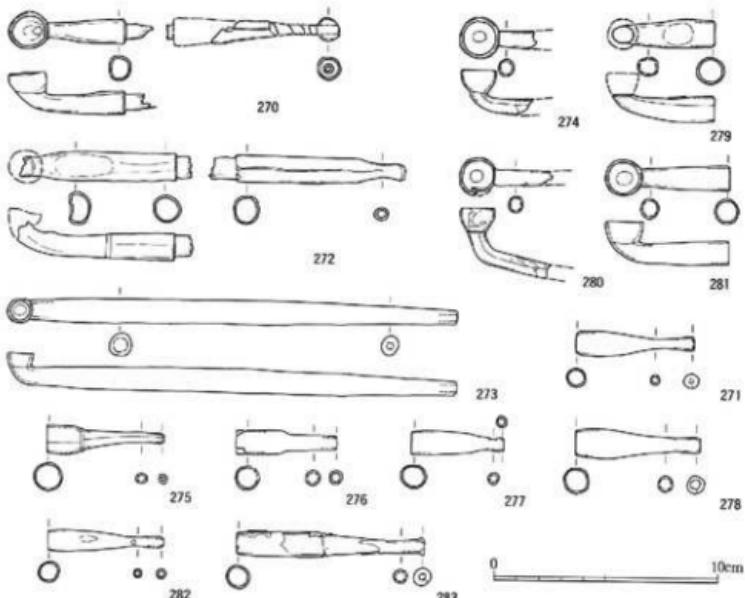
77-OU(232,233) 84-OU(234) 109-OU(235,236)  
110-OU(237,238:新寛永通宝 背左)  
111-OU(239,240) 112-OU(239,240)  
114-OU(241,242,243) 117-OU(244:道光通宝,245,246,247)  
129-OU(248:折寛永通宝 21度,249:折寛永通宝 11度,250)  
139-OU(251:乾隆通宝,252,253,254)

0 5 cm

第197図 旧長淹墓地墓塚出土銭貨拓影



第198図 旧長滝墓地出土煙管（1）



59-OJ(255) 84-OJ(256) 85-OJ(257) 87-OJ(258) 98-OJ(259) 75-OJ(260) 99-OJ(261) 104-OJ(262)  
105-OJ(263) 106-OJ(264) 107-OJ(265) 108-OJ(266) 110-OJ(267) 115-OJ(268) 117-OJ(269) 125-OJ(270)  
3-OJ(271) 151-OJ(272) 152-OJ(273, 274, 275, 276, 277, 278) 167-OJ(279) 駕籠土(280, 281, 282, 283)

第199図 旧長瀧墓地出土煙管（2）

い。

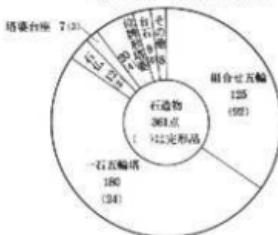
#### 石造物（第200・201図）

植田池跡内特に旧長瀧墓地周辺部で出土した石造物は361点を数える。そのほとんどは墓地関連の石塔類である。量的にみて墓地域内からの散逸状況がうかがえ、石垣に利用されていたり、墓地内遺存遺構の区画石列等や整地土中からの出土であった。僧侶の墓石は1点もない。石塔はほとんどが和泉砂岩製である。花崗岩製は組合せ五輪塔火輪1点のみであった。

石造物の種類と組合せ五輪塔の各部位の内訳の詳細は第3表と第4表に掲載しているので参照願いたい。

284～303は石塔類の実測図および紀年銘・凡字の拓影である。284～292は一石五輪塔である。高さ約40～70cmの範疇に収まる。出土点数180点中完形に近く紀年銘をもつものの内9点を図示した。各部位の法量等の詳細は第16表に掲載しているので参照願いたい。ま

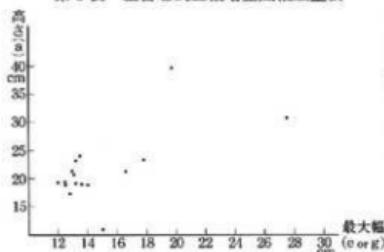
第3表 石造物点数表



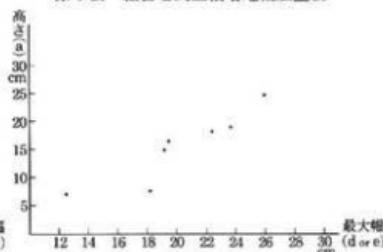
第4表 組合せ式五輪塔点数表



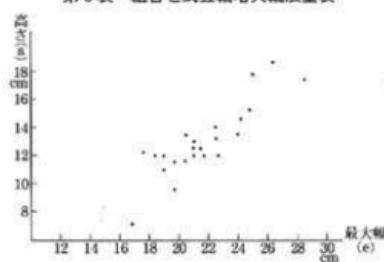
第5表 組合せ式五輪塔空風輪法量表



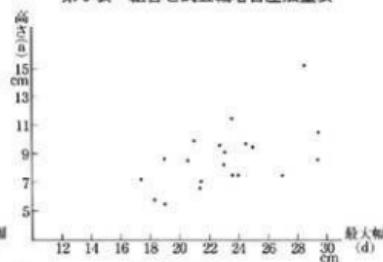
第8表 組合せ式五輪塔地輪法量表



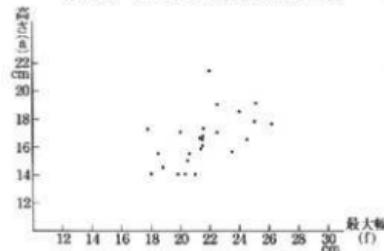
第6表 組合せ式五輪塔火輪法量表



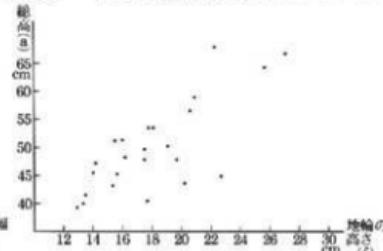
第9表 組合せ式五輪塔台座法量表



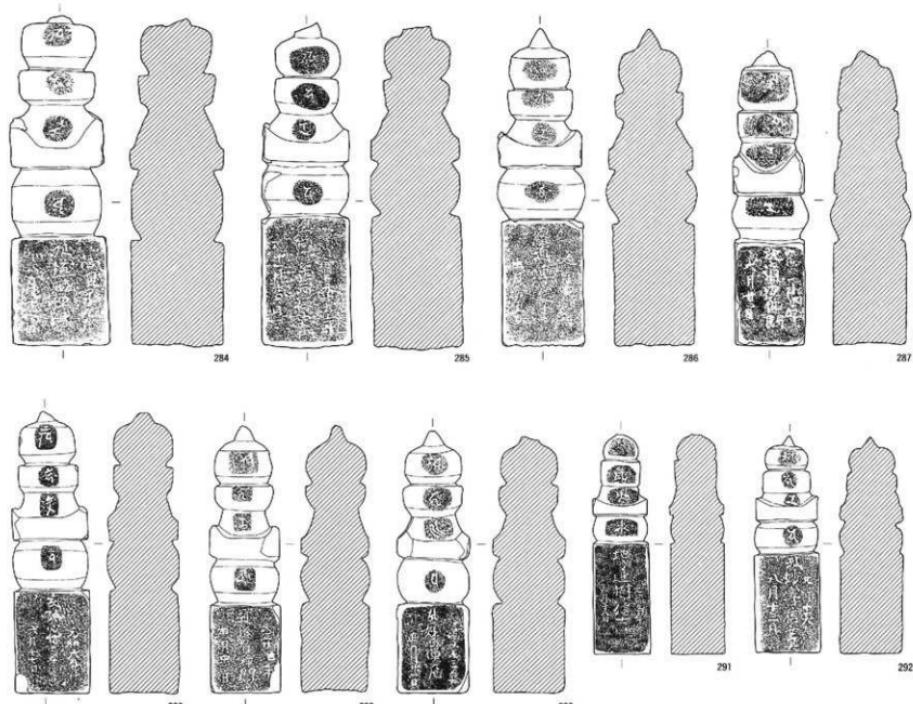
第7表 組合せ式五輪塔水輪法量表



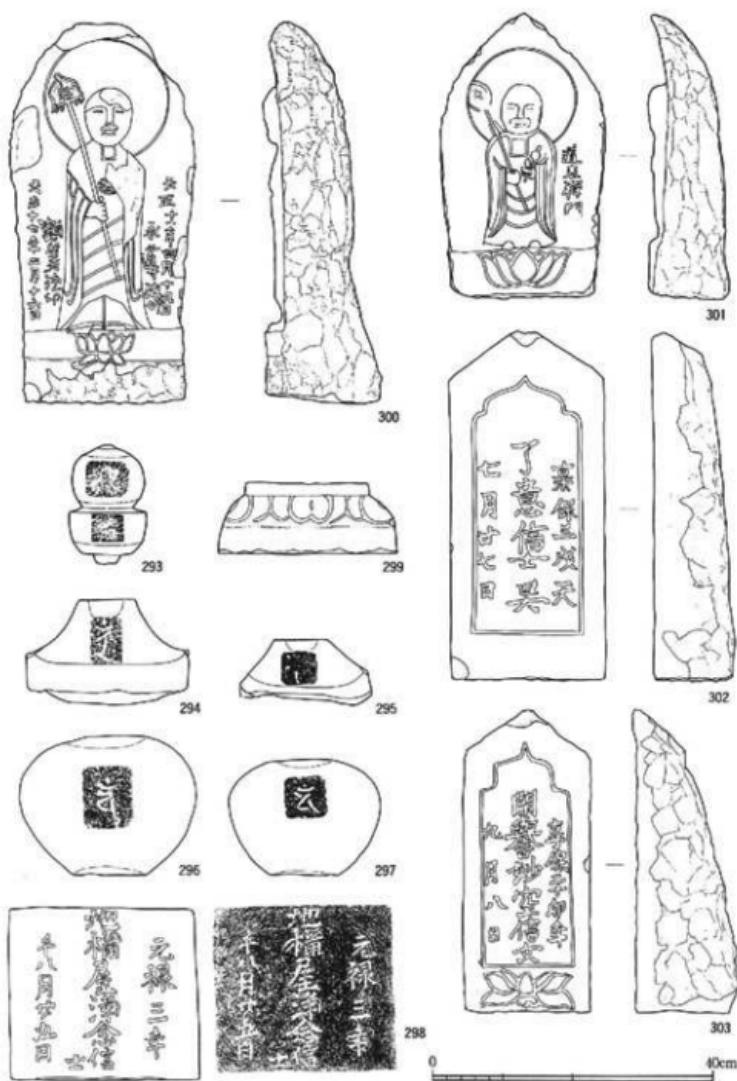
第10表 一石五輪塔地輪法量表(地輪に対する地輪の高さ)



※実測分中、ほぼ完形の高さは完形品に含め、復元高を使用して作表した。



第200図 旧長淹墓地出土石塔（1）



第201図 旧長瀬墓地出土石塔（2）

た絶高に対する地輪高の法量グラフを第10表に掲載している。紀年銘との対比でみるかぎり、絶高に占める地輪高の比率は〈低い=古い〉とは言い切れずばらつきがあるようである。

293～299は組合せ五輪塔の実測図と紀年銘・凡字の拓影である。火輪・水輪については大小2タイプを図示している。おおむね空輪下部を火輪上部に差し込み、水輪上部の窪みに肥厚した火輪下部を据えるようである。地輪上部は極端な突出もなく平坦に近いものが多いようであるが、絶対数が極めて少ない。台座は図示したサイズが平均的なもので上部は平滑に仕上げる。第5表から第9表に法量グラフを掲載しているので参照願いたい。ある程度の放射状の配点やまとまりは看取されるが、出土点数や組合せなど不鮮明であり、全体としての規格性は判然としない。

300～303は石仏・塔婆である。石仏は座像もあるが、完形品は他にない。塔婆は尖頭状のものが多い。刻り込み部に紀年銘等が見える。

#### 4 まとめ

調査により出現した「旧長滝墓地」は墓地施設を含めその上部構造が「旧飛行場」建設によりことごとく削平を受け消滅している。「諧墓」は削平を受け完全に消滅し、検出墓壙の遺存深度は特定の場所を除き浅いものが多く、立木類は木の根跡のみかろうじて残る。

移転直前の墓地域の範囲を特定するため明治20年代作成の切図をもとに作成した「水利図」を使用しその景観の復元に努めた。墓地域を閉む「結界溝」もかろうじて遺存しており、その範囲の9割以上を把握することが出来たが、一部は調査地外であった。遺存する遺構と「水利図」や「日根荘総合調査」事務局による付近の聞き取り調査も参考にしながら同定作業を行った。結果として三ヵ所の入口施設と水場、お堂、礼場等の位置を特定することが出来た。残念ながら「火葬場」の位置は不明である。

「長滝村極楽寺三昧境内図」（以下「三昧図」）収録の文献によれば三昧坪数は三千坪を有すると言われる。「三昧図」に見える安雲川が安松川であることに注目し、その墓地域の範囲の検討を試みた。その結果「結界溝」の範囲はほぼ変わらないことが判明した。実際上は「水利図」のごとく南北に長く、「三昧図」が南北に圧縮して描かれていることが判明した。次に検出遺構と「三昧図」に描かれた施設等との比較検討を行った。その結果入口と水場や結界溝である小川との位置関係、下墓域（埋墓域）と上墓域（諧墓域）灰山、火葬場、本堂の位置を特定することが出来た。残念ながら「礼場」の位置は不明である。

「三昧図」以前の墓地域は北限に位置する墓壙の年代から考えて北側に広がるようであ

る。整地土中より出土した近世初頭頃（17C代）の瓦と時期的にも符合するが、堂宇等の建物の位置の特定は出来なかった。安松川の始期は付近水路を含めた包含遺物よりみて18世紀代に遡る。三昧岡に見られる安松川の出現期もこの頃であろう。18世紀中葉頃にその画期を求めることが出来る。「泉州下組庵室三昧明細帳」<sup>11)</sup>の書かれた天保14年（1843）の時期以前にも建物他一連の遺構の存在も確認できる。161-O Bを巡る溝と168-O Lはつながり安松川ともつながる。付近検出の墓壙遺存深度も深く、比較的削平されず平坦な地形であった事がわかる。三昧岡にその位置は描かれていない。

また中世の罹災した建物跡も確認されている。罹災以降の整地により建物を巡る溝のみ遺存する。

墓地内建物に付随する瓦の年代観からいえば罹災以後に出現する瓦は近世初頭頃のものであり、建物罹災の時期は特定できないが、再建時に中世瓦の使用が認められないことから、多くの中世墓地が室町時代後期から戦国時代にかけて終焉するごとく、墓地そのものを含めた断絶期があったものと考えている。<sup>12)</sup>

旧墓地は中位段丘面の傾斜変換点に沿うように立地する。傾斜変換点は墓地南東方向にも延びる。斜面下位から望めば尾根状の景観を示していたであろう。12区で出土した奈良時代の須恵器藏骨器はこの尾根状の傾斜変換点斜面から、開墾時に転落破碎して、二次堆積したものであり、付近が古来より墓域であったと考えられる。<sup>13)-16)</sup>

「水利図」に示された旧長滝墓地には「慶信山」、南東側には「勇玄寺」の字名が見え興味深い。<sup>17)</sup> 37区「結界溝」直下および南側の調査では寺院関連の遺構・遺物は傾斜面で検出した瓦窯本体の痕跡のみで、灰原の検出はない。出土瓦よりみて古代寺院と考えられている桜井寺関連の瓦窯の一つかも知れない。傾斜面裾部は自然流路が流れるのみで、小流路からは中世土器である白土器が出土しており、中世の墓地の景観はまさに「山」であり、丘陵状を呈していたと考えられる。

検出した墓壙（埋葬）は100数基を数える。その殆どは近世から近代にかけてのものである。確認した中で最も古いものは17世紀第一四半期迄のものであった。墓壙群の時期はそのままでや結界溝である安松川との関係から、付近の開発期と考えられる18世紀以降のものである。18世紀中葉頃にその画期があると考えているが、副葬される銭貨等の供獻遺物からの詳細な埋葬時期の特定は難しい。特に銭貨では寛永通宝銭と近代銭の併用がみられ、寛永通宝銭のみの出土をもって近世と断定するのは危険を伴う。また木銭との併用もあり、埋葬時期の特定も難しい。近代に至っても埋葬習俗として寛永通宝銭の使用が認

められる。

副葬品の種類も多い。約4割近くの墓壙で銭貨の副葬を確認している。次いで煙管の副葬が多い。雁首の形態の観察により、ある程度の新古の判断が出来そうである。その他土師皿・数珠・刀の順で副葬が多い。数珠には種子に朱漆を塗ったものも見られる。刀には脇差しも見られ、被葬者の社会階層を示すものかも知れない。おむね箱形座棺に納められる副葬品の点数・種類が多く多岐にわたっている。

最後にそれぞれの検出墓壙がそれぞれの時代の習俗に則り丁重に埋葬されていたことを報告し本稿を終える。合掌！

#### (追記)

現地調査にあたっては多くの同僚諸氏の励ましを受けた。井藤 晚子氏には特に民俗学調査による資料等の提供を受けた。記して感謝申し上げる。

本報告書作成にあたっては多くの時間を費やす結果となった。時間的な制約もあり、また実測原図や遺物の管理形態の違いもあり、編集者として打つ手無しの状態であった。最終的には調査部上席の判断もあり本報告書刊行の運びとなったものである。編集者として、また空港関連の発掘調査担当者として、りんくうタウン造成前の汀線際の海中の調査や連絡道路の調査初期に見られた未買収用地を借地しての調査から、橋脚の立ち上がったなかでの最終期の調査まで終始関わってきたものとして、不本意な体裁の報告書刊行の運びとなったことは断腸の思いがある。

本調査は足掛け5年にもおよびその間確実に歳を重ねてきた。その意味では青春を駆けた調査であったことに違いがない。本来我々の仕事は目立たないもので、コツコツと分かった事実を積み重ねていくものと心得ている。どういう形にしろ報告の義務を果したことの一応の安堵感はある。取り扱うものが古いにしろ新しいにしろ向かい合う姿勢は今後とも同じものでありたい。

#### 註

- 1) 「陸軍明野飛行学校佐野分校跡の調査」 稲野 修司著  
『歴史科学』第94号 1983.9.29 収録
- 2) 移転後の長掩墓地は旧墓地より南西0.5kmに位置する。
- 3) 法務局所管の「切図」を合成し、一部抜粋しトレースして使用した。本文では墓地域の範囲を特定するため、墓地域を囲む「結界溝」である水利溝に注目し「水利図」として掲載している。このため併記される地番は省略した。なお方位は図中に示される方向を記した。

- 4) 旧協会委託「日根莊総合調査」事務局員である井藤 瞳子氏等による聞き取り調査では48-〇〇が「源助洞」と呼ばれ隣接の10-〇Wの井戸とともに「今井池」(ゆうまいいけ)の管理下にある。
- 5) 旧協会委託「日根莊総合調査」事務局員である井藤 瞳子氏等による聞き取り調査によると、建物は大正年間に建てられたもので1間×1間の規模であった。現在の墓地に移転して現存している。
- 6) 「近世三昧型考：『泉州下組庵室三昧明細帳』の史料紹介とその周辺」  
上別府 茂著 『仏教民俗学体系2（聖と民衆）』 名著出版  
昭和61年12月25日（1986）収録の図を一部改変して使用している。
- 7) 大阪府教育委員会文化財保護課 佐久間 黃土氏の御教授による。
- 8) 凹面布目が残りこびき法の痕跡が認められる。
- 9) 大阪府立岸和田高等学校郷土資料室編  
『和泉地方における金石文拓本所在地目録』 1967 収録  
「長瀬共同墓地の墓碑調査」
- 10) 『泉佐野市史』 榎田 実編 昭和33年5月1日（1958） 泉佐野市役所
- 11) 副葬品や錢貨（六道鉄）の種類などにより分類した。
- 12) 実測にあたっては旧協会技師 田中 一廣氏の手を煩わせた。漆器実測図同様遺構出土状態良好な遺物についてのみ同氏作図の実測図をトレースした。原図は全て同氏が保管されているので、コピー写しを原図に代わるものとして保管している。
- 13) 註6の文献による。
- 14) 「中世墓地ノート」P25掲載の〈七・中世墓地の終焉〉 藤澤 典彦著  
『仏教芸術』182号 1989 毎日新聞社収録
- 15) 註14の「中世墓地ノート」P13 〈二・中世墓地の点定〉
- 16) 『一ノ谷中世墳墓群遺跡』本文編 1993 磐田市教育委員会  
P414掲載の〈2・寺院と墓地〉
- 17) 旧協会委託「日根莊総合調査」事務局よりの御教授による。

第11表 日長港基地換出基準一覧表

地区	港名	航路の分類	航路の距離	打		船・車		航路												
				内	外	内	外													
30	30	(内) 加須、桶川	0.65×0.05	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	30	(外)	0.7×0.1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	31	不、駒	1.17×1.95×0.25	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	32	不、駒	0.68×0.87×1.36	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	33	1.24×1.35×1.15	0.5×0.8×0.72	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	34	1.65×0.95×1.1	0.6×0.95×1.61	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	35	1.1×1.1×0.95	0.51×0.51×0.38	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	36	1.1×1.1×1.25	0.67×0.67×0.6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	37	1.0×1.29×0.3	0.68×0.5×0.05	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	38	1.9×1.9×1.2	0.6×0.5×0.31	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	39	1.6×1.6×0.55	0.45×0.4×0.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	70	0.65×0.8×0.25	0.65×0.65×0.11	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	71	1.15×0.95×1.25	0.55×0.55×0.7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	72	1.0×0.85×0.5	0.55×0.25×0.4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	73	1.9×1.1×0.2	不、駒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	74	1.9×1.1×0.2	不、駒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	75	1.9×1.4×0.2	不、駒	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	76	0.65×0.52×0.3	0.55×0.3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	77	0.8×0.65×0.95	0.5×0.5×0.7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

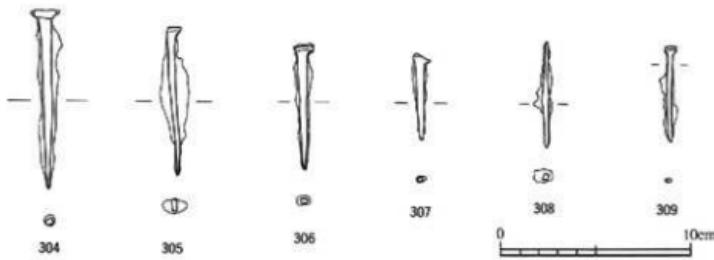
## 第6章 検出遺構と出土遺物の検討



名前	番号	測定方法	形状		寸法		材質	付属品	備考
			幅	高さ	幅	高さ			
W65-268	118	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-318	119	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-319	120	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-320	121	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-321	122	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-322	123	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-323	124	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-324	125	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-325	126	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-326	127	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-327	128	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-328	129	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-329	130	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-330	131	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-331	132	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-332	133	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-333	134	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-334	135	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-335	136	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			
W65-336	137	直方体測定	円	約5mm	約5mm	約5mm	木	無	木板、漆喰等
	○		○	○	○	○			

地名	海拔(m)	植物种类			动物种类			矿产			经济			其他		
		蕨类	裸子植物	被子植物	两栖类	爬行类	鸟类	昆虫	蝶类	蝶类	昆虫	淡水鱼	底栖类	贝类	藻类	地热
37	1,380	○		○			○									温泉(硫化物、含氯)
37	1,650±165±0.35	1.6±0.35	35±1				○									温泉(硫化物、含氯)
37	120	○		○			○									温泉(硫化物、含氯)
37	120	0.05±0.12	4.5±0.12				○									温泉(硫化物、含氯)
37	140	0.88±77.0±0.15	0.55±0.48±0.15				○									温泉(硫化物、含氯)±0.15
37	141	0.77±0.65±0.05	0.69±0.65±0.05				○									温泉(硫化物、含氯)±0.15
37	142	○		○			○									温泉(硫化物、含氯)
37	143	0.68±0.8±0.05	0.4±0.05				○									温泉(硫化物、含氯)
37	144	0.73±0.61±0.04	0.5±0.4±0.04				○									温泉(硫化物、含氯)
37	145	0.95±0.45					○									温泉(硫化物、含氯)
37	146	○		○			○									温泉(硫化物、含氯)
37	147	○		○			○									温泉(硫化物、含氯)
37	148	0.8±0.7±0.04	0.55±0.04				○									温泉(硫化物、含氯)±0.04
37	149	○		○			○									温泉(硫化物、含氯)
37	150	1.0±0.8	0.5±0.7				○									温泉(硫化物、含氯)
37	151	○		○			○									温泉(硫化物、含氯)
37	152	1.3±1.1±0.2	2.0±0.2				○									温泉(硫化物、含氯)
37	153	○		○			○									温泉(硫化物、含氯)
37	154	0.8±0.22	0.5±0.22				○									温泉(硫化物、含氯)
37	155	○		○			○									温泉(硫化物、含氯)
38	1.5±0.45	不耐		○			○									温泉(硫化物、含氯)
38	0.8±0.3±0.35	不耐		○			○									温泉(硫化物、含氯)
38	1.3±0.9±0.13	不耐		○			○									温泉(硫化物、含氯)





第202図 旧長瀬墓地墓壙出土釘

第12表 旧長瀬墓地検出墓壙出土釘点数一覧表

地区 番号	通鑑 番号	箇所										備考 （参考調査の番号）	合計
		1寸 半	1寸 3分	1寸 5分	1寸 7分	1寸 9分	1寸 11分	1寸 13分	1寸 15分	1寸 17分	1寸 19分		
31	81-01	5	33			48	8.8~7.2cm6点						82
31	82-01	1		21		18							36
31	83-01	1	14	5	1		37	3.6~7.5cm1点					72
31	84-01		2	10	21	31							70
31	85-01		2	3	6	45	7.0cm3点、8.5cm8点						56
31	86-01	1	8	3	7	16							35
31	87-01			27	2	42							71
31	88-01	1	8	29	1	14	22						76
31	89-01	1	5	1	7	9							23
31	91-01	3	5	1		41							56
31	92-01					47							47
31	93-01	1	19			15							35
31	94-01	5	3	1		31							42
31	95-01	2	4	3		16							35
31	96-01		8			9							17
31	97-01	1	11			13							25
31	98-01	1				7							8
31	99-01	1	2	4	8	1	44						60
31	100-01	3	4			19	8.0cm5点						25
31	101-01	5	11	7		23							44
31	102-01	1	2	4	3	9							35
31	103-01	18	4	6		16							47
31	104-01	2	2	6		40	8cm5点、8.5cm1点						39
31	105-01	4	3	2		40	8cm1点						49
31	106-01	1	7	6		47	8cm4点						61
31	107-01	5	12	1		40							56
31	108-01	1	1	3	4	1	25						34
31	109-01	1	6	15	12	2	42	8cm2点					78
31	110-01	2	5	6	16	54	7cm1点、8cm8点 鉛(365)						77

※ 1寸=3.0cmで計算し、点数を記した。その他の大部分は磁器による局所が著しく計測不能である。またその他のうち「寸」で割り切れないものは「cm」で表示し点数を参考欄に記した。

備考欄の「鉛」(かずかい)は原鉛頭部および底板、天井板の接着に使用されたもので、いずれも両端の尖るものである。

第13表 旧長瀬墓地出土飾り金具一覧表

\* 釘、釘穴は全て丸型 厚み記述なきものは全て0.5mm以下

第14表 旧長瀬墓地出土鐵貨一覽表



卷之三

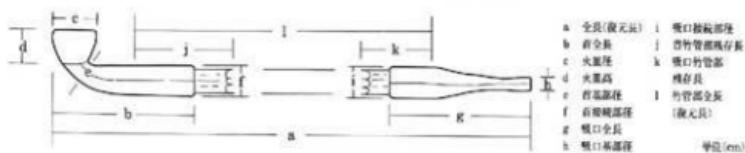
不規則には種々の形で現れる。

開元通寶、天聖元宝、景德元宝、元豐通寶、洪武通寶、永治通寶、萬曆通寶等。

近代以前の古代は種々種に示す。  
その他の不明點には判別不能、代替標題既と思われるものを示す。

卷之三

第15表 旧長瀬墓地出土煙管一覧表



地区	遺構	埋	置	各								備				
				a	b	c	d	e	f	g	h	i				
31	59-00	○	○	14.0	5.7	1.5	1.1	0.6	1.0	5.7	0.4	1.0	2.4	2.4	7.4	竹管接続部分近道、新規部第一部火薬 瓶(255)
31	84-00	○	○	不規	5.9	1.9	1.9	0.9	0.75	—	—	—	—	—	竹管接続部分近道存、火薬・接続部一部火薬 瓶(256)	
31	85-00	○	○	22.0	3.7	1.5	0.5	0.85	1.05	5.25	0.75	1.1	2.8	4.0	16.5	竹管接続部分近道存、首・吸口部ともに完形、 瓶(257)
31	87-00	○	○	31.0	4.0	1.4	0.9	0.8	1.2	6.0	(0.4)	1.3	3.0	2.8	21.5	当管接続部分近道、首部火薬瓶上部(中央火薬 瓶)に付属する火薬瓶を除く外は、火薬瓶から火薬瓶 瓶(258)
31	92-00	○	○	不規	2.4	1.1	0.6	0.75	1.0	残存	不規	(1.0)	2.2	1.8	不規	当管接続部分近道、首・吸口・接続部全部未発見、 火薬・吸口部も未発見、火薬瓶
31	93-00	○	○	不規	4.8	1.3	0.9	0.7	1.0	12.5	(0.4)	0.95	1.0	4.0	不規	当管接続部分近道存、火薬・吸口基部一部火薬 瓶(259)
36	99-00	○	○	25.0	6.9	1.8	1.1	0.6	1.0	7.4	0.5	0.9	3.4	2.8	16.1	当管接続部分近道存、吸口中央断続部
36	104-00	○	○	不規	6.0	1.55	1.2	0.8	1.0	6.05	0.35	1.05	3.0	4.0	不規	当管接続部分近道存、吸口・首・接続部未発見、火薬 瓶(260)
36	105-00	○	○	不規	5.9	1.7	1.0	0.6	0.75	6.3	0.4	0.8	2.0	1.0	不規	当管接続部分近道存、火薬・吸口
36	106-00	○	○	19.0	5.8	1.35	1.2	0.7	0.9	6.81	不規	1.05	4.4	4.4	11.4	竹管接続部分近道存、吸口基部火薬瓶 瓶(261)
36	107-00	○	○	25.5	5.35	1.45	1.1	0.75	1.05	8.7	0.4	1.1	3.6	3.4	15.8	竹管接続部分近道存、吸口部未発見
36	108-00	○	○	27.6	5.0	1.5	1.2	0.75	1.1	5.15	0.45	1.1	3.0	2.0	20.5	竹管接続部分近道存、火薬・吸口
36	110-00	○	○	28.5	4.6	1.4	1.2	0.85	1.05	9.0	0.4	1.0	3.4	3.4	22.0	当管接続部分近道存、火薬・吸口接続部一部火薬 瓶(262)
36	118-00	○	○	不明	4.5(1.5)	1.1	1.0	0.9	残存	3.8	不規	1.1	2.5	4.0	不規	当管接続部分近道存、火薬・吸口基部火薬瓶 瓶(263)
36	117-00	○	○	19.6	—	1.3	0.6	0.9	—	0.6	—	—	—	—	不規	当管接続部分近道存、吸口上部に付属する火薬瓶 瓶(264)
36	125-00	○	○	30.0	5.1	1.7	0.9	0.7	0.7	7.4	0.4	1.2	2.0	1.5	不規	吸口周囲食害し炭化不能、吸口の基部膨張の 跡有り
36	3-00	—	○	—	—	—	—	—	—	5.25	0.6	0.8	—	—	不規	瓶(271)
37	154-00	○	○	26.5	7.4	不規	不規	0.8	0.9	7.5	0.6	0.9	4.2	6.6	不規	火薬全て欠損、首葉部から中央部にかけて腐食 瓶(272)
37	火 蘭	○	○	20.9	—	1.1	0.5	0.8	—	0.85	—	—	—	—	全葉剥離、中央部延長0.8m	
37	火 蘭	○	—	不規	1.8	1.0	0.6	0.6	不規	—	—	—	—	—	茎葉剥離	
37	火 蘭	—	○	—	—	—	—	—	—	5.2	0.45	1.05	—	—	茎葉剥離	
37	火 蘭	—	○	—	—	—	—	—	—	4.5	0.5	1.05	—	—	茎葉剥離	
37	火 蘭	—	○	—	—	—	—	—	—	4.15	0.5	1.05	—	—	茎葉剥離	
37	火 蘭	—	○	—	—	—	—	—	—	5.5	0.5	1.1	—	—	茎葉剥離	
37	157-00	○	—	不規	不規	不規	0.75	1.1	—	—	—	—	—	—	火薬全て欠損、残存長4.5cm、中央部外延により 瓶(273)	
37	整地土	○	—	不規	1.55	1.05	0.7	不規	—	—	—	—	—	—	火薬破損、基部欠損	
37	整地土	○	—	5.5	1.65	1.0	0.9	1.05	—	—	—	—	—	—	火薬剥離	
37	整地土	—	○	—	—	—	—	—	—	5.1	0.45	0.9	—	—	火薬剥離、基部および中央部一部欠損	
37	整地土	—	○	—	—	—	—	—	—	8.3	0.8	1.0	—	—	中央部破損、基部底部肥厚する	
															瓶(274)	

\* 備考：傳音は打破した場合の性状に就いて、1から20番の出目を示している。いずれも調査で、組合全の施されたものや、竹管部分が全く全て剥離のものもあるが、大半が付着。吸口の接続部に竹管が使用されている。竹管のほとんどは完食して剥離しているが、首や吸口の接続部付近には遺存している。

※ 各部注釈の「」(全長)・(吸口状況)を参考に復元した数値を記した。

（）(竹管部全長)はa-b-gと書く。吸口の接続部ごともめた数値を記した。

＊ 古出土火薬の観察により、首・吸口の方向性、首・吸口の基部側に通す導管がある場合は導管部本体の長さ(全長)を指し示していないものとして「不規」とした。

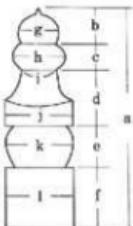
＊ ( )内の数値は推定復元値を記している。複数個の状況により復元不可能な要素について( )上に絶対と明記し、その数値を記した。

石造物一覧表 ※ 地区番号中の（ ）は重複地区を示す。計測値欄中の「・」は破損により計測不能、「-」は計測個所該当なしを示す。

※ 遺構・層位中で炭層とあるのは旧長崎墓地域内（31・37・96区）における整地土中の炭層である。他の整地土とは旧飛行場建設時における整地土である。

※ 37区167-O-Cは整地土上に構築されたものであり、整地面理土中より出土したものについては整地土出土とした。

第16表 一石五輪塔一覧表



空輪

風輪

火輪

水輪

地輪

### 一石五輪塔

※ a～lは計測値、単位はcmで表示した。

a～lのうち（ ）内の数値は残存値を示す。

備考欄中の（ ）内には残存部位を記した。

石材のほとんどは和泉砂岩製である。それ以外は備考欄中に材質を記した。

地区	遺構・層位	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	備考	
														報( )	報告書番号
10	整地土	(16.5)	10.5	-	-	-	-	12.1	-	-	-	-	-	破損(風・火・水輪)	
30	1-O-S	(21.3)	6.0	4.0	6.1	(5.2)	-	8.3	10.1	8.4	11.8	12.0	-	破損(空・風輪)	
30	1-O-S	(16.8)	11.1	5.7	-	-	-	10.0	10.0	-	-	-	-	破損(空・風輪)	
31	炭層	(25.0)	8.0	4.0	6.5	6.5	-	8.5	9.0	9.0	10.5	11.0	-	破損(空・風・火・水輪)	
31	169-O-X	(24.0)	-	-	-	-	24.0	-	-	-	-	-	-	12.7 破損(地輪)	
31	169-O-X	(25.0)	-	-	-	-	25.0	-	-	-	-	-	-	12.0 破損(地輪)	
31	22-O-O	(7.1)	-	-	-	-	(7.1)	-	-	-	-	-	-	11.8 破損(地輪も破損)	
31	炭層	(27.5)	(9.0)	3.0	7.0	8.5	-	8.8	9.0	7.5	12.0	12.0	-	破損(空・風・火・水輪)	
31	整地土	(10.6)	6.3	4.3	-	-	-	8.5	8.5	-	-	-	-	破損(空・風輪)	
31	整地土	(39.2)	-	-	-	-	20.2	-	-	-	-	-	-	11.2 破損(地輪)、中央部四隅打欠	
31	169-O-X	(12.1)	8.1	4.0	-	-	-	7.8	8.8	-	-	-	-	破損(空・風輪)	
31	1-O-S	(43.5)	5.6	4.0	6.0	6.1	30.2	8.0	9.5	9.2	12.2	12.8	13.2	完形 元禄十一妙寄宿女房 八月十三日 報(202)	
31	炭層	(44.0)	(5.2)	3.0	6.3	4.8	22.7	7.0	7.9	7.6	16.0	19.8	11.2	空輪 輪高84.7cm 輪元高84.7cm 輪厚5.9mm 報(201)	
36	48-O-O	(16.1)	-	-	(8.6)	9.5	-	-	-	-	13.5	13.0	-	破損(火・水輪)	
36	48-O-O	(33.4)	-	-	(8.4)	7.5	17.5	-	-	-	13.3	12.5	14.4	破損(火・水・地輪)	
36	174-O-X	(12.8)	-	-	6.8	6.0	-	-	-	6.3	11.0	11.2	-	破損(火・水輪)	
36	174-O-X	(16.3)	10.0	6.3	-	-	-	10.0	10.5	-	-	-	-	破損(空・風輪)	
36	174-O-X	(22.6)	-	-	-	-	22.6	-	-	-	-	-	-	13.0 破損(地輪)	
36	174-O-X	(16.5)	-	-	-	-	16.5	-	-	-	-	-	-	14.7 破損(地輪)	
36	174-O-X	(23.0)	-	-	-	-	(8.6)	15.0	-	-	-	-	-	14.2 破損(水輪一部と地輪)	

地区	遺構・層位	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	備考	
														報( ) : 報告書遺物番号	
36	174-O-X	(19.0)	•	•	•	•	(19.0)	•	•	•	•	•	•	(11.5)	破損(地輪)
36	174-O-X	(17.3)	5.7	3.2	4.7	3.7	•	8.5	8.0	7.5	12.2	11.7	•		破損(空・屋・火・水輪)
36	174-O-X	(21.5)	•	•	•	8.3	13.2	•	•	•	•	2.5	2.7		破損(水・地輪)
36	174-O-X	(34.9)	•	•	(9.3)	10.4	15.2	•	•	•	14.6	14.0	14.6		破損(火・水・地輪)
36	119-O-U	(8.4)	8.4	•	•	•	•	10.6	•	•	•	•	•		破損(空輪)
37	167-O-C	(20.8)	•	4.2	7.6	9.0	•	•	10.6	8.2	12.7	12.4	•		破損(風・火・水輪)
37	167-O-C	(10.8)	•	•	8.9	10.9	•	•	•	8.8	14.4	14.3	•		破損(火・水輪)
37	167-O-C	(58.7)	11.3	5.1	7.9	8.7	24.7	16.7	13.9	9.8	15.7	15.5	15.9		空輪一部破損
37	167-O-C	(16.5)	•	•	7.5	9.0	•	•	•	17.6	13.9	13.6	•		破損(火・水輪)
37	167-O-C	(14.0)	9.6	5.0	•	•	•	16.0	11.5	•	•	•	•		破損(空・風輪)
37	167-O-C	(15.5)	•	•	6.5	9.0	•	•	•	6.5	12.5	13.0	•		破損(火・水輪)
37	167-O-C	(11.4)	6.2	5.2	•	•	•	7.5	8.1	•	•	•	•		破損(空・板輪)
37	167-O-C	(12.8)	•	•	•	•	12.8	•	•	•	•	•	10.7		破損(地輪)
37	167-O-C	(18.3)	11.5	7.8	•	•	•	11.5	12.5	•	•	•	•		破損(空・風輪)
37	整 地 土	(10.6)	•	•	•	•	10.0	•	•	•	•	•	9.0		破損(地輪)
37	整 地 土	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		板状に破損、計測不能(風・火輪)
37	整 地 土	(15.8)	•	•	•	•	•	15.8	•	•	•	•	•	(6.2)	破損(水・板輪)
37	整 地 土	(12.4)	•	•	5.4	7.0	•	•	•	7.5	10.4	10.5	•		破損(火・水輪)
37	整 地 土	(19.1)	•	•	9.3	9.8	•	•	•	7.5	14.6	14.2	•		破損(火・水輪)
37	整 地 土	(16.2)	•	(2.4)	9.6	(4.2)	•	•	•	5.4	9.6	9.7	•		破損(風・火・水輪)
37	整 地 土	(18.5)	•	•	8.0	10.5	•	•	•	7.0	14.6	15.0	•		破損(火・水輪) 残存部面半分欠損
37	整 地 土	(34.0)	•	•	9.5	9.4	15.1	•	•	5.6	12.5	12.5	12.6		破損(火・水・地輪)
37	整 地 土	(26.2)	•	•	9.7	16.5	•	•	•	•	14.2	14.8			破損(水・地輪)
37	整 地 土	45.2	7.2	4.5	9.5	8.4	15.6	10.5	11.0	9.4	12.8	13.6	12.7		完形
37	整 地 土	(17.3)	•	•	•	7.6	8.7	•	•	•	(10.2)	10.0			破損(水・地輪)
37	整 地 土	(13.6)	8.8	4.8	•	•	•	16.8	12.5	•	•	•	•		破損(空・風輪)
37	整 地 土	51.4	10.6	4.8	9.5	10.5	15.0	16.4	11.5	8.4	14.0	14.1	14.0		完形
37	整 地 土	(36.6)	10.8	5.0	8.0	8.0	(4.8)	11.3	10.5	7.7	13.2	12.7	13.5		地輪破損
37	整 地 土	(17.4)	6.3	3.2	7.9	•	•	8.2	9.6	8.0	12.9	•	•		破損(空・風輪)
37	整 地 土	45.5	9.8	4.5	8.0	9.2	14.0	9.4	10.2	8.4	14.0	13.8	14.0		完形
37	整 地 土	(14.1)	9.2	4.9	•	•	•	16.8	11.0	•	•	•	•		破損(空・風輪)
37	整 地 土	11.8	7.6	4.2	•	•	•	8.6	9.4	•	•	•	•		破損(空・風輪)

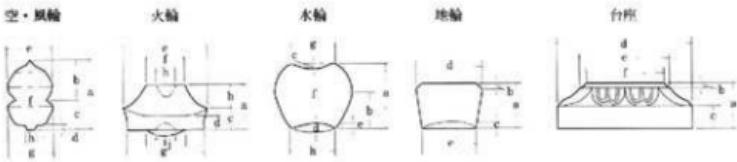
地区	遺構・等級	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	調査	
														報告書番号	備考
37	腰 壁	(13.7)	8.7	5.9	*	*	*	9.0	9.2	*	*	*	*	破損(空・地輪)	
37	腰 壁	51.1	11.0	6.9	8.5	10.1	15.5	10.5	10.9	9.1	14.1	13.4	14.9	完形	
37	腰 壁	43.1	5.2	6.6	7.2	8.8	15.3	10.1	10.1	7.5	13.7	13.2	13.9	完形	
37	底 壁	(16.3)	*	(3.6)	6.3	7.9	*	*	8.4	6.4	10.4	10.2	*	破損(裏・火・水輪)	
37	整 地 土	(16.9)	8.3	4.6	*	*	*	8.9	9.4	*	*	*	*	破損(空・地輪)	
37	整 地 土	10.1	*	4.9	(5.2)	*	*	*	(10.2)	*	*	*	*	破損(裏・火・水輪)	
37	整 地 土	9.0	5.5	2.5	*	*	*	10.2	11.4	*	*	*	*	破損(空・地輪)	
37	整 地 土	12.3	6.5	5.8	*	*	*	10.1	10.6	*	*	*	*	破損(空・地輪)	
37	整 地 土	(13.9)	8.9	5.0	*	*	*	9.1	9.8	*	*	*	*	破損(空・地輪)	
37	整 地 土	15.2	8.8	5.4	*	*	*	10.6	9.7	*	*	*	*	破損(空・地輪)	
37	整 地 土	17.2	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	破損(地輪)	
37	整 地 土	47.2	9.0	4.4	9.3	10.3	14.2	10.9	11.0	8.3	15.0	16.5	15.8	完形	
37	整 地 土	48.5	11.0	3.5	8.0	9.5	17.5	11.5	12.5	11.0	13.8	14.5	13.5	完形	
37	整 地 土	(27.8)	*	*	7.2	8.5	12.1	*	*	8.1	13.6	14.0	14.0	破損(火・水・地輪)	
37	整 地 土	(23.0)	*	5.1	8.4	9.5	*	*	10.0	7.9	13.1	12.5	*	破損(風・火・水輪)	
37	整 地 土	47.8	9.1	4.0	8.5	8.7	17.5	10.0	10.5	9.4	12.6	12.5	12.4	完形	
37	整 地 土	(38.3)	*	*	(8.3)	9.0	21.0	*	*	9.5	14.7	14.7	14.2	破損(火・水・地輪)	
37	整 地 土	(25.4)	*	*	(2.2)	8.3	14.9	*	*	*	12.4	14.9	13.4	破損(火・水・地輪)	
37	整 地 土	(35.9)	9.3	4.5	*	*	*	10.3	9.9	*	*	*	*	破損(空・地輪)	
37	整 地 土	(30.8)	*	*	*	*	*	30.8	*	*	*	*	*	破損(地輪・元禄十五年と信女英徳の文字が見える)	
37	172-OX	(19.7)	6.2	4.5	*	*	*	8.8	8.5	*	*	*	*	破損(空・地輪)	
37	172-OX	(13.8)	8.3	3.5	*	*	*	10.9	10.5	*	*	*	*	破損(空・地輪)	
37	167-OC	(18.5)	7.8	4.1	6.6	*	*	7.4	8.5	6.4	9.7	10.6	*	破損(空・風・火・水輪)	
37	167-OC	(17.8)	7.6	3.8	6.4	*	*	7.5	8.4	6.2	9.7	10.7	*	破損(空・風・火・水輪)	
37	167-OC	(14.4)	9.1	5.3	*	*	*	10.0	11.0	*	*	*	*	破損(空・風・地輪)	
37	167-OC	(39.8)	*	*	6.5	7.8	22.5	*	*	*	15.4	15.2	15.2	破損(火・水・地輪)、信女の文字が見える	
37	24-OO	41.4	7.9	3.5	6.5	10.6	13.5	8.8	9.0	7.9	12.4	12.3	12.4	完形	
37	172-OX	(46.3)	*	5.3	8.2	8.6	18.2	*	10.6	8.0	13.5	12.9	11.0	破損(風・火・水・地輪)	
37	167-OC	(22.4)	*	*	*	7.8	15.0	*	*	*	*	12.3	13.6	破損(水・地輪)	
37	167-OC	(18.0)	*	4.4	7.0	6.6	*	*	7.9	5.7	10.5	10.3	*	破損(風・火・水輪)	
37	167-OC	(33.1)	7.5	5.7	8.3	6.4	(5.2)	9.6	10.6	8.9	12.2	*	*	水・地輪破損(空・風・火・水・地輪)	
37	167-OC	(35.0)	*	*	9.4	10.6	15.6	*	*	8.3	13.8	14.5	14.0	破損(火・水・地輪)	

地区	遺構・層位	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	備考	
														解説(1)	報告書遺物番号
37	167-O-C	48.2	9.2	4.0	8.4	9.5	16.2	9.5	9.6	8.4	15.2	14.4	14.9	完形	
37	167-O-C	46.3	*	*	13.1	7.5	25.7	*	*	*	14.8	14.6	14.0	破損(火・水・地輪)	
37	167-O-C	41.2	*	*	9.2	12.0	20.0	*	*	*	15.3	17.5		破損(火・水・地輪)	
37	167-O-C	29.1	*	*	8.3	7.5	13.3	*	*	6.4	11.6	11.7	12.0	破損(火・水・地輪)	
37	102-O-B	6.7	*	*	6.7	*	*	*	*	*	13.1	*	*	破損(火輪)	
37	整地土	31.3	*	*	6.8	8.1	16.4	*	*	7.2	12.3	12.5	12.9	破損(火・水・地輪)	
37	整地土	14.5	*	*	6.5	8.0	*	*	*	5.0	10.5	11.4	*	破損(火・水輪)	
37	整地土	15.0	*	*	3.5	11.5	*	*	*	15.5	15.5	*		破損(火・水輪)	
37	整地土	39.2	8.4	3.8	6.7	7.4	12.9	9.0	9.7	7.5	11.3	12.6	11.3	完形	
37	整地土	15.6	9.5	6.1	*	*	*	10.5	10.6	*	*	*	*	破損(空・張輪)	
37	整地土	23.1	*	*	*	*	*	23.1	*	*	*	*	*	11.2	破損(地輪)
37	整地土	15.4	*	*	*	*	15.4	*	*	*	*	*	*	9.5	破損(地輪)
37	整地土	14.4	8.2	4.0	2.2	*	*	8.9	8.6	*	*	*	*	破損(空・張輪)	
37	整地土	15.0	*	*	4.5	10.5	*	*	*	*	*	*	16.0	*	破損(火・水・地輪)
37	整地土	18.3	11.0	5.5	1.8	*	*	10.2	10.2	*	*	*	*	破損(空・風輪)	
37	整地土	7.3	7.3	*	*	*	*	7.5	*	*	*	*	*	破損(空輪)	
37	整地土	17.8	*	*	9.2	8.6	*	*	*	8.0	13.6	14.4	*	破損(火・水輪)	
37	整地土	8.8	8.8	*	*	*	*	7.9	*	*	*	*	*	破損(空輪)	
37	整地土	10.7	*	*	*	*	10.7	*	*	*	*	*	*	10.4	破損(地輪)
37	整地土	10.6	10.6	*	*	*	*	10.6	*	*	*	*	*		破損(空輪)
37	167-O-C	58.7	11.8	8.4	10.6	9.0	29.9	11.8	12.0	10.9	14.2	13.3	14.1	出土實木筒形柱(西御門六月廿日・日・火・水・地輪)、筒形柱(山吹木・火・水・地輪)、木筒(12.0cm・木・火・地輪)	
37	整地土	64.2	12.6	6.5	9.7	16.3	25.7	12.2	12.6	9.5	16.6	17.4	16.6	完形(錫室内西扉)	
37	整地土	56.5	10.8	5.7	8.6	16.2	20.6	11.1	11.9	10.1	15.0	14.9	15.0	道廢信士五月廿五日 賀(286)	
37	整地土	65.6	11.0	6.9	10.8	9.8	27.1	12.9	13.6	10.4	17.3	17.5	17.7	完形(元和六年德信士善律也六月十七日 賀(288))	
37	167-O-C	52.4	10.5	6.7	8.4	9.0	17.8	11.3	12.6	8.7	14.6	14.4	14.5	土器(空)(火・水・地輪)、火盆(火・水・地輪)、火盆(火・水・地輪)、火盆(火・水・地輪)	
37	167-O-C	7.4	7.4	*	*	*	*	8.9	*	*	*	*	*	破損(空輪)	
37	167-O-C	13.8	9.6	4.2	*	*	*	8.2	7.6	*	*	*	*	破損(空・張輪)	
37	灰層	11.5	7.0	4.5	*	*	*	10.9	10.5	*	*	*	*	破損(空・張輪)	
37	灰層	17.0	9.5	7.5	*	*	*	10.9	10.0	7.5	*	*	*	破損(空・張輪)	
37	整地土	10.5	8.0	*	*	*	*	10.5	*	*	*	*	*	破損(空輪)	
37	灰層	20.5	*	*	*	(5.0)	15.5	*	*	*	*	*	*	破損(水・地輪)	
37	灰層	15.5	(9.0)	5.5	(1.0)	*	*	12.0	12.0	7.5	*	*	*	破損(空・張輪)	

地区	遺構・部位	備考 報( )：報告書遺物番号										
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
55	286-O-X (10.1)	10.1	*	*	*	*	14.5	*	*	*	*	*
55	整地土	40.4	8.3	4.4	5.1	5.9	17.7	8.0	8.5	6.8	11.1	11.0
55	整地土	47.8	8.0	4.8	7.5	7.8	19.7	9.0	9.8	6.2	11.2	12.2
55	整地土	(66.7) (16.6)	7.1	12.8	13.8	22.3	14.8	15.2	10.7	18.5	17.5	19.3
57	整地土	(28.0)	*	*	6.6	8.0	*	*	6.6	8.0	10.3	*
86	整地土	(30.0)	*	*	8.0	7.0	15.9	*	*	8.0	12.0	12.0
94	整地土	(38.3)	11.0	5.2	19.0	12.1	*	10.5	11.0	8.9	14.5	14.6
94	整地土	50.1	9.3	5.0	8.7	8.0	19.1	11.0	11.1	8.8	12.8	12.5
94	整地土	(29.3)	*	*	8.9	7.9	13.4	*	*	6.0	12.9	12.7
94	整地土	(30.4)	*	*	(8.5)	5.5	17.0	*	*	*	11.1	10.2
94	整地土	32.5	*	*	8.5	19.0	14.8	*	*	6.4	13.8	14.5
94	整地土	(17.2)	*	*	8.2	9.0	*	*	*	8.0	13.7	14.4
96	灰層	(15.9) (8.4)	5.5	(3.0)	*	*	11.0	11.8	7.9	*	*	*
96	灰層	(29.0)	*	*	(5.0)	5.5	18.5	*	*	*	10.5	10.2
96	灰層	(14.0)	9.0	5.0	*	*	*	10.0	10.4	*	*	*
96	灰層	39.9	9.5	4.0	8.5	7.5	13.3	8.5	9.7	8.0	11.7	11.8
96	灰層	32.5	*	*	8.5	11.0	13.0	*	*	7.0	14.7	15.5
96	灰層	(29.5)	*	*	7.5	16.9	(3.0)	*	*	*	(14.6) (12.5)	*
96	灰層	(10.3)	*	*	*	*	10.3	*	*	*	*	23.5
96	灰層	(34.3)	*	*	8.4	8.9	17.9	*	*	7.3	14.0	15.1
96	灰層	(5.6) (2.4) (3.2)	*	*	*	*	11.2	11.2	*	*	*	*
96	灰層	(39.6)	*	5.8	9.3	8.2	16.3	*	10.5	7.7	14.0	12.9
96	灰層	(37.0)	*	4.5	8.5	10.5	13.5	*	10.5	7.5	13.5	15.0
96	灰層	(22.5)	*	5.0	8.0	9.5	*	*	10.8	9.0	13.0	13.5
96	灰層	(38.0)	*	*	(7.3)	8.5	22.2	*	*	*	13.4	13.8
96	灰層	(29.5)	*	*	8.0	8.5	13.6	*	*	(6.5)	12.0	13.0
96	灰層	(40.3)	*	*	8.8	13.0	21.5	*	*	8.2	13.2	13.3
96	灰層	(51.8) (8.5)	5.0	10.0	9.8	18.5	10.5	10.7	8.9	13.2	13.0	13.5
96	灰層	(24.0)	*	*	15.0	9.0	*	*	*	*	8.3	12.9
96	灰層	(52.9) (11.4)	5.0	10.0	8.4	18.1	11.7	12.0	8.5	14.1	13.9	14.2
101	269-O-S (39.1)	*	*	8.6	10.5	17.9	*	*	8.0	14.1	14.5	14.8
101	267-O-I (14)	(石壙)	(11.5)	6.8	*	*	*	15.0	15.3	*	*	*

地区	遺構・層位	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	備考		
														( )	: 報告書遺物番号	
101	267-O I (石 壁)	(16.2)	-	-	-	-	-	16.2	-	-	-	-	-	-	16.7	破損(地輪)
101	267-O I (石 壁)	(11.0)	7.0	4.6	-	-	-	-	9.2	9.2	-	-	-	-	-	破損(空・瓶輪)
101	267-O I (石 壁)	(12.0)	-	4.6	8.0	-	-	-	-	10.0	9.7	13.3	-	-	-	破損(瓶・火輪)
101	267-O I (石 壁)	(16.0)	-	-	-	-	-	16.0	-	-	-	-	-	-	14.0	破損(地輪)
101	267-O I (石 壁)	(26.5)	9.0	5.6	6.5	-	-	16.3	10.7	7.3	12.5	-	-	-	破損(空・瓶・火輪)	
101	267-O I (石 壁)	(13.0)	-	-	6.0	7.0	-	-	-	6.8	11.0	11.5	-	-	-	破損(火・水輪)
101	267-O I (石 壁)	(28.3)	-	-	7.0	8.1	14.2	-	-	6.4	12.2	13.0	12.5	-	-	破損(火・水・地輪)
101	267-O I (石 壁)	(15.0)	16.0	5.0	-	-	-	-	10.7	10.9	-	-	-	-	-	破損(空・瓶輪)
101	267-O I (石 壁)	(43.3)	-	-	(12.6)	10.7	20.5	-	-	-	15.5	15.8	12.5	-	-	破損(火・水・地輪)
101	267-O I (石 壁)	(12.1)	-	-	4.4	7.7	-	-	-	9.6	11.1	12.2	-	-	-	破損(瓶・火輪)
101	267-O I (石 壁)	(29.1)	-	-	-	9.1	11.0	-	-	-	7.5	15.4	16.2	-	-	破損(火・水輪)
101	267-O I (石 壁)	(23.8)	-	-	-	-	7.7	16.1	-	-	-	-	-	13.5	12.4	破損(水・地輪)
101	267-O I (石 壁)	(17.3)	-	-	-	-	(2.5)	14.8	-	-	-	-	-	(12.0)	14.0	破損(水・地輪)
101	267-O I (石 壁)	(16.0)	19.0	6.0	-	-	-	-	11.9	11.0	7.5	-	-	-	-	破損(空・瓶輪)
101	267-O I (石 壁)	(13.0)	7.5	5.5	-	-	-	-	9.5	9.8	7.5	-	-	-	-	破損(空・瓶輪)
101	267-O I (石 壁)	(13.0)	8.5	5.0	-	-	-	-	10.0	10.0	7.0	-	-	-	-	破損(空・瓶輪)
101	267-O I (石 壁)	(13.5)	-	-	-	-	-	13.5	-	-	-	-	-	-	12.0	破損(地輪)
101	267-O I (石 壁)	(13.8)	-	-	-	-	-	13.8	-	-	-	-	-	-	13.4	破損(地輪)
101	267-O I (石 壁)	(44.7)	-	-	(6.9)	10.3	24.5	-	-	-	16.2	15.1	15.5	-	-	破損(火・水・地輪)
101	267-O I (石 壁)	(16.2)	-	-	(7.6)	8.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破損(火・水輪)
101	267-O I (石 壁)	(15.5)	-	-	(8.5)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破損(火・水輪)
101	267-O I (石 壁)	(18.7)	-	5.0	2.6	6.7	-	-	9.1	7.5	11.1	11.6	-	-	-	破損(瓶・火・水輪)
101	267-O I (石 壁)	(24.1)	6.5	3.5	7.1	7.2	-	7.4	7.6	6.3	9.5	9.1	-	-	-	地輪波紋
101	267-O I (石 壁)	(17.4)	-	-	-	7.6	9.8	-	-	-	7.0	12.2	13.5	-	-	破損(火・水輪)
101	267-O I (石 壁)	(12.7)	8.5	6.2	-	-	-	-	12.0	12.5	-	-	-	-	-	破損(空・瓶輪)
101	267-O I (石 壁)	(23.6)	-	-	-	7.6	16.0	-	-	-	-	-	-	13.7	12.3	破損(水・地輪)
101	269-O S	(17.2)	9.5	7.7	-	-	-	-	12.3	12.0	-	-	-	-	-	破損(空・瓶輪)
101	267-O I (石 壁)	(12.5)	-	-	12.5	-	-	-	-	-	9.0	17.8	-	-	-	破損(火輪)
101	267-O I (石 壁)	(16.0)	-	(5.0)	8.5	(2.5)	-	-	-	-	8.0	14.0	-	-	-	破損(火・水輪)
101	267-O I (石 壁)	(17.5)	11.5	5.8	-	-	-	-	10.5	11.0	-	-	-	-	-	破損(空・瓶輪)
105	236-O W	(16.1)	9.0	7.1	-	-	-	-	11.0	12.1	-	-	-	-	-	破損(空・瓶輪)
105	236-O W	(17.5)	-	-	7.5	10.9	-	-	-	-	9.0	13.0	13.5	-	-	破損(火・水輪)

第17表 組合せ式五輪塔一覧表



## 組合せ式五輪塔

※ 空・風輪 a ~ h は計測値。単位はcmで表  
示した。  
( ) 内数字は既存値、参考値  
中の( ) は残存部位を示す。

## 空・風輪

地区	通 総 積 分 数	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	備 考 類 別 番 号 (参考書籍番号)
36	1-05	10.5	12.0	7.5	1.2	12.5	8.0	12.0	4.2			
31	1-05	12.0	12.5	8.5	1.4	~	8.4	7.4	8.6	~		破壊
37	整地土	16.5	18.0	7.0	1.4	10.2	7.5	10.8	4.0			破壊, 住輪上(288-289)
37	372-08	22.3	21.8	9.7	1.8	11.8	11.8	15.8	4.5			元形
37	367-08	28.9	33.4	3.0	3.5	10.7	15.6	19.7	6.1			元形
37	34-00	18.8	18.0	6.5	2.5	18.0	7.7	13.5	2.5			元形
37	367-08	11.5	1.0	6.0	~	9.5	12.0	~				破壊
37	367-08	18.0	21.1	3.2	1.6	12.4	9.4	13.0	2.0			元形
37	367-08	24.0	12.0	10.0	2.0	15.0	8.5	13.5	3.0			破壊
37	整地土	21.2	8.5	10.0	1.7	12.0	7.0	10.0	4.2			元形
37	整地土	11.1	16.3	7.7	1.1	12.0	8.2	12.5	5.1			元形
37	整地土	21.1	12.6	8.0	2.0	12.0	7.0	13.0	2.5			元形
37	整地土	6.7	8.7	~	~	12.0	7.0	~				破壊, 住輪
37	整地土	10.0	~	8.0	2.0	~	8.5	12.7	3.0			破壊, 住輪
37	整地土	15.2	18.2	~	~	11.2	8.4	~				破壊, 住輪
37	367-08	12.0	~	~	~	~	~	~	~			破壊, 住輪
37	367-08	17.3	9.3	3.0	2.0	12.7	7.2	12.8	3.5			元形
56	整地土	30.7	31.5	8.6	1.2	25.5	12.5	26.5	2.2			元形
55	286-08	19.0	8.5	8.7	0.8	11.4	8.0	13.2	3.3			注記無
96	空 輪	23.3	11.2	7.6	2.5	12.5	7.8	13.0	4.2			元形
101	368-05	19.0	11.0	8.0	1.0	15.2	8.2	14.2	4.7			破壊
101	368-05	20.3	13.0	7.2	~	14.0	8.0	15.3	4.5			破壊, 住輪
101	266-05	19.0	11.0	7.0	1.0	12.5	8.5	13.0	4.0			破壊
101	267-05	18.0	10.5	6.5	~	11.7	8.0	11.0	4.0			破壊
101	267-05	20.0	15.0	7.0	~	14.5	8.7	18.2	4.0			破壊
101	267-05	20.0	15.0	7.0	~	14.5	8.7	18.2	4.0			破壊
101	269-06	20.0	12.0	8.3	2.4	15.1	8.0	12.9	4.7			元形
102	1-05	15.0	8.8	6.2	1.0	11.0	7.0	10.0	2.8			元形

## 火 輪

地区	通 総 積 分 数	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	備 考 類 別 番 号 (参考書籍番号)
31	22-00	12.2	6.7	5.9	3.7	21.2	8.7	20.5	4.5	~		
31	31-08	6.9	1.0	5.3	3.5	18.0	12.0	17.8	~			破壊, 上下のはみ 出しなし
31	169-08	12.5	5.5	7.0	4.8	21.0	15.0	21.0	5.0	~		破壊
36	1-05	12.0	5.5	7.5	4.5	21.0	11.8	19.4	4.8	~		元形
37	整地土	7.1	4.7	3.7	1.0	16.8	7.5	17.4	4.0	~	11.9	注記無, 開口部 幅(281)
37	整地土	12.2	8.0	4.8	4.0	22.5	7.8	21.8	5.0	~	19.6	注記無, 左右差 幅(284)
37	167-08	12.0	12.0	5.5	4.5	~	~	~	17.0	~		
37	167-08	15.5	2.0	12.0	5.5	24.0	12.5	24.0	5.0	~		元形
37	167-08	17.5	3.5	14.0	7.0	26.0	14.5	24.5	5.0	~	24.5-26.5	元形
37	167-08	12.0	5.7	3.3	4.2	22.7	11.0	21.5	4.8	~	7.8	元形
37	167-08	12.0	8.0	5.0	4.0	21.0	8.5	20.5	5.0	~	22.5	元形
37	167-08	12.0	8.0	5.0	4.0	21.0	8.5	20.5	5.0	~	22.5	元形
37	167-08	11.5	6.3	5.2	4.0	17.7	7.5	17.7	3.8	~	22.5	元形
37	167-08	11.5	5.5	5.2	3.7	20.4	8.0	20.1	4.5	~	22.5	元形
37	167-08	11.5	5.5	6.1	3.7	20.4	8.0	19.6	4.4	~	22.5	元形
37	167-08	12.0	~	~	~	11.0	10.5	8.0	10.6	4.4		四隅角破壊
37	167-08	15.5	3.8	11.5	5.5	19.0	12.0	22.0	5.4	~		元形
37	167-08	16.0	4.0	3.0	4.2	22.4	10.7	21.9	~			破壊(284)
37	167-08	17.0	7.0	10.0	5.0	25.0	12.0	23.0	5.4	11.5	~	元形
37	167-08	17.0	~	~	~	22.0	14.5	21.0	~			破壊(284)
37	167-08	18.5	3.1	3.4	1.4	18.2	7.0	~	~	4.2	24.0	下端外方(284)
37	167-08	18.7	8.0	10.7	7.2	26.4	12.5	28.0	~			元形
37	167-08	18.7	7.0	5.0	3.8	17.6	9.0	17.0	4.0			元形
37	167-08	19.0	6.0	5.0	3.8	19.2	7.0	19.0	4.2			4隅角(284)
37	167-08	19.7	7.0	5.7	3.5	19.0	8.2	19.0	3.9			城寺の城寺(284)
37	167-08	19.0	7.0	5.5	4.8	22.5	9.4	23.0	4.5			元形
37	167-08	19.0	7.0	5.2	4.2	24.7	7.4	17.5	4.6			元形
37	167-08	14.5	3.5	6.0	4.0	~	8.0	~	4.0	7.0		城寺(284)
37	167-08	14.5	4.0	4.0	4.0	19.2	7.0	19.0	4.2			城寺(284)
37	167-08	14.5	4.0	4.0	4.0	19.2	7.0	19.0	4.2			城寺(284)
37	167-08	14.5	4.0	4.0	4.0	19.2	7.0	19.0	4.2			城寺(284)
37	167-08	14.5	4.0	4.0	4.0	21.5	8.0	21.5	4.5			元形
37	167-08	14.6	8.1	8.2	3.3	24.2	10.0	23.5	4.4			元形, 城寺(284)
37	167-08	12.0	6.0	6.0	4.0	21.7	8.5	21.0	5.0			元形
37	167-08	13.0	8.0	8.2	4.1	20.3	8.3	18.7	4.6			城寺(284)

## 組合せ式五輪塔

※ 火輪 a～f は計測値、( ) 内数値  
は残存数、和泉砂岩製以外は備  
考欄中に材質を記した。

※ 水輪 a～h は計測値、単位はcmで表  
示した。

( ) 内数値は残存数、上部、  
下部がくぼ形を基本としている。  
計測可能なものについては記入  
した。

※ 地輪 a～e は計測値、単位(cm)で表  
示した。

## 水 輪

地区	遺 墓 号	a	b	c	d	e	f	g	h	備考	
										名	部・残存遺物番号
30	387-08	14.0	8.4	—	—	—	18.0	11.1	10.7	元形	下部から側面にかけて傾斜
30	387-09	16.7	10.5	—	1.6	—	21.5	10.6	9.7	元形	下部中央突出
30	387-08	14.0	8.2	—	—	—	21.0	10.6	10.1	元形	下部から側面突出
30	387-08	20.5	14.0	—	1.2	0.7	22.0	10.5	8.6	元形	下部から側面突出
30	387-08	16.0	10.0	—	—	—	21.5	11.0	10.5	元形	—
31	整地土	15.6	8.0	—	—	—	23.5	13.0	12.0	元形	—
37	整地土	15.8	10.0	0.9	—	0.0	21.4	8.8	9.3	元形	幅(200)
37	整地土	15.1	12.0	1.0	—	1.2	25.1	11.0	10.3	元形	幅(200)
37	灰 壤	17.0	9.1	3.0	3.0	3.0	26.2	11.1	11.5	元形	—
37	整地土	17.8	10.0	—	—	—	25.0	12.5	10.5	元形	—
37	387-01	18.1	12.7	—	2.0	0.5	—	10.8	8.6	上部から側面突出	側面に傾斜
37	387-08	17.4	11.6	*	—	1.0	—	—	—	上部から側面突出にか けて左側に傾斜	側面に傾斜
37	整地土	16.2	8.0	0.7	2.0	0.5	20.3	9.0	9.0	元形	—
37	整地土	17.5	10.4	—	1.2	1.2	21.6	9.1	8.0	元形	—
37	整地土	16.5	10.1	—	—	—	18.8	11.7	11.0	元形	—
96	灰 壤	16.0	10.3	—	—	—	21.5	10.3	9.0	元形	—
100	207-07	17.0	7.0	0.0	—	0.7	22.5	10.0	11.0	元形	—
101	207-05	15.5	10.0	—	—	—	21.5	12.5	12.0	元形	—
101	207-09	15.0	11.0	—	—	—	22.5	12.0	11.0	元形	—
101	207-01	15.0	10.0	—	—	—	20.5	11.7	8.0	元形	—
101	207-01	15.0	10.0	—	—	—	20.5	11.7	8.0	元形	上部から側面突出
101	207-01	15.5	11.5	2.0	—	—	24.0	12.0	12.0	元形	上部から側面突出
101	207-01	16.6	10.5	—	—	—	22.3	10.2	8.5	元形	—
101	207-01	21.1	10.0	—	—	—	22.0	11.0	9.5	元形	—
101	207-01	16.0	9.0	—	—	—	21.5	8.0	8.0	元形	—
101	207-01	15.5	10.8	1.5	—	0.0	20.5	8.0	8.0	元形	—
101	207-01	17.0	10.2	—	—	—	20.0	10.2	9.9	元形	—
101	207-01	15.5	10.5	—	—	—	18.5	9.0	8.0	元形	—
101	207-01	17.2	13.2	—	—	—	17.8	11.1	11.7	元形	—
101	207-01	16.9	9.8	—	—	—	21.5	9.5	8.5	元形	—
101	207-01	16.0	10.0	—	—	—	21.5	9.5	8.5	元形	—

※ 右座 a～f は計測値、( ) 内は残  
存数、単位はcmで表示した。  
側面の意匠の有無等は備考欄中  
に記した。

## 地 輪

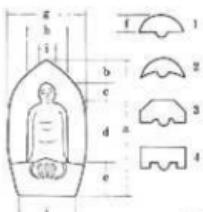
地区	遺 墓 号	a	b	c	d	e	f	備考
III	22-08	22.0	—	—	—	—	13.0	13.0 上部から側面にかけて傾斜
III	169-08	15.0	0.0	0.2	0.3	18.2	18.0 元形	—
III	48-08	18.0	—	—	—	—	22.4	元形
III	171-08	2.7	2.1	—	—	—	18.2	元形、底部のくぼみなし
III	174-08	19.5	0.7	—	—	—	22.4	上部下部同じ側面傾斜
III	187-08	19.7	—	—	3.8	25.4	25.0 元形、底部のくぼみなし、側面に傾斜	
III	整地土	19.0	0.7	—	—	—	23.7	23.5 元形
III	灰 壤	7.0	1.5	—	—	—	10.0	12.5 元形
III	灰 壤	18.5	—	—	—	—	18.0	元形

## 台 座

地区	遺 墓 号	a	b	c	d	e	f	備考
II	22-08	5.0	*	3.3	*	*	*	上部側面に傾斜あり
II	灰 壤	7.5	3.8	4.5	21.0	17.5	15.5 元形、側面2箇所	
II	187-08	5.0	0.8	3.2	21.4	14.5	13.8 元形、各面中央に傾斜化した 溝があり側面2箇所を傾斜する	
II	187-08	11.5	0.8	7.8	22.6	16.2	15.5 元形、各面中央に傾斜化した 溝があり側面2箇所を傾斜する	
II	187-08	7.1	0.8	4.3	21.5	15.7	15.0 元形、各面中央に傾斜化した 溝があり側面2箇所を傾斜する	
II	整地土	8.1	1.2	3.7	19.0	14.5	13.2 元形、各面中央に傾斜化した 溝があり側面2箇所を傾斜する	
II	灰 壤	8.2	0.8	4.5	23.0	15.0	14.7 元形、各面中央に傾斜化した 溝があり側面2箇所を傾斜する	
II	187-08	8.0	0.4	4.6	28.4	24.4	28.2 元形、各面中央に傾斜化した 溝があり側面2箇所を傾斜する	
II	灰 壤	5.5	0.5	2.8	19.0	14.5	13.8 元形、各面中央に傾斜化した 溝があり側面2箇所を傾斜する	
II	整地土	8.1	0.8	4.9	20.0	14.5	14.0 元形、各面中央に傾斜化した 溝があり側面2箇所を傾斜する	
II	整地土	8.4	0.5	2.5	21.0	18.5	—	側面2箇所
II	187-08	15.2	2.0	—	—	—	28.3	22.5 15.5 元形、側面なし、一部凹む
II	187-08	8.1	0.6	4.9	23.1	15.0	15.2 元形、側面なし	
II	187-08	8.2	0.6	5.0	22.5	—	14.7 傾斜直しい	
II	整地土	8.1	1.7	2.6	24.5	17.8	17.2 元形	
II	整地土	7.5	0.4	3.5	23.0	16.2	16.4 元形、側面2箇所	
II	整地土	9.6	1.9	3.2	22.8	15.6	15.1 元形、側面なし	
II	灰 壤	7.2	1.5	3.3	17.4	13.3	12.7 元形、側面2箇所	
II	灰 壤	7.3	0.3	3.9	24.0	16.2	15.8 元形、側面2箇所	
II	灰 壤	10.5	1.0	4.2	28.5	23.5	23.2 元形、側面2箇所	
II	灰 壤	5.8	—	3.4	18.3	15.4	— 元形、側面なし	
II	207-01	6.3	0.7	3.7	25.0	16.7	16.2 元形、側面2箇所	
II	207-01	10.8	0.8	4.0	—	—	16.5	16.5 傾斜化、各面中央に側面1箇所 を傾斜する
II	207-01	11.8	1.5	4.3	26.4	17.0	17.1 傾斜化、各面中央に側面1箇所 を傾斜する	
II	207-01	9.0	—	—	—	—	23.0	23.0 傾斜化

第18表 石仏・塔婆・台座他一覧表

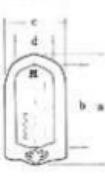
## 石仏



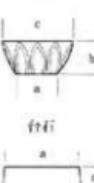
## 塔婆台座



## 位牌形塔婆



## 台座



地区	高さ 幅 深さ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	石 仏		備考 料: 材料費等内訳表 類別、文書、台座
												高さ	幅	
22 雷神土	21.1	4.5	3.2	11.3	-	7.0	17.2	4.9	8.2	-	1	18.1	7.0	頭部、足部、地盤 類別、文書、台座
27 次 類	29.5	9.8	8.8	16.0	6.0	11.5	22.4	10.4	8.0	26.5	2	24.0	11.0	頭部、足部、地盤 類別、文書、台座
27 雷神土	24.0	9.2	8.2	20.0	6.0	12.0	25.6	13.2	6.7	22.5	1	23.0	10.0	頭部、足部、地盤 類別、文書、台座
27 雷神土	21.0	2.0	4.0	6.2	3.0	-	2.5	20.5	-	-	2	19.0	4.0	頭部、足部、地盤 類別、文書、台座
27 雷神土	24.5	5.0	4.5	12.0	13.0	-	17.6	4.0	8.0	16.0	-	22.0	7.0	頭部、足部、地盤 類別、文書、台座
27 雷神土	18.5	2.5	0.8	-	-	-	15.8	3.0	-	-	2	17.0	3.0	頭部、足部、地盤 類別、文書、台座
27 次 類	24.0	-	3.5	11.6	10.7	-	23.4	4.2	8.8	-	1	23.0	10.0	頭部、足部、地盤、文書 類別、文書、台座
27 雷神土	25.2	-	5.0	10.2	10.0	-	-	-	7.0	16.0	2	23.0	10.0	頭部、足部、地盤 類別、文書、台座
27 雷神土	15.0	3.0	3.0	10.0	-	-	-	4.5	-	-	3	14.0	3.0	頭部、足部、地盤 類別、文書、台座
101 267-01 (D)	18.4	4.4	5.8	12.2	-	-	17.6	4.5	8.0	-	1	17.0	7.0	頭部、足部、地盤 類別、文書、台座
101 267-01 (D)	21.0	-	-	12.0	9.0	-	-	-	-	19.0	2	18.0	7.0	頭部、足部、地盤 類別、文書、台座
101 267-01 (D)	26.1	-	-	18.0	7.2	-	22.0	-	8.5	18.5	2	18.0	7.0	頭部、足部、地盤、文書 類別、文書、台座

石仏 a～jは計測値、( ) 内は単位はcmで表示した。計測結果上段には調査所を記した。斜線は該当する番号を記した。

台  
石

地区	高さ 幅 深さ	a	b	c	位 牌 形 塔 婆		備 考 料: 材料費等内訳表 類別、文書、台座
					高さ	幅	
27 雷神土	24.0	-	25.0	-	頭部、足部、地盤 類別、文書、台座	なし	
27 雷神土	23.0	-	23.0	-	頭部、足部、地盤 類別、文書、台座	あり	
27 雷神土	12.0	-	10.0	4.2	頭部の高さ		
27 雷神土	15.0	-	13.0	3.0	頭部の高さ		
27 267-01	25.0	-	20.4	8.2	頭部、足部の高さ あり		
27 267-01	30.0	-	27.0	17.0	頭部、足部の高さ あり		
27 雷神土	23.0	-	16.4	5.6	頭部の高さ、上部、下部脚部あり		
101 267-01 (D)	18.7	-	18.7	7.0	頭部の高さ、上部、下部脚部あり、頭部 の高さ17.2		
101 267-01 (D)	18.0	-	18.0	4.7	頭部、上部、下部脚部あり		

位  
牌  
形  
塔  
婆

地区	高さ 幅 深さ	a	b	c	d	塔 婆		備 考 料: 材料費等内訳表 類別、文書、台座
						高さ	幅	
27 雷神土	18.5	-	15.0	-	-	頭部、足部の高さ 類別、文書、台座		
27 雷神土	24.0	-	13.5	10.0	-	頭部の一部のみの高さ		
30 274-01	45.0	32.4	26.0	15.7	2.0	27.0	12.0	頭部、足部の高さ、安達法印院の 文字の高さと人頭の高さ
27 雷神土	37.0	34.0	19.0	13.8	-	35.0	11.0	頭部、足部の高さ、安達法印院の 文字の高さと人頭の高さ
27 107-01	19.4	-	13.7	-	-	19.0	11.0	頭部、足部の高さ、後背部、胸・肩 の高さ
27 107-01	32.0	12.0	25.7	15.0	-	30.0	11.0	頭部の高さ、脇の入り口人頭の高さ と人頭の高さ
27 107-01	34.5	28.0	19.0	12.0	-	34.0	11.0	頭部、脇の入り口人頭の高さ、頭部 の高さ
27 107-01	23.4	16.0	18.7	12.5	-	23.0	11.0	頭部
27 107-01	29.5	22.0	20.7	15.4	-	29.0	11.0	頭部、足部、二段の影の高さ あり
27 107-01	35.5	12.0	20.4	14.8	-	35.0	11.0	頭部の高さ
27 107-01	8.4	-	14.5	10.2	-	7.0	11.0	頭部の高さ
31 107-01	26.0	-	25.1	17.1	-	25.0	11.0	下部脚部
27 雷神土	12.0	-	10.4	-	-	頭部、足部 類別、文書、台座		
27 雷神土	20.0	-	20.0	-	-	頭部、足部 類別、文書、台座		
27 107-01	48.0	36.3	28.9	19.0	-	上部脚部の高さ、頭部、足部の高さ と頭部の高さ		
27 次 類	42.7	31.7	27.9	18.0	-	42.0	11.0	頭部二十字の篆書と安達法印 院の文字
27 次 類	34.5	25.5	13.0	-	-	34.0	11.0	上部脚部、頭部
27 次 類	31.0	26.0	23.1	18.3	-	30.0	11.0	上部脚部、脇の入り口人頭の高さ と人頭の高さ
101 267-01	21.5	11.0	11.0	10.5	12.0	20.0	11.0	上部脚部、脇の入り口人頭の高さ と人頭の高さ
101 267-01	26.0	13.0	23.0	25.0	18.0	26.0	11.0	上部脚部、脇の入り口人頭の高さ と人頭の高さ
101 267-01	26.0	13.0	23.0	25.0	18.0	26.0	11.0	上部脚部、脇の入り口人頭の高さ と人頭の高さ
101 267-01	21.5	11.0	11.0	10.5	12.0	20.0	11.0	上部脚部、脇の入り口人頭の高さ と人頭の高さ

塔  
婆  
台  
座

地区	高さ 幅 深さ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	塔 婆 台 座		備考 料: 材料費等内訳表 類別、文書、台座
											高さ	幅	
27 雷神土	36.0	35.0	31.8	16.6	17.0	3.5	3.2	3.1	7.0	26.0	11.0	頭部、足部の高さ	
30 274-01	25.0	25.0	25.4	12.8	12.8	33.5	2.5	2.4	2.5	9.0	11.0	頭部	
27 雷神土	12.0	12.0	12.2	5.0	7.8	-	-	-	-	12.0	11.0	頭部	
27 雷神土	45.2	-	26.5	26.5	26.6	4.5	4.0	3.2	-	45.0	11.0	頭部、足部の高さあり	
27 雷神土	25.0	25.0	25.3	13.2	13.2	8.0	-	-	-	25.0	11.0	頭部、足部の高さ	
27 267-01	21.2	26.0	27.4	7.4	7.6	-	3.4	2.4	-	21.0	11.0	頭部、足部の高さ	
101 267-01	21.0	21.0	21.5	-	-	-	-	-	-	21.0	8.0	頭部の一部	

台  
座  
・  
そ  
の  
他

地区	高さ 幅 深さ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	台 座 ・ そ の 他		備考 料: 材料費等内訳表 類別、文書、台座
											高さ	幅	
27 雷神土	16.0	-	16.2	11.0	-	-	-	-	-	16.0	11.0	頭部	
27 雷神土	13.0	5.5	7.5	-	-	-	-	-	-	13.0	7.5	頭部の一部	
27 雷神土	10.0	16.0	8.5	-	-	-	-	-	-	10.0	8.5	頭部の一部	
27 雷神土	7.0	8.0	11.0	-	-	-	-	-	-	7.0	11.0	頭部の一部	
27 雷神土	20.0	9.0	8.8	-	-	-	-	-	-	20.0	8.8	頭部の一部	
27 雷神土	15.0	15.0	17.0	3.0	5.0	-	-	-	-	15.0	5.0	頭部の一部	
27 雷神土	20.0	16.0	16.2	4.1	6.0	2.9	3.4	3.4	4.0	20.0	6.0	頭部の一部	
101 267-01	15.0	15.0	16.0	10.4	-	-	-	-	-	15.0	10.4	頭部の一部	

## 第2項 旧長滝墓地に伴う瓦

### 1 旧長滝墓地整地層出土の瓦

旧長滝墓地（36区）の整地上層中より出土した瓦類は、大きく中世と近世に分類できる。出土した中世瓦は、軒丸瓦3型式・軒平瓦1型式・丸瓦2型式・平瓦5型式に分類でき、道具瓦は3種類に分かれる。またこれらには二次焼成を受けたものが含まれる。なお完形品は一切出土していないので、法量や全体の諸特徴は不明である。一方近世瓦は、軒丸瓦6型式・軒平瓦2型式・丸瓦2型式・平瓦2型式に分類できる。

軒丸瓦1型式（69）は、左巻三巴文を主文とする軒丸瓦で6個体出土し、二次焼成を受けたものが1個体存在する。巴の断面形は台形を呈し、尾は内圓線に接する。外区には計17個の珠文が巡るが、巴文同様扁平である。直立素文の外縁幅は一定しない。瓦当裏面は横方向の丁寧なナデを施し、平滑に整える。丸瓦との接合に際しては、瓦当裏面に軽く押し込むだけで、丸瓦端部には加工を加えていないようである。この丸瓦破片を1片確認している。側面接合部下面観はバチ型を呈する。瓦当面（外縁を含む）全体に離れ砂が付着する。また一部いぶし焼きされたものもある。

軒丸瓦2型式（71）は、左巻三巴文軒丸瓦で1個体出土した。巴の断面は台形で、尾は内圓線に接する。外区には小振りで断面半円形の珠文が20個（復元）巡る。直立素文の外縁まで瓦当部には離れ砂が付着する。瓦当裏面は軒丸瓦1型式同様丁寧なナデを施し、側面接合部下面観も同じくバチ型を呈する。しかし瓦当部への丸瓦接合に際しては、端部を指で捻って尖らせ、深めに差し込むらしい。この丸瓦破片が周辺でも出土している。また瓦当面全体に離れ砂が付着する。

軒丸瓦3型式（72）は、頸部の小破片1片のみであるが、僅かに残る内区から左巻き三巴文と思われる。巴の断面は半円形を呈するが、内圓線がないため、尾は独立する。外区の珠文は小振りで密に配され、断面半円形をなす。推定35個。全体的にかなり磨耗しているため、瓦当裏面の調整など不明な点が多い。

軒丸瓦4型式は2個体を確認した。内区には断面半円形を呈する左巻三巴文があり、尾が接して圓線を形成する。外区には断面半円形の珠文が16個配される。直立素文の外縁は、3型式に比べて幅が広がり低くなる。

軒丸瓦5型式は1個体確認した。4型式に類似した文様で左巻の三巴文を主文とし、外区には16個の珠文が巡る。しかし、巴の尾が互いに接する事無く独立するため、圓線はな

いという相違点がある。

軒丸瓦6型式は2個体を確認した。左巻三巴文であるが、尾は接することなく圓線もない。上記の型式に比べ、珠文がやや大振りになっている。

軒丸瓦7型式(70)は1個体出土した。右巻三巴文で、尾は互いに接しないが内圓線はある。断面半円形の珠文11個配される。

軒丸瓦8型式は1個体出土したにとどまる。軒丸瓦7型式と非常に類似した文様構成であるが、巴の尾の表現と珠文の数が異なるため、別個体とした。

軒丸瓦9型式は外区珠文と外縁部分の破片が1片出土した。珠文は9型式中最も大きく、外縁幅も最も広い。

その他外縁部破片が2片出土しているが、分類不能である。

軒平瓦1型式(73)は、半截菊花文を中心飾りに持つ均整唐草文軒平瓦で、2個体確認した。細い凸線で表現された主葉は、左右に4回ずつ反転するようである。直立素文の外縁を含め、瓦当面には離れ砂は付着していない。頸は段頸で、平瓦との接合に際してどのような加工が施されたか不明である。平瓦部分は凹面が布目と離れ砂が観察でき、凸面は離れ砂が付着する。

軒平瓦2型式(102)は瓦当端部の破片で、1個体(1片)出土した。反転する唐草の形状から、以下の軒平瓦3・4型式とは区別した。脇区幅が広く、軒平瓦1型式との時間差が指摘できる。段頸で、平瓦凸面はナデ、凹面は離れ砂が付着する。

軒平瓦3型式は瓦当端部の破片で、1個体(1片)確認した。唐草が互いに独立する軒平瓦2型式とは異なり、本型式は唐草が接する。その他頸の形状や平瓦の調整は、平瓦2型式と同様である。

軒平瓦4型式は、肉厚な花弁を表現した中心飾りを有する瓦で、1個体(1片)確認した。ただ、文様帶幅が推定11cm程度と大変狭く、出土瓦に棟瓦片が含まれていたことから、棟瓦の軒瓦である可能性がある。

丸瓦1型式(315)は總破片数294片、うち二次焼成を受けたもの114片を数え、四隅計測法によると27枚、二次焼成瓦11枚となる。この丸瓦の特徴は、玉縁から胴部にかけて凹面両側縁に幅20mm余りの面取りを施すことにある。また広幅縁凹面にも幅50mmの面取りがある。凹面には細かい布目とともに、吊り紐Cが認められる。凸面は基本的にナデもしくはケズリによって調整されているが、部分的に繩叩き痕が残る破片もある。狭端縁凸面には面取りがない。玉縁には焼成前に穿孔された径10mm程度の釘穴のある個体が散見される。

大半の個体が須恵器に焼成されているが、いぶし焼きされ黒色を呈するものもある。

丸瓦2型式は縦破片数20片、二次焼成瓦4片で、四隅計測法によると3枚、二次焼成瓦2枚となる。この丸瓦は、両側縁凹面の幅広い面取りが施されないという点で1型式と大きく異なる。凹面には吊り紐Aが認められる。その他は1型式と大きく異なることはない。

丸瓦3型式(313)は破片数18片、四隅計測法では3枚を数える。この型式以降二次焼成を受けた丸瓦は認められない。当形式は内面にコビキ痕が明瞭に残る丸瓦で、玉縁も縮小し、面取り幅も狭くなる。内叩き痕のあるものとないものがある。凸面には成形時の痕跡など一切認められない。

丸瓦4型式は破片数7片、四隅計測法で3枚を数える。内面ゴザ状圧痕を有することが最大の特徴である。

平瓦1型式は、凹凸両面とも離れ砂が付着したものをいう。縦破片数588片、二次焼成瓦237片を数え、四隅計測法によると36枚、2次焼成瓦17枚となる。

平瓦2型式は凸面に離れ砂が、凹面は縦方向のナデを施し成型時に付着した離れ砂を取り除いているが、部分的に離れ砂が残った個体が多い。縦破片数228片、二次焼成瓦71片、四隅計測法では22枚、二次焼成瓦7枚を数える。

平瓦3型式は、凹凸両面ともナデを施した平瓦をいう。縦破片数21片、二次焼成瓦3片、四隅計測法では3枚、二次焼成瓦1枚を数える。

平瓦4型式は凹面に粗い布目が、凸面には離れ砂の付着した縄叩きが認められる。たった1片出土したにとどまった。

平瓦5型式は凸面に離れ砂が、凹面には布目と離れ砂が認められ、一部ナデ消した個体がある。縦破片数24片、二次焼成瓦9片、四隅計測法では3枚、二次焼成瓦1枚となる。しかしこの凹凸面の特徴が、むしろ軒平瓦1型式の平瓦部分に類似していることから、軒平瓦の一部分とみなした方がよいかもしれない。

平瓦6型式は8片出土した。二次焼成を受けたものはない。本型式は凹凸両面とも丁寧にナデ調整を加えたのち磨いて仕上げたもので、銀化したものが多い。

平瓦7型式は5片を数える。平瓦6型式同様、二次焼成を受けたものは存在しない。凹面はナデ調整を加えているため平滑に仕上がるが、凸面は未調整のため表面に細かな離れ砂が付着する。平瓦2型式に近い調整である。

その他分類不能な破片が5片存在した。

棧瓦が数片出土した。平瓦6型式に似た仕上がりである。

鳥糞瓦（75）は、瓦当部分のみの破片が1点出土した。内区には左巻三巴文が配され、巴・外区の珠文の断面は半円形を呈する。軒丸瓦3型式に類似するが、巴の尾が内圓線に接する点で異なる。本資料もかなり摩耗しているため、調整など不明である。

雁振瓦（311）は總破片数26片、二次焼成瓦7片を数え、四隅計測法では5枚、二次焼成を受けたもの2枚となる。丸瓦の両側縁に平瓦を接合したような形状を呈し、凸面には成形時に用いたと思われる布の痕跡が認められる。

その他鬼瓦？と思われる破片（74）が出土した。

## 2 179-OK出土瓦

出土瓦は丸瓦と平瓦2型式で、軒瓦は発見できなかった。

丸瓦は1型式（124）のみ出土した。凸面は細かい格子目叩きを有し、一部雑にナデ消す。凹面は布目が認められる。破片数は5片と少ないが、恐らく玉縁式の丸瓦であろう。

平瓦は大きく2型式に分類できる。平瓦1型式（123）は凸面に細かい格子目叩きを有し、凹面には布目が付着する。模骨痕がないことから1枚作りと考えられる。さらに硬質で須恵質に焼成されたものと、橙色を呈したかも二次焼成を受けたようなものに細別される。後者は①瓦窯出土資料であること、②破片ではあるが全体が橙色を呈することから、酸化焰焼成によるものと考えたい。

平瓦2型式（122）は凸面に横方向のナデを施し、叩き具の痕跡を消したものと指す。凹面は粗い布目が付着する1枚作りの平瓦である。焼成は硬質で須恵質を呈する。

瓦以外の出土遺物としては、燃焼室部より出土した瓦と同じ格子目の叩き痕をもつ須恵質甕体部片が出土している。

## 第2節 長滝・安松遺跡出土の石器（図版198～206）

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 光石鳴巳

### 1. 長滝遺跡

#### 1) 石器群の概要と出土状況

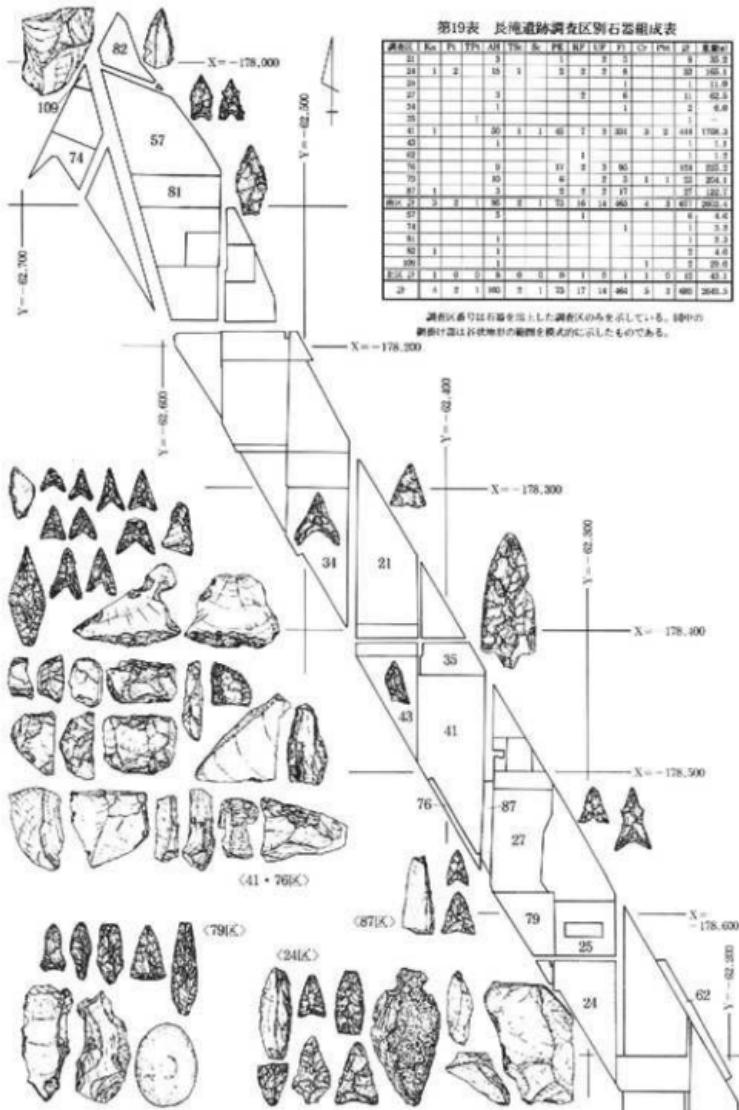
長滝遺跡では17箇所の調査区から、総計689点、重量にして2645.5gの石器が出土した（第203図、第19表）。石器の出土を見た調査区はかなり広範囲におよぶが、石器の出土状況からみると、長滝遺跡は大きく二つの地域に区分してとらえられる。ひとつは、24区から北西に向けて41・76区に達する谷状地形（109-O X）に沿った各地区で、これらの調査区での出土石器の総計は677点にのぼる。もうひとつは遺跡北端に近い地区で、見かけ上は安松遺跡南半のいくつかの調査区とともに、やはり一連の谷状地形に沿った位置を占める。この两者について、便宜的に前者に属する調査区を総称して長滝遺跡南区と呼び、同様に後者の調査区を長滝遺跡北区と呼ぶ場合がある。

多くの場合、石器は谷状地形の埋積土に包含されるなど、原位置から遊離した形での出土である。その中で、41・76区では80%以上の点数（重量比で75%あまり）がまとまって出土している。ここでは個々の出土位置を記録する方法を採用しており、本来の構成にかなり近い形で資料が得られているものと思われる。これについては後段に詳述する。

石器の大部分は縄文時代に帰属する可能性が高いが、個々について帰属する時代・時期は決め難い。旧石器時代のナイフ形石器、弥生時代のものと思われる一部の石鏃など、明らかに時代を違える資料を含んでいる。縄文時代に帰属すると考えられる石器群についても、土器が全く出土しなかったことから、その帰属時期を確定することは困難である。

使用石材は、大多数の剝片石器と石核が安山岩（サヌカイト）で、その他にチャート製の石鏃、剝片がある。凹石に粗粒安山岩、流紋岩が用いられる。以下の記述では特に断らないものは安山岩（サヌカイト）製である。

器種の別でみると<sup>1)</sup>、石鏃が合計で100点を超え、楔形石器とその削片が合わせて70点あまりでこれに次ぐ。特に石鏃は17調査区のうちの13調査区で出土しており、本遺跡出土の石器の中では突出した位置を占める。これに対し、石匙等のスクレイパー類は3点に留まり、石核も5点ときわめて少ない点数である。これらはいずれも大型の器種であり、サンプリングエラーが原因で少數であるとは考えにくいため、こうした点数比は実態とさほどかけ離れたものではないであろう。



第19表 長庵遺跡調査区別石器組成表

調査区	Kn	Pn	ThP	AR	Tkn	Sc	PE	BP	UP	Pf	C	Cr	Pm	J	総数(件)
21			3			1	2	5			9	35	2		
20	1	2	15	1		2	2	6			20	360	1		
27											11	65	3		
24										1	2	65	3		
35											1	2	65	3	
61	1		30	1	1	60	2	9	301	2	2	448	1708.3		
43												1	1		
31													1		
20			9		13	2	3	80			152	355.2			
70			10			6	2	3	5	1	22	264.1			
87	1		3			6	2	2	47		27	185.7			
総計	2	2	160	0	1	72	16	14	465	2	3	487	2023.4		
27			5							1	6	4.4			
74											1	1	3.3		
57												1	1		
81												2	4.0		
31												1	2	29.0	
21	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0.2	45.1	
35	2	1	160	2	1	22	17	14	465	2	3	487	2023.4		

調査区番号は石器を出土した調査区のみを示している。図中の  
斜掛け線は各地盤の範囲を模式的に示したものである。

第203図 長庵遺跡石器出土調査区 S = 1 / 4000

## 2) 41・76区における石器の分布

長滻遺跡のほぼ中央に位置する41・76区では、調査途中で多量の石器の出土が予想されたため、各々の出土座標を記録するという調査法を適用した。そのためもあって、この両地区では合計568点、総重量1993.5gの石器の出土を見た。これは長滻遺跡出土石器総数の82.4%、重量比で75.4%を占める。ちなみに、このうちで座標を記録して取り上げることができたのは238点である(第204図)。器種構成の上では、前項で述べた長滻遺跡全体の傾向に概ね合致するが、加工痕・使用痕ある剝片を含む剝片類の点数が400点あまりと、他地区に比べ突出する。上記のような調査法によって石器の回収率が高くなっていることで、他地区との格差がより強調されていることは否定できない。

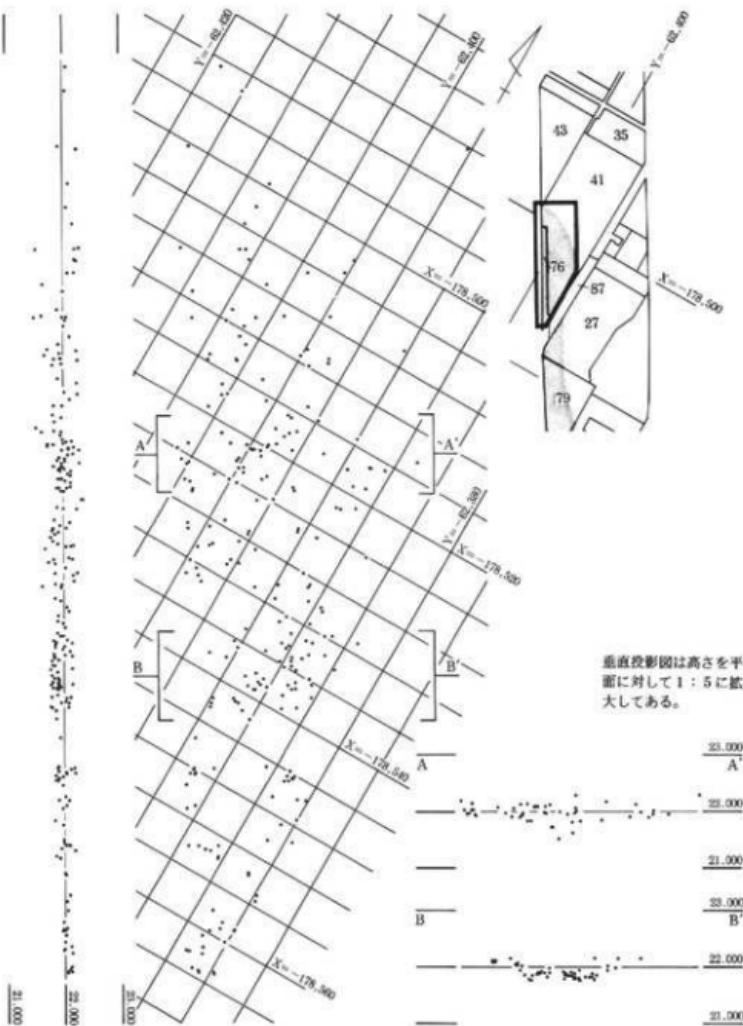
石器の分布範囲は、調査区内を南東から北西に向かう谷状地形(190-O X)の範囲にはば合致しており、長径約80m、短径約20mである。また、南東側に連続する87・27・79・24の各区でも合計94点の出土を見ており、それらはいずれも41・76区と同様に谷状地形での出土である。これらについても、41・76区の石器群とある程度の関連をもつものと理解することが可能であろう。

41・76区での石器の出土層準は、土坑などの遺構の埋土、あるいは谷状地形(190-O X)の埋積土中である砂礫層中に含まれる場合がある。一方で出土石器の中に各種の未製品や相当数の剝片類を含み、少量ながら石核も含まれることから、石器製作の姿にかなり近いことが予想される。しかし分布はどちらかといえば散漫で、器種別の分布を見ても特定の器種が遍在する様子は見られない(第205図)。また、明確に当該時期と考えられる遺構が周辺にないことも考慮すると、原位置を留める資料とするには疑問も多い。しかしその数量を考えると、かなり近接した位置に石器製作跡の存在を想定することもまた可能であろう。ここでの石器集中が本来のセット関係をある程度保っていることは間違いないが、仮に開析谷の埋積に伴って土砂とともに流入した結果としても、きわめて短時間に形成されたものである可能性が高い。あるいは、攪拌を被っているにしても、ここが石器製作跡であった可能性も皆無ではない。一片の土器をも伴わないことについては、ここが定住的な生活空間ではなかったことを反映しているのであろうか。

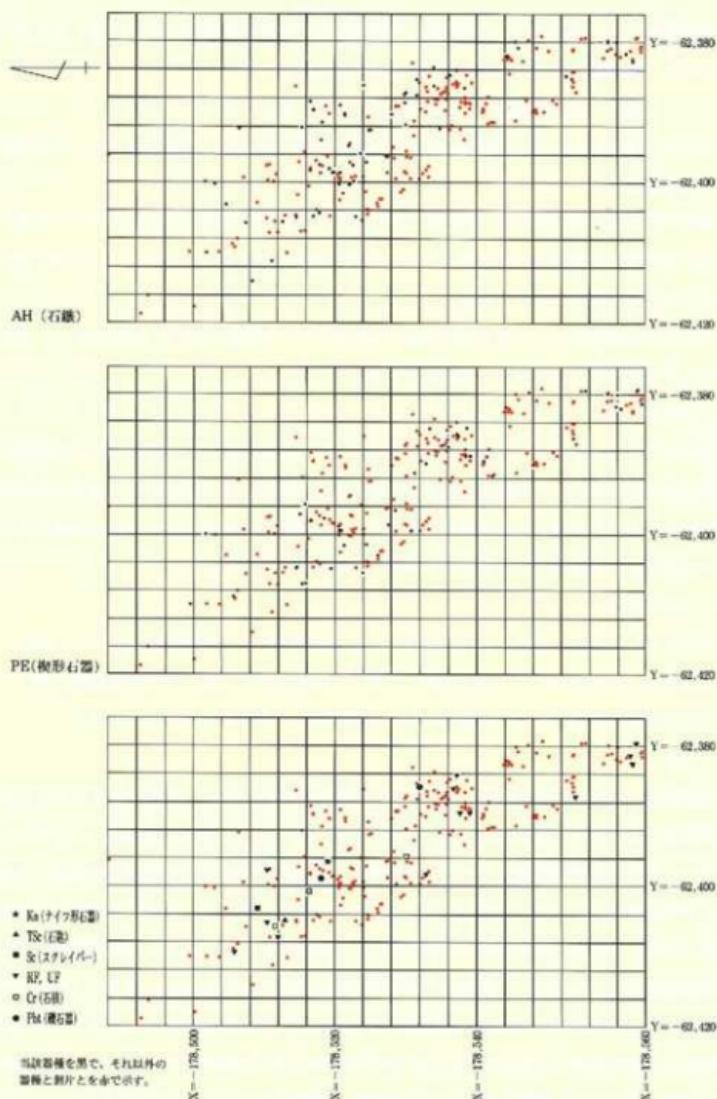
## 3) 出土石器

### a. ナイフ形石器

国府型ナイフ形石器が3点、切出形ナイフ形石器が1点出土している。



第204図 長滝遺跡41・76区石器分布図 S = 1 / 500



第205図 長滝遺跡41・76区器種別石器分布図 S = 1 / 800

国府型のうち、24区出土の完形資料（第206図1）は概ね典型例と考えて差し支えないであろう。国府型としては小型の部類に入るであろうか。

87区出土資料（第206図2）は素材剥片の打点の位置から推定して全長の3分の1ほどを欠いていると思われる。調整加工がかなり深くにまでおよび、背面のネガティブな面はほとんど除かれている。

82区出土資料（第206図3）は本来、24区出土の完形資料に近い大きさであったと思われる。部分的に二側縁加工する形となり、先端部を尖鋭に仕上げている。ナイフ形石器の中でこれのみが北区の出土である。

41区出土の切出形ナイフ形石器は全長3cmに満たない小型品である（第206図4）。素材剥片の打点部を取り除く形で二側縁加工を施している。

#### b. 尖頭器

図示したのは24区で出土した2点のうちの1点で（第206図5）、先端部あるいは基部の破片である。いずれとも判断しかねるが、取りあえず基部として図化した。器体表面が泡沫状にひび割れた状態を呈する箇所があることと、破断面の風化の進行が他と相違することから何らかの熱を受けた可能性があるが、詳細は不明である。

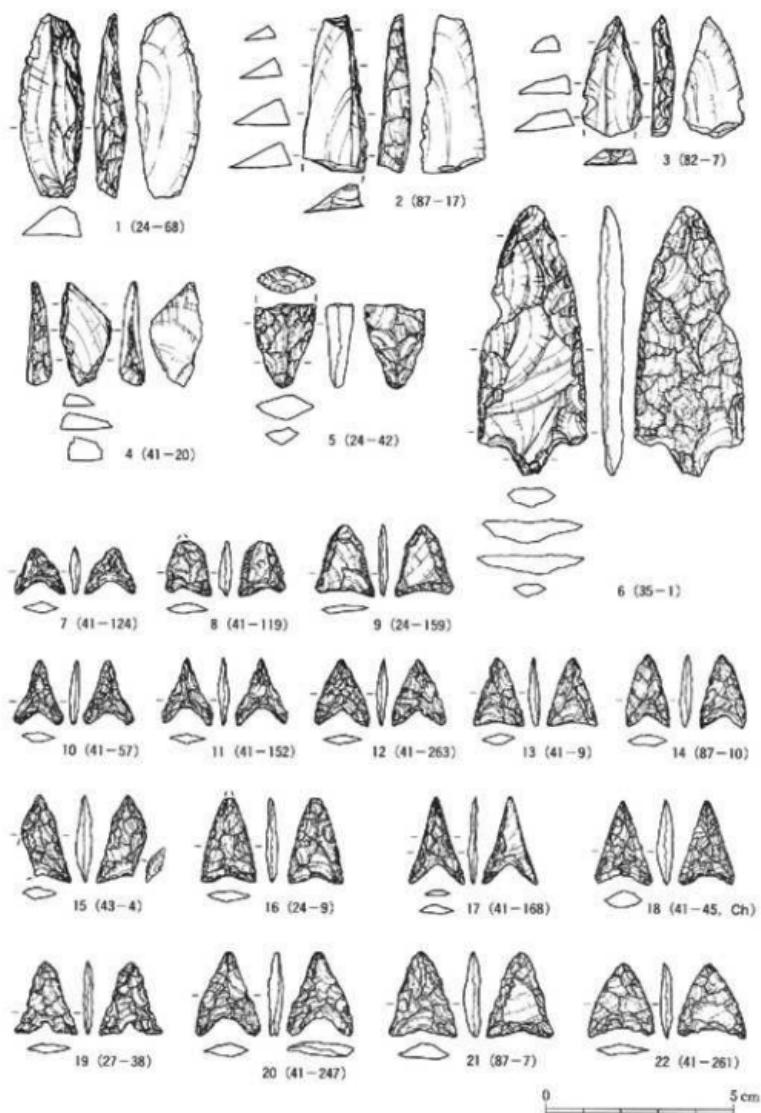
#### c. 有茎尖頭器

比較的幅広で身部と茎部の区別は明瞭である（第206図6）。身部側辺は緩やかに湾曲し、最大幅は返し部に位置する。加工は総じて粗く、図の左面には広く平坦な剥離面が残り、右面には原礫面が残る。加工の偏りにより、断面形はD字形に近くなっている。

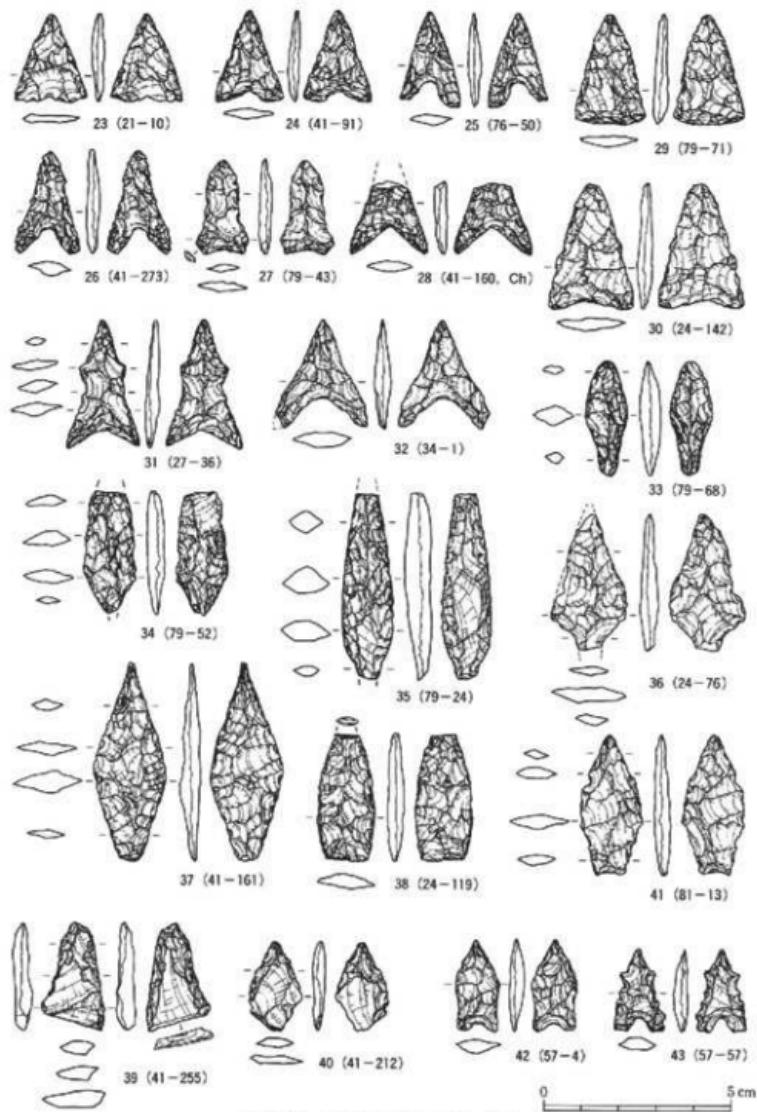
#### d. 石鎌

石鎌の出土点数は100点を超える。ここでは完形資料を主体に、総数の約3分の1に当たる37点を図化した（第206図7～22、第207図23～43）。また、図化し得なかったものについても、模式図に形態を示している（第214図）。形態はバラエティに富んでいるが、9割近くが凹基無茎式であり（87点）、これに若干の平基式、有茎式、あるいは尖基式が含まれる。また、未製品と考えられる3点についても石鎌として扱っている（第207図39、40）。

凹基無茎式については、やや幅広で平面形が正三角形に近いものと、縦長で二等辺三角形に近いものに大別できるほか、先端近くに屈曲点を持ち五角形状に仕上げるものや（第206図15、第207図42）、突起を持つもの（第207図31、43）が特徴的といえよう。基部の抉りも深浅各種がある。脚端部の形状については、先鋭に仕上げるものが大勢を占める中で、抉りを小範囲に留めて脚端部を直線的に残すもの（第206図19、第207図24、43）などが見



第206図 長滝遺跡出土の石器（1）  
ナイフ形石器（1～4）、尖頭器（5）、有茎尖頭器（6）、石核（7～22）



第207図 長瀬遺跡出土の石器（2）  
石錠（23～38、41～43）、石錠未製品（39、40）

受けられる。

有茎式鏃は、比較的細身で身部と茎部とが連続的なもの（第207図33～35）と、やや幅広で茎部が身部に対して著しく細くなるもの（第207図36）の二者がある。そのほか平基式（第207図38）などの形態は至って少数である。

使用石材は大部分が安山岩（サヌカイト）であるが、41区出土資料の中にチャート製のものが2点ある。緑灰色のもの（第206図18）と赤褐色のもの（第207図28）であるが、特に前者は稜線の磨滅と表面の光沢が顕著である。後述するチャート製の剝片とともに、泉州地域における石材利用のあり方を考える上で興味深い資料といえよう。

個別の帰属時期については知る手がかりに乏しい。抉りが深く脚端部を尖鋭に仕上げる凹基無茎式鏃は縄文時代早期にその類例が多い。また有茎式鏃（第207図36）や尖基式鏃（第207図37）などは弥生時代の資料であろうか。

#### e. 石匙・スクレイバー

横形石匙、縦形石匙が各1点、スクレイバーが1点出土している。

横形石匙（第208図44）は三角形に近い形状で、縄文早期・前期に一般的に認められる形態である。素材はおそらく横長の大型剝片で、一端を折り取ることでおよその形状を作り出している。刃部は剝片の末端側で、背面に加工を施した後に腹面側を加工する。つまりの作出も同様に背面側から腹面側の順に加工している。

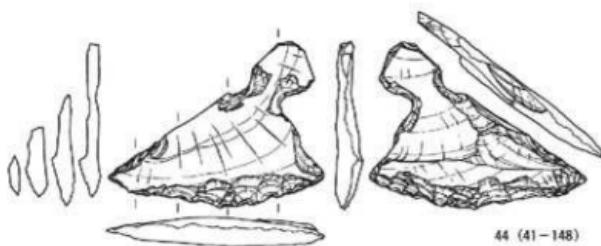
縦形石匙（第208図45）は背面が全面にわたり原礫面の横長剝片を素材とする。素材の形状が意図した形状に近かったのか、加工はきわめて限られ、つまりの作出と刃部加工をするに留まる。形態から縄文中期に帰属する可能性もあるが決め難い。

スクレイバー（第208図46）も横長に近い剝片を素材とし、末端側に刃部を設ける。加工はほぼ刃部のみに限られ、素材の腹面側を加工する。

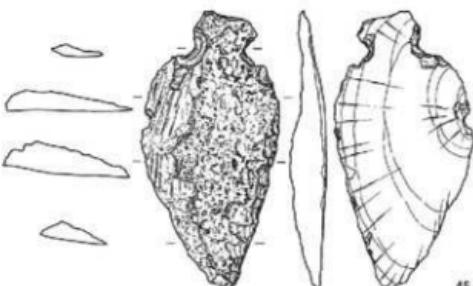
#### f. 楔形石器

楔形石器とその削片は両者合せて73点が出土しており、41区出土資料を主に15点を図化した。楔形石器の要件としては、上下両端あるいは四辺に階段状削離が顕著で、縁辺にしばしば潰れが認められること、両極打撃によるいわゆる截断面をもつことなどがあげられるが、ここで楔形石器として分類したものが必ずしもそれらの全ての条件を満たすわけではない。基本的には、表裏両面が上下双方からの削離面に覆われ、両極打撃により製作されたと考えられるものを楔形石器として一括している。

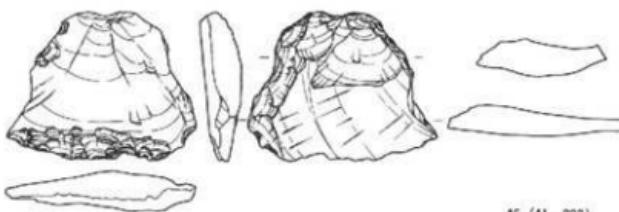
まず截断面の有無と数について分類が可能である。截断面を持たないものは、幅広であ



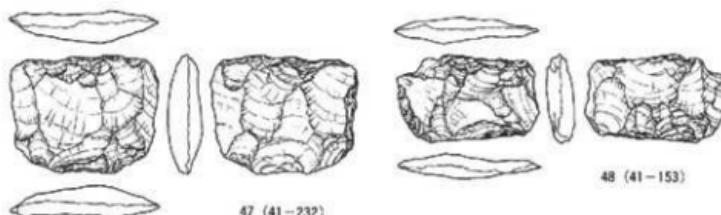
44 (41-148)



45 (24-158)



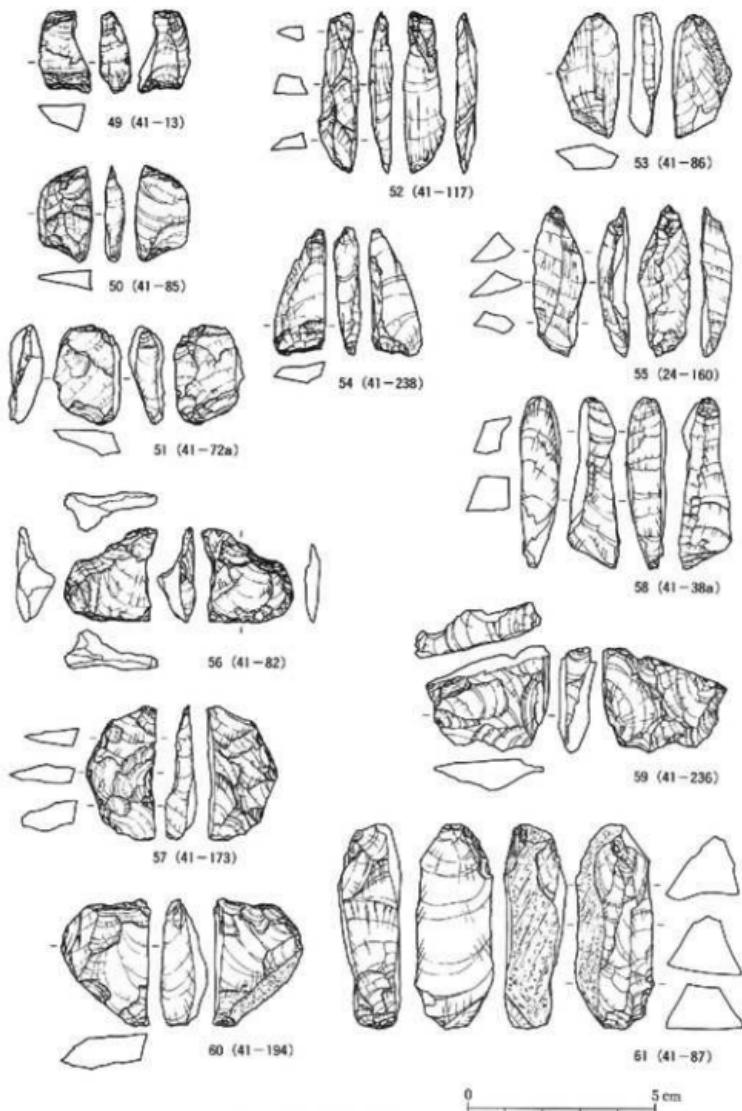
46 (41-223)



47 (41-232)



第208図 長瀬遺跡出土の石器（3）  
石斧（44、45）、スクレイパー（46）、楔形石器（47、48）

第209図 長滝遺跡出土の石器（4）  
楔形石器（49-61）

る場合が多い（第208図47, 48）。また、截断面を持つものは一側縁のみである場合と（第209図49, 50, 52~54, 56, 57, 60）、複数を持つ場合がある。さらに後者の場合には、平行する二側縁である場合と（第209図51, 55, 58, 61）、ほぼ直交する位置関係の二側縁である場合（第209図59）とがある。また、截断面が一側縁のみの場合にも、截断面からの加工、あるいは使用に伴う剥離痕の認められるものがあり（第209図57）、しばしば作業方向を90度転移することがあったことが推定できる。

平面形については四角形に近いものから三角形に近いもの、著しく幅の狭いものなど各種が認められる。とりわけ縦長の形状のもの（第209図52~55）には一般的に楔形石器の削片と呼ばれるものが含まれるが、現実には楔形石器とその削片との区分は明確にし難い。

厚さは5~7mm程度のものが大半であるが、まれに2cmに達する肉厚のものがあり（第209図61）、あるいは石核として機能した可能性を指摘しておきたい。

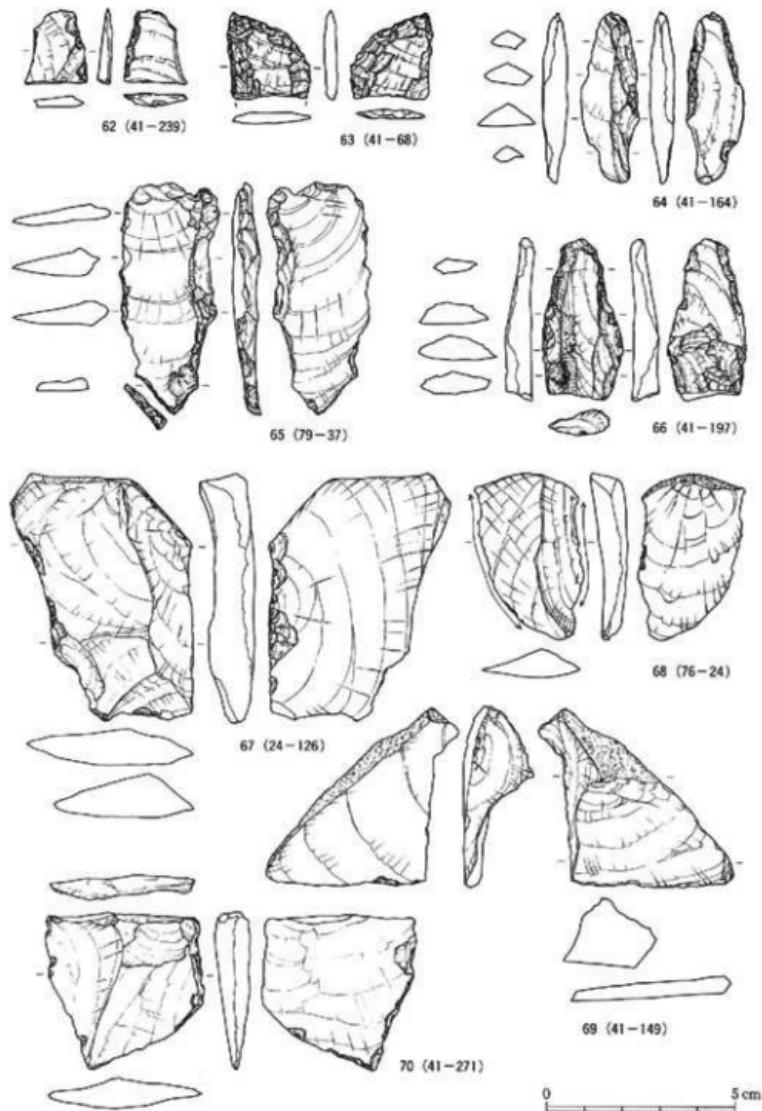
#### g. 加工痕・使用痕ある剝片

剝片の加工痕と使用痕については、肉眼観察による限り、現状で30点余りを抽出している。さらに詳細な観察によって点数は増加するであろう。加工痕は比較的大型の剥離痕が連続するものを、使用痕は小型の、あるいは刃こぼれ状の剥離痕が連続的に観察されるものを指しているが、両者の区別は厳密なものではなく、用語としてはまったく便宜的なものである。両者合わせて9点を図化した。

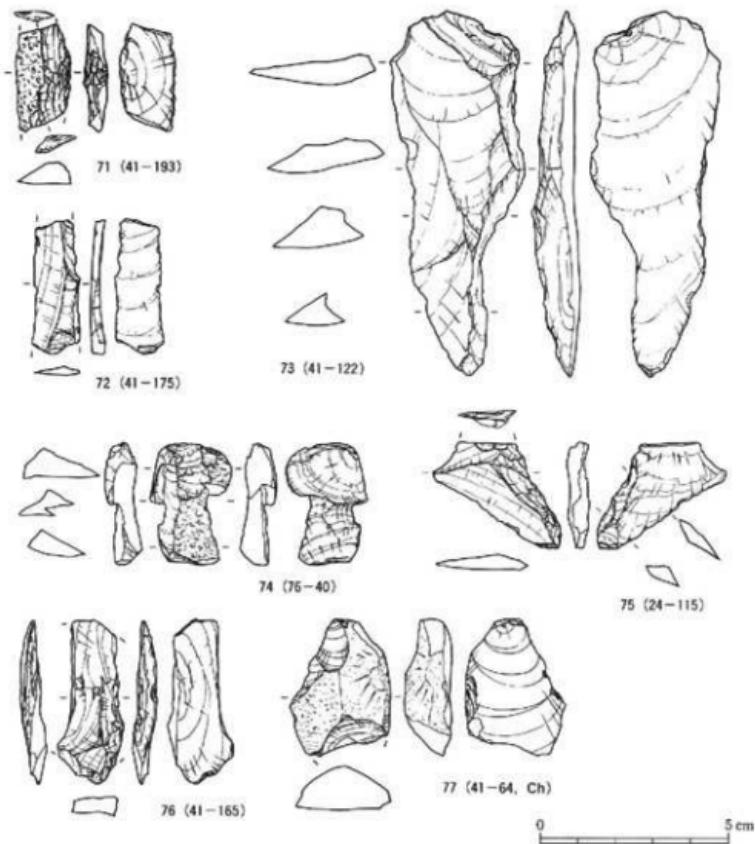
特に加工痕ある剝片としたもので加工の顕著なものには石器の原型と思われるものが多い（第210図62, 64~66）。その中でも全周にわたり加工の顕著な個体（第210図63）については小型の石匙などの断片の可能性があるが、断定し難いため、とりあえず加工痕ある剝片としておく。また、大型品（第210図69, 70）については、スクレイパー類に代わる機能を有した可能性を考えておきたい。

#### h. 剥片

剝片の出土点数は460点余りで、そのうちの420点余りが41~76区での出土である。図化したのは7点にすぎない。これには長さ10cm近い縦長剝片（第211図73）や、背面に石核の底面を取り込む形の横長剝片（第211図71）、両極打撃によって剥離されたもの（第211図74）などがある。また打点部を除くことで、石器の素材を意図したであろうと推定されるもの（第211図75）、あるいは打点部と末端部の双方を折り取り、刃器としての利用が考えられるもの（第211図76）などもある。上述の加工痕・使用痕ある剝片のあり方と併せて、剝片類が石器素材を意図して製作される場合、あるいはそれ自身利器として機能する



第210図 長滝遺跡出土の石器（5）  
加工痕、使用痕のある剝片（62～70）



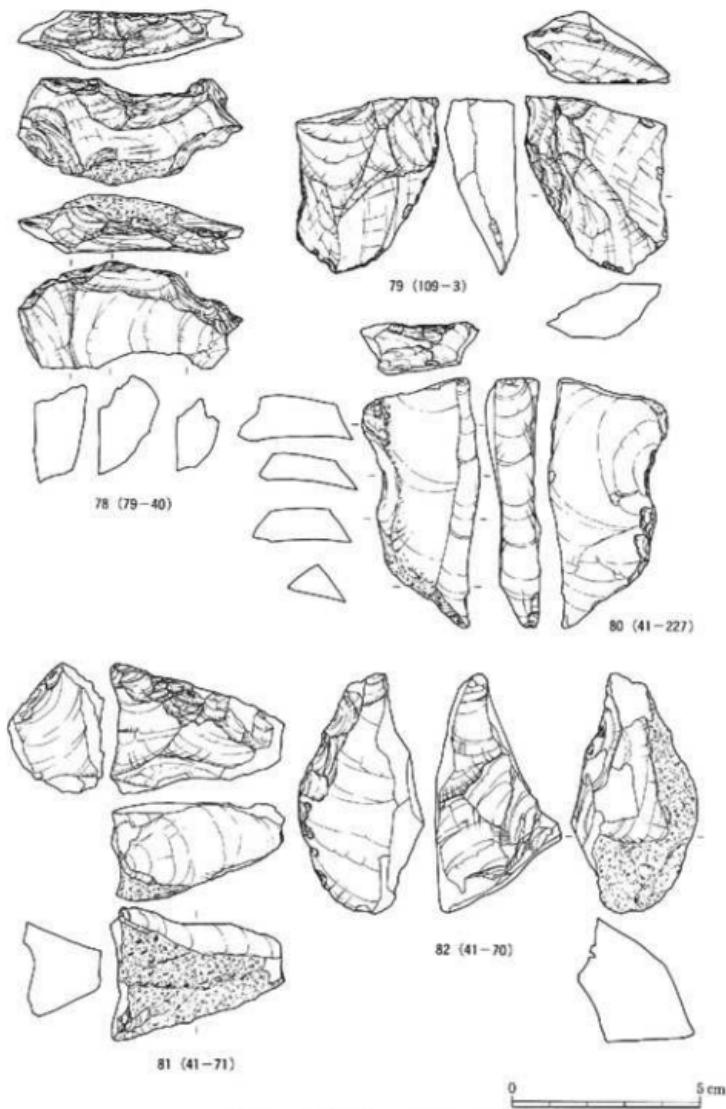
第211図 長滻遺跡出土の石器（6）  
剝片（71～77）

場合など便宜的な使用の局面が幅広くあったことを示しているといえるであろう。

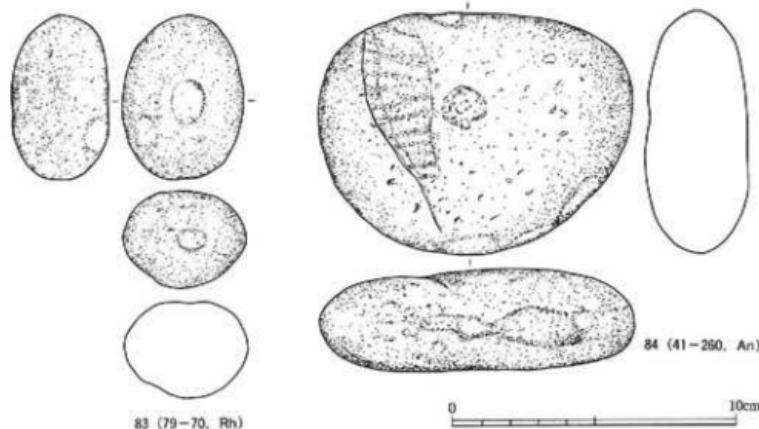
#### i. 石核

5点の石核は長滻遺跡南区から4点、同北区から1点が出土している。素材の別でみると、41区の2点（第212図81、82）が分割した円錐を素材とする他は剥片を素材とするが、剥片素材のものにも原礫面の付着が見られる（第212図78、80）。

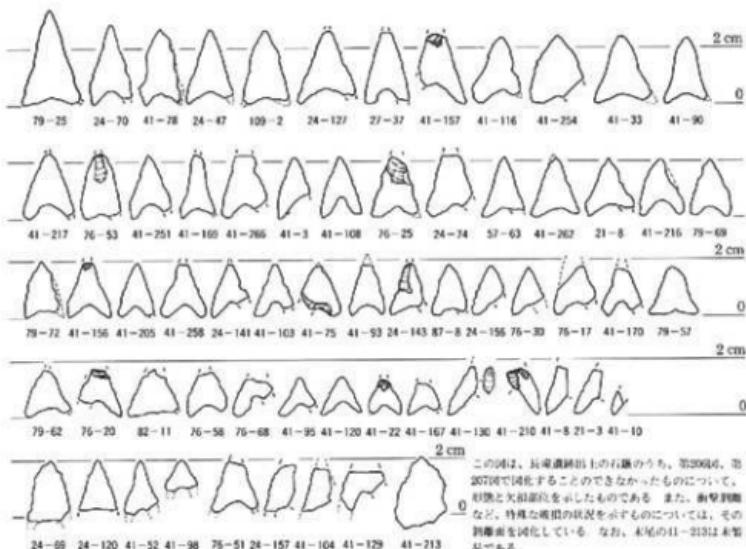
41区出土のうち、1点は大型の剥片の一側縁に沿う形で縦長剥片を剥離する（第212図80）。ただし、この作業面と他の剥離面とは明らかに風化の度合いが異なっており、石核



第212図 長滝遺跡出土の石器（7）  
石核（78～82）



第213図 長滝遺跡出土の石器（8）  
卯石、凹石（83, 84）



この図は、長滝遺跡出土の石鏋のうち、第206号、第207号で図化することのできなかったものについて、形態と欠損部を示したものである。また、衝擊割れなど、特異な破損の状況を示すものについては、その剥離面を同化している。なお、末尾の41-213は未製品である。

第214図 長滝遺跡出土の石器（9）  
石鏋の形態

素材の作出と、縦長剥片の剥離作業との間には時間差のあった可能性が高い。41区の他の2点はいずれも円礫もしくは亜角礫を用い、打面転移を行いながら長幅比1:1前後の剥片を剥離する場合が多い（第212図81, 82）。

北区出土の横長剥片石核（第212図79）には縁辺に微細な剥離痕が認められ、稜線にも摩滅の顯著な箇所があることから、スクレイパーなどに転用された可能性が高い。

#### j. 卵石・凹石

41区で2点、79区で1点が出土している（第213図83, 84）。いずれも凹みや敲打痕等が明瞭でなく、器種認定にいささか苦慮する資料である。あるいは卵石、凹石のいずれでもない円礫を誤認している可能性も皆無ではないが、とりあえず積極的に評価しておきたい。

## 2. 安松遺跡

### 1) 石器群の概要と出土状況

安松遺跡では16調査区で石器の出土を見たが、総点数は30点に満たない。各区分の点数も4点までである（第215図、第20表）。特に出土の集中する調査区ではなく、おそらく原位置を留める資料もないであろう。ただし、石器の出土した調査区は遺跡北半の池（190-O.L.）の周辺にやや偏在する傾向がある。長淹遺跡の項でも若干ふれたが、長淹遺跡北区から安松遺跡に向けて谷状地形が連続しており、石器の分布からもこの両地区は一連のものととらえることができる。あるいは安松遺跡自体も、北半の池（190-O.L.）の周辺の各調査区と、南半の長淹遺跡北区に連続する地区とに区分して理解できるかもしれない。

帰属時期についてはナイフ形石器と石庖丁、一部の石鏟を除き明確にし難いが、長淹遺跡と同様、縄文時代に帰属するものを主体に、旧石器から弥生時代に至る各時期のものを含んでいるものと考えて良いであろう。

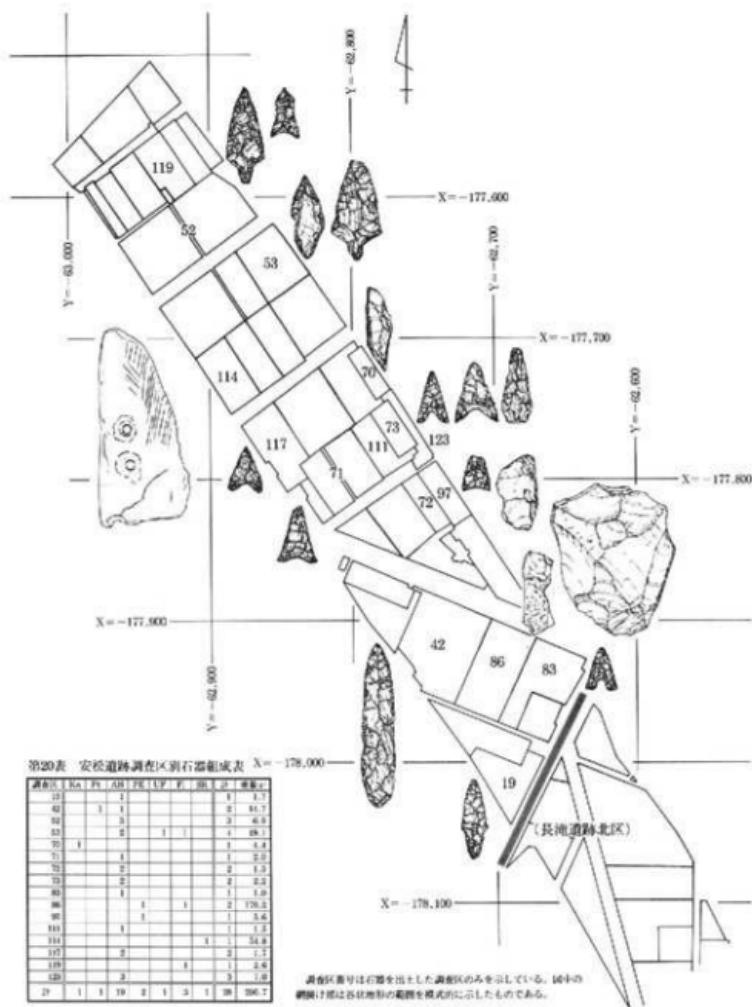
### 2) 出土石器

#### a. ナイフ形石器

縦長剥片を素材とする二側縁加工のナイフ形石器である（第216図1）。背腹両面からの加工により、基部を比較的先鋭に仕上げている。先端を欠いているが、いわゆる茂呂型に近い形状であったものと思われる。

#### b. 尖頭器

完形の両面加工尖頭器である（第216図2）。平行する両側縁を持ち、先端部は尖鋭に、



第215図 安松遺跡石器出土調査区 S = 1 / 4000

基部は丸く収束する。両側縁からの加工は大半が器体中軸に達しており、素材面を残さない。断面形は概ね凸レンズ状を呈する。帰属時期については旧石器から弥生時代まで幅広く可能性があるであろう。その形態や、比較的精緻な加工を施すことなどからは縄文時代、それも草創期の所産との印象が強く、長滝遺跡出土の有茎尖頭器等との関連からも興味深い資料である。しかし安松遺跡では、出土位置は離れるものの、弥生時代のものと考えられる石鏃などが散在しており、あるいは、尖頭器も弥生時代へ帰属する可能性を示唆しているかも知れない。残念ながら、いずれにしても確証はない。

#### c. 石鏃

出土した19点のうち12点を図化した（第216図3～14）。凹基無茎式が13点と最も多く、これに有茎式が5点、平基無茎式1点が加わる。有茎式のうち、茎が胴部に対して著しく細く、断面形が円形に近いもの（第216図13、14）については弥生時代への帰属が確実であり、他にも弥生時代に属するものがいくらか含まれる可能性がある。

#### d. 楔形石器

片面に原礫面を広く残し角柱状を呈するもの（第217図15）、剝片の末端部の形状をほぼ残す形のもの（第217図16）の2点がある。2点ともに上下両端の潰れが顕著でなく、一般的な楔形石器の概念からは外れるかもしれない。

#### e. 剥片

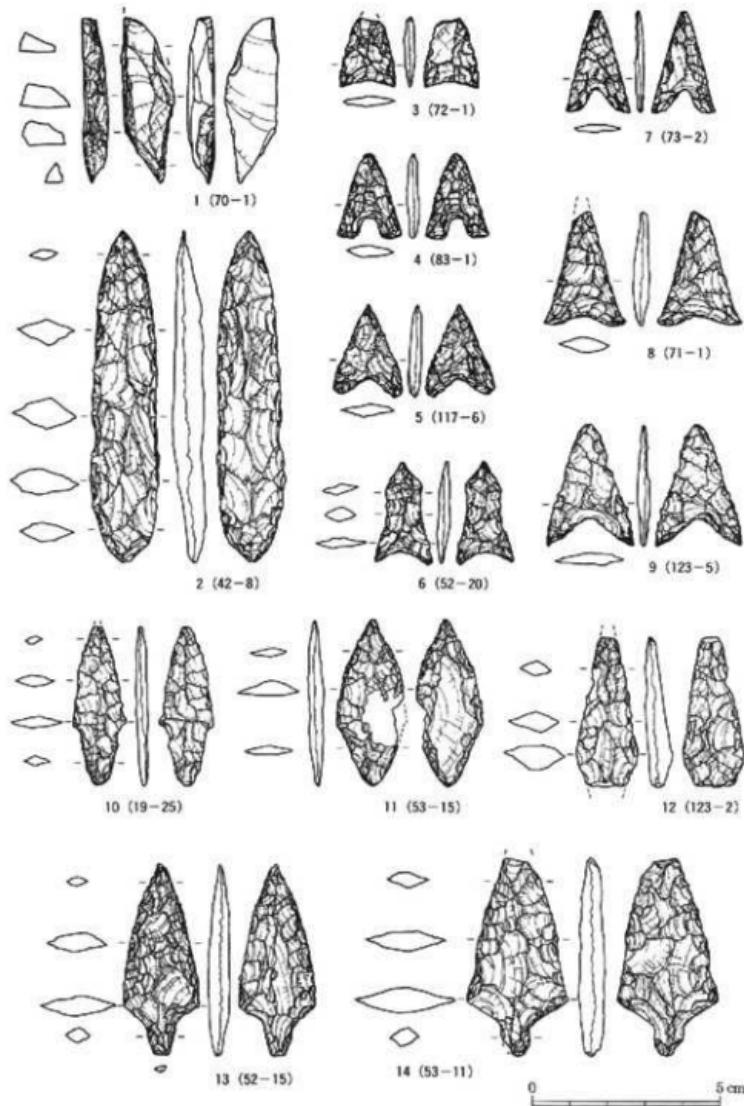
安山岩製の大型剥片を図示した（第217図17）。礫石器を除くと長滝・安松両遺跡の石器資料中で最大である。背面構成から、求心状剝離を行う核石から剝離されたことがうかがわれる。その大きさを考慮すると、あるいは遺跡への石材搬入の形態を反映する資料かも知れない。

#### f. 石庖丁

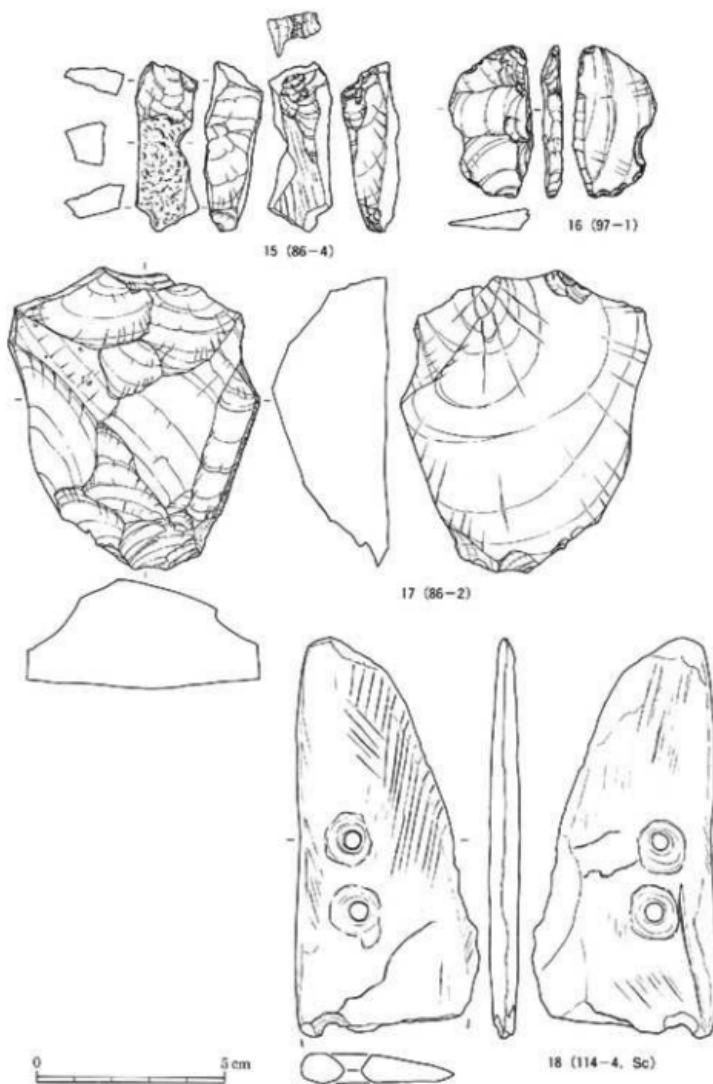
外湾刃半月形磨石庖丁の半損品で、結晶片岩製である（第217図18）。破断面に穿孔が認められ、使用に際してか器体を折断した後に穿孔し直して再生している。現状で器体の中央にある2つの紐孔のうちのいずれか一方が破断以前からのものであるのか、あるいは2つともが新たに穿孔されたものかは判然としないが、いずれにしても、本来の全長は15cm以上であったと思われる。

### 3. 小結

以上に概要を述べてきたうち、長滝遺跡における石器群は一括性に乏しく、時期を明確



第216図 安松遺跡出土の石器（1）  
ナイフ形石器（1）、尖頭器（2）、石鏨（3～14）



第217図 安松遺跡出土の石器（2）  
楔形石器（15, 16）、剥片（17）、石庖丁（18）

にする根拠も欠くという資料的制約を免れない内容ながら、数量的なまとまりをもって出土したことには注目すべきであろう。近畿地方、とりわけ大阪府下における縄文時代の石器群の良好な一括資料がそう多く知られていない現状にあって、こうした資料を積極的に評価してゆくことも、また望まれるところではないであろうか。残念ながら、筆者の力量不足から、与えられた時間の中で石器群の詳細な分析を行うことはできなかったが、一応の報告作業を終えるにあたって、いくつか得られた所見を以下に述べておきたい。

既に述べたように、この石器群の中核をなす41・76区石器群の器種組成を概観すると、数量的に石鏃が突出し、これに楔形石器が次ぐという構成であり、対照的に石匙、スクレイバーといった加工工具類に乏しい。石核の点数が非常に少ない点も特筆されよう。また、こうした傾向は長滻遺跡の石器群全般に関して共通している。

まず石鏃の問題を取り上げよう。石鏃には多様な形態のものがあり、明らかに弥生時代に帰属するものをも含んでいるが、多くのものに関しては縄文時代早期あるいは前期への帰属を考えて大過ないものと思われる。この時期比定については、組成に横型石匙を含むという点からも無理がないであろう。図化にあたって完形資料を優先させたことにより幾分誤解を招くかもしれないが、むろんこれら石鏃には多くの欠損品を含んでいる。この点についてはすべての石鏃について形態を示した模式図（第214図）によってその欠を補うことができるものと思う。そうして全点を概観すると、先端部を欠損する資料に衝撃剝離によるものが目立つという点が指摘できる。このことは即ち、使用を経た後の石鏃が存在していることを示している。これとは別に、明らかに石鏃の素材となる剝片や未製品が何点か抽出できることを考えあわせると、石器群中には石鏃の素材生産と加工、そして使用あるいはその結果としての廃棄という一連のプロセスがすべて含まれている可能性が高いのである。

加工工具類の乏しいという点に関しては、加工痕・使用痕のある剝片といった臨機的な器種がその欠を補う位置にあることは容易に想定できる。しかし、本文中に述べたように、これらの器種の中には、明らかに石鏃その他の器種の未製品と考えられるものを含んでおり、むしろそうした未製品あるいは素材が主体を占めるという印象さえ受ける。いずれにしても加工工具類が少ないという傾向に変わりはないといって良いであろう。

これらの点に関してはさらに詳細な検討を要するが、石鏃の点数が突出するだけでなく、そのライフサイクルのすべてを包含することと、加工工具類が少量であることは、この石器群の残された要因を考える上できわめて示唆的といえよう。あるいは狩猟にその重点を置

いた組成といってても良いかもしれない。

最後に剥片生産技術の問題について若干ふれておきたい。本文中では、石核の点数の少ないことを指摘した。これは例えば、便宜的に石器の点数を100としての比率を対石器指数として表した場合、41・76区では石核は5.1、長滝遺跡全体では4.8となる。長滝遺跡の資料の大部分が縄文時代早期に帰属するという仮定のもとに、大阪府下の早期石器群を代表させる形で東大阪市神並遺跡との比較を行うと、石核の対石器指数は90.6となり、概ね1:1に近い比率にまで跳ね上がる。点数や比率の面での組成の単純な比較は、調査方法や精度の関係から必ずしも実態を反映しない場合があり、慎重にならざるを得ない。しかし、そうした点を考慮に入れても、ここであげた比率の差はある程度両遺跡間の個性の差を反映していると考えるに足るほどの大きな差であるといって良いであろう。

この問題に関連してやはり本文中では、楔形石器としたものの中に石核としての機能が想定できるものが含まれることを指摘しておいた。また、器種構成において楔形石器が石器に次ぐ点数を占める実態は軽視できないであろう。

楔形石器を加工具としてのいわゆる「楔」としてではなく、石核としての機能を想定する考え方や、あるいは縄文時代の石器群において両極打撃による剥片・剝離技術が卓越することは、これまでにも度々指摘されてきている。<sup>4)</sup>また、両極打撃により生じた楔形石器と石核のそれぞれを縁辺の潰れの有無をもって区分した報告事例もあり、この二つの器種がきわめて緊密な位置にあることを示す事例といえるであろう。

長滝遺跡の石器群は、一括性に乏しいことをはじめとして多くの資料的制約があり、この問題にどれだけ有効といえるか判らない。加えて現状では、接合等の作業や、剥片類の形態その他に関する分析に着手できておらず、残念ながら多くを述べる段階にはない。しかし、この石器群を評価するにあたって、両極打撃という技術が卓越する事実を再認識するとともに、我々が楔形石器として認識する器種が、石器群中でかなり重要な位置を占めている可能性を提示しておきたいのである。

ここに紙幅を費やして述べてきたことは、文頭に述べたように、報告作業に一応の区切りをつけるにあたってのとりとめのない私見であり、予察と言うよりむしろ印象に近い内容である。今後、可能な限り作業の追加を行い、上にあげたような課題について言及する機会を持ちたいと考えている。この報告の不足については、将来の別稿によって補うものとしてご寛容を願いたい。